小暮東新山遺跡

群馬県畜産試験場再編整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

２０１１

群 馬 県 農 政 部
群馬県教育委員会

巻頭１　遺跡遠景（南から）

巻頭２　遺跡遠景（北から）

巻頭３　住居状遺構（北から）

巻頭４　住居状遺構 P7 平面（南から）

巻頭５　住居状遺構 P7 断面（東から）

巻頭６　８号炭窯（南西から）

巻頭７　158 号陥し穴（南から）

序

群馬県畜産試験場は、前橋市富士見町小暮にあります。大正 11 年 11 月 に同市岩神町から現在地に移転し、牛、馬、山羊の飼養、改良増殖、配布並びに技術指導等、種畜場として本格的に事業を開始しました。本県の畜産研究の中核施設であると同時に、家畜を気軽に見学できる施設として、一般県民にも親しまれています。平成８年度から２０年度にかけて大規模な再編整備事業が実施され、試験研究のさらなる充実強化が図られました。

この地は旧石器時代、縄文時代、平安時代の遺跡である小暮東新山遺跡としても知られておりました。このため、畜産試験場再編整備事業に先だって、遺跡のうち約３９，０００㎡を発掘調査することとなりました。群馬県教育委員会では、県農政部畜産課、畜産試験場、富士見村教育委員会 (当時) とともに「県立畜産試験場遺跡調査会」を設立し、発掘調査に当たりました。平成９年度から１４年度まで行われた発掘調査の結果、大規模な旧石器時代の遺跡であることがわかり、また、縄文時代、平安時代から近世に至る遺構も見つかりました。

特に数多くの石器がまとまって発見された旧石器時代の住居状遺構は、全国的に見ても貴重な旧石器時代人の生活痕跡として、県内外の考古学研究者の注目を集めました。これについては、関係諸機関、特に県農政部の多大な御理解と御協力により、現地に現状保存することができました。

その後、整理作業の中断などもございましたが、これも関係各位の御協力により、このたびようやく正式報告ができることとなりました。

発掘調査から発掘調査報告書刊行まで、ご協力を頂きました各方面の皆様に、心から感謝申し上げますとともに、本書が地域の歴史を解明するための資料として役立つことを願い、序といたします。

平成２３年１０月

群馬県教育委員会
教育長　福島　金夫

例　　言

1．本書は、群馬県前橋市富士見町大字小暮字東新山に所在する群馬県畜産試験場の再編整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、県立畜産試験場遺跡調査会からの委託を受け、群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課（当時）・旧富士見村（現前橋市）教育委員会の指導の下、株式会社シン技術コンサルが実施した。

3．発掘調査期間と調査面積は以下のとおりである。

第一次調査	平成 10 年 5 月 11 日～平成 11 年 3 月 25 日	44,925㎡
第二次調査	平成 11 年 4 月 10 日～平成 11 年 9 月 29 日	9,735㎡
第三次調査	平成 12 年 9 月 5 日～平成 13 年 3 月 20 日	15,478㎡
第四次調査	平成 13 年 4 月 9 日～平成 14 年 3 月 14 日	25,989㎡
第五次調査	平成 14 年 5 月 9 日～平成 14 年 9 月 27 日	3,473㎡

4．発掘調査の担当調査員は以下のとおりである。

第一次調査　細野高伯・笠原仁史・土沼章一・松本欣士（いずれも株式会社シン技術コンサル）
第二次調査　笠原仁史・松本欣士（株式会社シン技術コンサル）
第三次調査　福嶋正史・松本欣士（株式会社シン技術コンサル）
第四次調査　土沼章一・松本欣士（株式会社シン技術コンサル）
第五次調査　松本欣士（株式会社シン技術コンサル）

5．整理期間は平成 15 年 4 月～平成 16 年 3 月 31 日、及び平成 21 年 6 月 1 日～平成 23 年 10 月 31 日である。

6．整理作業と報告書作成は、県立畜産試験場遺跡調査会（平成 15 年度）、群馬県教育委員会（平成 21 年度～平成 23 年度）からの委託を受け、株式会社シン技術コンサルが実施した。

7．本書の編集担当調査員は以下のとおりである。

編　集　　福嶋正史・松本欣士

なお、執筆分担は以下のとおりである。

Ⅰ	群馬県教育委員会
Ⅴ－1	福嶋正史
Ⅴ－1（3）住居状遺構・Ⅵ－1	細野高伯
附編（自然科学分析）	株式会社古環境研究所
上記以外	松本欣士

8．本遺跡で出土した石器類の石材鑑定は飯島静男氏にお願いした。また、自然科学分析は株式会社古環境研究所に委託した。

9．今回の調査で得られた、図面・写真等の記録資料及び出土遺物は、群馬県教育委員会で保管している。

10．本書で使用した遺構写真は、調査担当者及び阿部福治・岡部貴史（株式会社シン技術コンサル）が撮影し、遺物写真は鹿内三義・杉村武明（株式会社トラスト技研）・福嶋が、デジタルカメラを使用して撮影し、コンピュータにて画像処理及び編集を行った。

11. 今回の発掘調査に従事して下さった方々は、以下のとおりである。記して感謝申し上げる。(五十音順・敬称略)

新井てるみ　荒井利治　新井信子　荒井春男　荒井佳子　石原一茂　伊藤はる江　井上はつえ
今井要蔵　岩崎直道　生方勇治　大泉陽子　大熊久子　大島美樹　大竹輝男　大野京子　大浜きみ恵
岡部光子　岡村鶴子　押木博信　小野里岩雄　小野里ミト　小渕てる子　織間芳江　笠原たく江
片桐澄子　鹿沼國蔵　椛沢八重子　柄澤さわ子　北爪一郎　木暮美恵子　久保 實　倉品克弘
桑子洋子　小林駒吉　小林とめ　小林豊子　小林 勝　近藤たか子　斉藤コメ　斉藤さだゑ
斉藤すみえ　酒井秀子　桜井 弘　佐藤久美子　下田あい子　下田正子　下田正衛　白石直喜
鈴木勝正　鈴木洋子　須田ミヨ子　関口すみ子　関口みよ子　高木清江　高岸伸子　高柳奈巳
田口富美子　武田幸子　田所知美　角田正次郎　長島昭夫　中島和哉　中嶋辰男　中島房雄
永田アイリン　中村新太郎　名塚久枝　奈良岩雄　根岸伊津男　萩原専一　萩原洋子　羽鳥富美子
林 博　林二千子　原田要三　平石和明　蛭間真由美　福岡 勇　船津かほる　船津キヨ　古沢真一郎
古沢 実　松倉菊江　松倉りつ　松橋栄三郎　丸山国男　丸山とく　室田善甫　茂木彩子　安田みゆき
横地伸明　横堀サワ子　横堀弘子　横堀 弘　綿貫志信

12. 整理作業に従事して下さった方々は、以下のとおりである。記して感謝申し上げる。(五十音順・敬称略)

秋元経子　新井かをり　大島美樹　木村真弓　栗山佐江子　黒澤留美子　見野美恵子　木暮尚樹
斉藤文江　鈴木澄江　高橋孝子　中里洋子　成田典信　引田有美　堀地文子　宮﨑昌子　大和律子
横塚由佳　吉田瑠美子

本遺跡の発掘調査から報告書刊行に至るまで、下記の諸氏・諸機関にご協力及びご指導を賜った。記して感謝申し上げる。(敬称略)

群馬県畜産試験場　財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団　富士見村教育委員会　前橋市教育委員会
岩宿博物館　加藤空撮　株式会社トラスト技研　株式会社測研　株式会社古環境研究所
須賀建設株式会社　須田工業株式会社　細谷印刷有限会社
麻生敏隆　麻生 優（故人）　安蒜政雄　梅沢重昭　岡本東三　織笠 昭（故人）　織笠明子　加藤 学
鎌田洋昭　川島雅人（故人）　川道 寛　栗島義明　栗原伸好　小島純一　小菅将夫　佐藤宏之
白石浩之　須藤隆司　諏訪間順　早田 勉　大工原豊　田島 新　堤 隆　平田貴正　前原 豊　松沢亜生
八木橋千里　山際哲章　吉井雅勇　四柳 隆

凡　　例

1．本書の遺構挿図の方位は座標北を表し、座標は国家座標Ⅸ系（日本測地系）を用いた。

2．本書で使用した調査区名は、調査時に付したものを変更して使用している。原則として畜産試験場の再編後のエリアで分類したうえで、さらにA･B…と枝番を付した（第Ⅲ章　調査の方法と経過参照）。

3．第１図は国土地理院発行の２万５千分の１地形図「渋川」を使用した。

4．第２図は旧富士見村役場発行の２千５百分の１都市計画図を使用した。

5．遺構挿図のうち旧石器ブロック遺物分布図の縮尺は１/60・１/80、縄文時代以降のものは１/60を基本とし、これと異なる場合も含めて図中に縮尺を示した。

6．遺物挿図の縮尺は石器３/４、土器類１/３を基本とし、これと異なる場合は個別に縮尺を示した。

7．遺物写真図版の縮尺は実測図縮尺と同一とし、これと異なる場合は個別に縮尺を表示した。

8．遺構番号は、原則として調査時に付したものを使用しているが、多年度に亘る調査の折に欠番とされたもの、整理の段階で遺構種別を変更したもの、人為的ではないと判断したため報告からはずしたものがあり、欠番が生じている。

9．旧石器ブロック出土遺物一覧表の取上げ番号は調査時に付した遺物番号をそのまま使用している。このうち整理段階で遺物と認定しなかったものは欠番とし、計測値等に「―」を記入している。また、同表に記した重さは、基本的に4kg以下のものを100分の１ｇ単位、4kgを超えるものを1g単位または10g単位で計測している。

10. 遺構挿図中の出土遺物のドットの番号は、掲載遺物番号と同一である。

11. 遺構挿図中のトーンは下記のとおりである。

焼土範囲　　炭化物

12. 出土遺物観察表に記した色調は、農林水産省農林水産技術会事務局監修「標準土色帖」2000年版によった。また各遺構断面図における色調については担当者の主観によるものである。

13. 本文に示すテフラは以下の略名を用いた。

浅間A軽石（1783）＝As-A　浅間B軽石（1108）＝As-B　榛名二ツ岳伊香保テフラ（6世紀中葉）＝Hr-FP　榛名二ツ岳渋川テフラ（6世紀初頭）＝Hr-FA　浅間C軽石（4世紀初頭）＝As-C　浅間板鼻黄色軽石（15,000～16,500年前）＝As-YP　浅間大窪沢第1軽石（17,000B.P.）＝As-Ok1
浅間白糸軽石（19,000B.P.）＝As-Sr　浅間板鼻褐色軽石群（19,000～24,000B.P.）＝As-BPグループ
浅間室田軽石（24,000B.P.）＝As-MP　姶良Tn火山灰（28,000～29,000年前）＝AT

14. 本文及び表中に示す石器の器種名は以下の略名を用いた。

ナイフ形石器＝Kn　尖頭器＝Po　スクレイパー＝Sc　彫器＝Bu　石刃＝BL　石核＝Co
二次加工ある剥片＝RF　使用痕ある剥片＝UF　剥片＝F　砕片＝C　ポイントフレーク＝PF
ブランティングチップ＝BC

目　　次

巻頭図版
序
例　言
凡　例
目　次
挿図目次・表目次
巻頭カラー図版目次
図版目次
第Ⅰ章　調査に至る経緯……1
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境……2
第１節　地理的環境……2
第２節　周辺遺跡……2
第Ⅲ章　調査の方法と経過……6
第１節　調査の方法……6
第２節　調査の経過……8
第３節　住居状遺構保存についての経過……13
第Ⅳ章　基本層序……14
第Ⅴ章　検出された遺構と遺物……16
第１節　旧石器時代……16
（１）概　観……16
（２）第１文化層……16
ブロック 11……19
ブロック 13……22
ブロック 20……26
（３）第２文化層……27
住居状遺構……31
ブロック 1……36
ブロック 3……50
ブロック 4……64
ブロック 5……71
ブロック 6……76
ブロック 7……79
ブロック 10……86
ブロック 14……93
ブロック 15……95
ブロック 16……97

ブロック 17……101
ブロック 18……105
ブロック 19……108
（4）第 3 文化層 ……111
ブロック 2 ……111
ブロック 12……114
（5）ブロック外出土の石器……116
第 2 節　縄文時代……118
（1）概　観……118
（2）陥し穴……118
（3）土　坑……204
（4）ピット・遺物包含層……209
（5）遺構外出土遺物……212
第 3 節　歴史時代……215
（1）概　観……215
（2）竪穴住居跡 ……223
（3）炭　窯……226
（4）溝……250
（5）遺構外出土遺物……262
第Ⅵ章　まとめ ……263
第 1 節　旧石器時代住居状遺構について……263
第 2 節　縄文時代の陥し穴について ……264
（1）形態と対象動物及び各類の分布 ……265
（2）構築時期……266
（3）陥し穴構築時の自然環境 ……266
（4）小　結 ……267

附　　編

1．平成 10 年度の分析結果……273
（1）小暮東新山遺跡の土層とテフラ……273
（2）小暮東新山遺跡における放射性炭素（^{14}C）年代測定……278
（3）小暮東新山遺跡出土炭化材の樹種同定……279
（4）小暮東新山遺跡における植物珪酸体分析……280
2．平成 10 年度～平成 12 年度の分析結果……287
（1）小暮東新山遺跡の土層とテフラ……287
（2）小暮東新山遺跡における放射性炭素（^{14}C）年代測定……293
（3）小暮東新山遺跡における植物珪酸体分析……294
3．平成 13 年度の分析結果……298
（1）小暮東新山遺跡の土層とテフラ……298

挿図目次

第 1 図　周辺遺跡……3
第 2 図　遺跡位置図……4
第 3 図　グリッド網図……7
第 4 図　基本層序位置……14
第 5 図　基本土層柱状図……15
第 6 図　テストピット及び旧石器集中ブロック位置図……17
第 7 図　第 1 文化層遺物集中ブロック……18
第 8 図　第 1 文化層ブロック 11 分布図……20
第 9 図　第 1 文化層ブロック 11 出土石器……21
第 10 図　第 1 文化層ブロック 13 分布図（1）・出土石器……23
第 11 図　第 1 文化層ブロック 13 分布図（2）……24
第 12 図　第 1 文化層ブロック 20 分布図……25
第 13 図　第 1 文化層ブロック 20 出土石器……26
第 14 図　第 2 文化層遺物集中ブロック……30
第 15 図　第 2 文化層住居状遺構（1）……32
第 16 図　第 2 文化層住居状遺構（2）……33
第 17 図　第 2 文化層住居状遺構（3）……34
第 18 図　第 2 文化層ブロック 1 分布図（1）……37
第 19 図　第 2 文化層ブロック 1 分布図（2）……38
第 20 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（1）……39
第 21 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（2）……40
第 22 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（3）……41
第 23 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（4）……42
第 24 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（5）……43
第 25 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（6）……44
第 26 図　第 2 文化層ブロック 1 出土石器（7）……45
第 27 図　第 2 文化層ブロック 3 分布図（1）……52
第 28 図　第 2 文化層ブロック 3 分布図（2）……53
第 29 図　第 2 文化層ブロック 3 分布図（3）……54
第 30 図　第 2 文化層ブロック 3 出土石器（1）……55
第 31 図　第 2 文化層ブロック 3 出土石器（2）……56
第 32 図　第 2 文化層ブロック 3 出土石器（3）……57
第 33 図　第 2 文化層ブロック 3 出土石器（4）……58
第 34 図　第 2 文化層ブロック 3 出土石器（5）……59
第 35 図　第 2 文化層ブロック 4 分布図（1）……65
第 36 図　第 2 文化層ブロック 4 分布図（2）……66
第 37 図　第 2 文化層ブロック 4 分布図（3）……67
第 38 図　第 2 文化層ブロック 4 出土石器（1）……68
第 39 図　第 2 文化層ブロック 4 出土石器（2）……69
第 40 図　第 2 文化層ブロック 4 出土石器（3）……70
第 41 図　第 2 文化層ブロック 5 分布図（1）……72
第 42 図　第 2 文化層ブロック 5 出土石器（1）……73
第 43 図　第 2 文化層ブロック 5 分布図（2）・出土石器（2）……74
第 44 図　第 2 文化層ブロック 6・7 分布図（1）……77
第 45 図　第 2 文化層ブロック 6・7 分布図（2）……78
第 46 図　第 2 文化層ブロック 6・7 分布図（3）……79
第 47 図　第 2 文化層ブロック 6 出土石器……80

第 48 図　第 2 文化層ブロック 7 出土石器（1）…… 82
第 49 図　第 2 文化層ブロック 7 出土石器（2）…… 83
第 50 図　第 2 文化層ブロック 7 出土石器（3）…… 84
第 51 図　第 2 文化層ブロック 7 出土石器（4）…… 85
第 52 図　第 2 文化層ブロック 7 出土石器（5）…… 86
第 53 図　第 2 文化層ブロック 10 分布図（1）…… 87
第 54 図　第 2 文化層ブロック 10 分布図（2）…… 88
第 55 図　第 2 文化層ブロック 10 分布図（3）…… 89
第 56 図　第 2 文化層ブロック 10 出土石器（1）…… 90
第 57 図　第 2 文化層ブロック 10 出土石器（2）…… 92
第 58 図　第 2 文化層ブロック 10 出土石器（3）…… 93
第 59 図　第 2 文化層ブロック 14
分布図・出土石器…… 94
第 60 図　第 2 文化層ブロック 15 分布図…… 95
第 61 図　第 2 文化層ブロック 15 出土石器…… 96
第 62 図　第 2 文化層ブロック 16 分布図…… 98
第 63 図　第 2 文化層ブロック 16 出土石器（1）…… 99
第 64 図　第 2 文化層ブロック 16 出土石器（2）…… 100
第 65 図　第 2 文化層ブロック 17 分布図（1）…… 101
第 66 図　第 2 文化層ブロック 17 分布図（2）…… 102
第 67 図　第 2 文化層ブロック 17 出土石器…… 103
第 68 図　第 2 文化層ブロック 18 分布図…… 106
第 69 図　第 2 文化層ブロック 18 出土石器…… 107
第 70 図　第 2 文化層ブロック 19
分布図・出土石器（1）…… 109
第 71 図　第 2 文化層ブロック 19 出土石器（2）…… 110
第 72 図　第 3 文化層遺物集中ブロック …… 112
第 73 図　第 3 文化層ブロック 2
分布図・出土石器…… 113
第 74 図　第 3 文化層ブロック 12
分布図・出土石器（1）…… 115
第 75 図　第 3 文化層ブロック 12 出土石器（2）…… 116
第 76 図　ブロック外出土石器…… 117
第 77 図　縄文時代全体図（1/3,500）…… 119
第 78 図　縄文時代全体図　分割図 1 …… 120
第 79 図　縄文時代全体図　分割図 2 …… 121
第 80 図　縄文時代全体図　分割図 3 …… 122
第 81 図　縄文時代全体図　分割図 4 …… 123
第 82 図　縄文時代全体図　分割図 5 …… 124
第 83 図　縄文時代全体図　分割図 6 …… 125
第 84 図　縄文時代全体図　分割図 7 …… 126
第 85 図　縄文時代全体図　分割図 8 …… 127
第 86 図　縄文時代全体図　分割図 9 …… 128
第 87 図　縄文時代全体図　分割図 10 …… 129
第 88 図　縄文時代全体図　分割図 11 …… 130
第 89 図　縄文時代全体図　分割図 12 …… 131
第 90 図　1 ～ 3 号陥し穴 …… 132
第 91 図　4 ～ 6 号陥し穴 …… 133
第 92 図　7 ～ 9 号陥し穴 …… 134
第 93 図　10 ～ 12 号陥し穴 …… 135
第 94 図　13 ～ 16 号陥し穴 …… 136
第 95 図　17 ～ 19 号陥し穴 …… 137
第 96 図　20 ～ 22 号陥し穴 …… 138
第 97 図　23 ～ 25 号陥し穴 …… 139
第 98 図　26 ～ 28 号陥し穴 …… 140
第 99 図　29 ～ 32 号陥し穴 …… 141
第 100 図 33 ～ 35 号陥し穴 …… 142
第 101 図 36 ～ 38 号陥し穴 …… 143
第 102 図 39 ～ 41 号陥し穴 …… 144
第 103 図 42 ～ 45 号陥し穴 …… 145
第 104 図 46 ～ 48 号陥し穴 …… 146
第 105 図 49・51・52 号陥し穴…… 147
第 106 図 53 ～ 56 号陥し穴 …… 148
第 107 図 57 ～ 59 号陥し穴 …… 149
第 108 図 60 ～ 62 号陥し穴 …… 150
第 109 図 63・64 号陥し穴…… 151
第 110 図 65 ～ 67 号陥し穴 …… 152
第 111 図 68 ～ 70 号陥し穴 …… 153
第 112 図 71 ～ 73 号陥し穴 …… 154
第 113 図 74 ～ 77 号陥し穴 …… 155
第 114 図 78 ～ 80 号陥し穴 …… 156
第 115 図 81 ～ 83 号陥し穴 …… 157
第 116 図 84 ～ 86 号陥し穴 …… 158
第 117 図 87 ～ 89 号陥し穴 …… 159
第 118 図 90 ～ 92 号陥し穴 …… 160
第 119 図 93・94 号陥し穴…… 161
第 120 図 95・96 号陥し穴…… 162
第 121 図 97・98 号陥し穴…… 163
第 122 図 99 ～ 101 号陥し穴 …… 164
第 123 図 102 ～ 105 号陥し穴 …… 165
第 124 図 106 ～ 109 号陥し穴 …… 166
第 125 図 110・111・113・114 号陥し穴 …… 167
第 126 図 115 ～ 118 号陥し穴 …… 168
第 127 図 119 ～ 122 号陥し穴 …… 169
第 128 図 123 ～ 126 号陥し穴 …… 170
第 129 図 127 ～ 130 号陥し穴 …… 171

第 130 図 131 ～ 133 号陥し穴 …… 172
第 131 図 134 ～ 136 号陥し穴 …… 173
第 132 図 137 ～ 139 号陥し穴 …… 174
第 133 図 140 ～ 142 号陥し穴 …… 175
第 134 図 144 ～ 146 号陥し穴 …… 176
第 135 図 147 ～ 149 号陥し穴 …… 177
第 136 図 150 ～ 152 号陥し穴 …… 178
第 137 図 153 ～ 155 号陥し穴 …… 179
第 138 図 156 ～ 158 号陥し穴 …… 180
第 139 図 159 ～ 161 号陥し穴 …… 181
第 140 図 162 ～ 165 号陥し穴 …… 182
第 141 図 166 ～ 168 号陥し穴 …… 183
第 142 図 162 ～ 172 号陥し穴 …… 184
第 143 図 173 ～ 175 号陥し穴 …… 185
第 144 図 176 ～ 178 号陥し穴 …… 186
第 145 図 179 ～ 181 号陥し穴 …… 187
第 146 図 182 ～ 184 号陥し穴 …… 188
第 147 図 185 ～ 187 号陥し穴 …… 189
第 148 図 188 ～ 190 号陥し穴 …… 190
第 149 図 191 ～ 193 号陥し穴 …… 191
第 150 図 194 ～ 196 号陥し穴 …… 192
第 151 図 197 ～ 199 号陥し穴 …… 193
第 152 図 200 ～ 203 号陥し穴 …… 194
第 153 図 204 ～ 207 号陥し穴 …… 195
第 154 図 208 ～ 211 号陥し穴 …… 196
第 155 図 212 ～ 214 号陥し穴 …… 197
第 156 図 陥し穴出土遺物 …… 203
第 157 図 1・3・4・8・9 号土坑 …… 204
第 158 図 6・10・11・14・15・17・19 号土坑 …… 205
第 159 図 20・24 ～ 28 号土坑 …… 206
第 160 図 29・30・35・37・38 号土坑 …… 207
第 161 図 1 ～ 13 号ピット及び土器分布図 …… 210
第 162 図 縄文包含層出土遺物 …… 211
第 163 図 遺構外出土遺物（1）…… 212
第 164 図 遺構外出土遺物（2）…… 213
第 165 図 遺構外出土遺物（3）…… 214
第 166 図 歴史時代全体図 …… 216
第 167 図 歴史時代全体図　分割図 1 …… 217
第 168 図 歴史時代全体図　分割図 2 …… 218
第 169 図 歴史時代全体図　分割図 3 …… 219
第 170 図 歴史時代全体図　分割図 4 …… 220
第 171 図 歴史時代全体図　分割図 5 …… 221
第 172 図 歴史時代全体図　分割図 6 …… 222
第 173 図 2 号住居跡 …… 223
第 174 図 2 号住居跡カマド …… 224
第 175 図 2 号住居跡出土遺物（1）…… 225
第 176 図 2 号住居跡出土遺物（2）…… 226
第 177 図 1 号炭窯 …… 227
第 178 図 2 号炭窯 …… 228
第 179 図 3 号炭窯 …… 229
第 180 図 4 号炭窯 …… 230
第 181 図 5 号炭窯 …… 231
第 182 図 6 号炭窯 …… 232
第 183 図 7 号炭窯 …… 233
第 184 図 8 号炭窯 …… 234
第 185 図 9 号炭窯 …… 235
第 186 図 10 号炭窯 …… 236
第 187 図 11 号炭窯 …… 237
第 188 図 12 号炭窯 …… 238
第 189 図 13 号炭窯 …… 239
第 190 図 14 号炭窯 …… 240
第 191 図 15 号炭窯 …… 241
第 192 図 16 号炭窯 …… 242
第 193 図 16 号炭窯出土遺物 …… 243
第 194 図 17 号炭窯 …… 244
第 195 図 18 号炭窯 …… 245
第 196 図 19 号炭窯 …… 246
第 197 図 20 号炭窯 …… 247
第 198 図 21 号炭窯 …… 248
第 199 図 22 号炭窯 …… 249
第 200 図 1 号溝 …… 250
第 201 図 1 号溝出土遺物 …… 251
第 202 図 2 号溝平面図 …… 252
第 203 図 2 号溝断面図 …… 253
第 204 図 3 号溝 …… 254
第 205 図 4・5 号溝 …… 256
第 206 図 6 号溝 …… 257
第 207 図 7・8 号溝 …… 258
第 208 図 10・11 号溝 …… 260
第 209 図 12 号溝 …… 261
第 210 図 遺構外出土遺物 …… 262
第 211 図 1 ～ 4 区陥し穴分布状況（Ⅰ・Ⅱ類）…… 269
第 212 図 1 ～ 4 区陥し穴分布状況（Ⅲ類）…… 270
第 213 図 6・7 区陥し穴分布状況（Ⅲ類）…… 271

表目次

第 1 表　周辺遺跡一覧表 …… 3
第 2 表　第 1 文化層器種・石材組成表 …… 19
第 3 表　第 1 文化層ブロック 11 出土石器組成表…… 19
第 4 表　第 1 文化層ブロック 11
出土石器一覧表（1）…… 21
第 5 表　第 1 文化層ブロック 11
出土石器一覧表（2）…… 22
第 6 表　第 1 文化層ブロック 13
出土石器組成表 …… 22
第 7 表　第 1 文化層ブロック 13
出土石器一覧表（1）…… 22
第 8 表　第 1 文化層ブロック 13
出土石器一覧表（2）…… 24
第 9 表　第 1 文化層ブロック 20 出土石器組成表…… 26
第 10 表　第 1 文化層ブロック 20 出土石器一覧表…… 26
第 11 表　第 2 文化層出土石器組成表（1）…… 28
第 12 表　第 2 文化層出土石器組成表（2）…… 29
第 13 表　第 2 文化層ブロック 1 出土石器組成表…… 36
第 14 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（1）…… 36
第 15 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（2）…… 45
第 16 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（3）…… 46
第 17 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（4）…… 47
第 18 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（5）…… 48
第 19 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（6）…… 49
第 20 表　第 2 文化層ブロック 1
出土石器一覧表（7）…… 50
第 21 表　第 2 文化層ブロック 3 出土石器組成表…… 51
第 22 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（1）…… 54
第 23 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（2）…… 59
第 24 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（3）…… 60
第 25 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（4）…… 61
第 26 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（5）…… 62
第 27 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（6）…… 63
第 28 表　第 2 文化層ブロック 3
出土石器一覧表（7）…… 64
第 29 表　第 2 文化層ブロック 4 出土石器組成表…… 66
第 30 表　第 2 文化層ブロック 4
出土石器一覧表（1）…… 70
第 31 表　第 2 文化層ブロック 4
出土石器一覧表（2）…… 71
第 32 表　第 2 文化層ブロック 5 出土石器組成表…… 75
第 33 表　第 2 文化層ブロック 5 出土石器一覧表…… 75
第 34 表　第 2 文化層ブロック 6 出土石器組成表…… 76
第 35 表　第 2 文化層ブロック 6
出土石器一覧表（1）…… 76
第 36 表　第 2 文化層ブロック 6
出土石器一覧表（2）…… 78
第 37 表　第 2 文化層ブロック 6
出土石器一覧表（3）…… 79
第 38 表　第 2 文化層ブロック 7 出土石器組成表…… 81
第 39 表　第 2 文化層ブロック 7
出土石器一覧表（1）…… 81
第 40 表　第 2 文化層ブロック 7
出土石器一覧表（2）…… 86
第 41 表　第 2 文化層ブロック 10 出土石器組成表…… 91
第 42 表　第 2 文化層ブロック 10
出土石器一覧表（1）…… 91
第 43 表　第 2 文化層ブロック 10
出土石器一覧表（2）…… 92
第 44 表　第 2 文化層ブロック 14 出土石器組成表…… 94
第 45 表　第 2 文化層ブロック 14 出土石器一覧表…… 94
第 46 表　第 2 文化層ブロック 15 出土石器組成表…… 96
第 47 表　第 2 文化層ブロック 15
出土石器一覧表（1）…… 96
第 48 表　第 2 文化層ブロック 15
出土石器一覧表（2）…… 97
第 49 表　第 2 文化層ブロック 16 出土石器組成表…… 97
第 50 表　第 2 文化層ブロック 16
出土石器一覧表（1）…… 98
第 51 表　第 2 文化層ブロック 16

出土石器一覧表（２）…… 99
第 52 表　第２文化層ブロック 17 出土石器組成表…… 104
第 53 表　第２文化層ブロック 17
出土石器一覧表（１）…… 104
第 54 表　第２文化層ブロック 17
出土石器一覧表（２）…… 105
第 55 表　第２文化層ブロック 18 出土石器組成表…… 106
第 56 表　第２文化層ブロック 18 出土石器一覧表…… 108
第 57 表　第２文化層ブロック 19 出土石器組成表…… 109
第 58 表　第２文化層ブロック 19 出土石器一覧表…… 110
第 59 表　第３文化層出土石器組成表…… 111
第 60 表　第３文化層ブロック２出土石器組成表…… 113
第 61 表　第３文化層ブロック２出土石器一覧表…… 113
第 62 表　第３文化層ブロック 12 出土石器組成表…… 114
第 63 表　第３文化層ブロック 12 出土石器一覧表…… 116
第 64 表　ブロック外出土石器一覧表…… 117
第 65 表　陥し穴一覧表（１）…… 198
第 66 表　陥し穴一覧表（２）…… 199
第 67 表　陥し穴一覧表（３）…… 200
第 68 表　陥し穴一覧表（４）…… 201
第 69 表　陥し穴一覧表（５）…… 202
第 70 表　陥し穴出土遺物観察表（土器）…… 204
第 71 表　陥し穴出土遺物観察表（石器）…… 204
第 72 表　土坑一覧表…… 208
第 73 表　ピット一覧表…… 209
第 74 表　縄文包含層出土遺物観察表（１）…… 211
第 75 表　縄文包含層出土遺物観察表（２）…… 212
第 76 表　遺構外出土遺物一覧表（土器）…… 215
第 77 表　遺構外出土遺物一覧表（石器）…… 215
第 78 表　２号住居跡出土遺物観察表…… 224
第 79 表　16 号炭窯出土遺物観察表…… 243
第 80 表　１号溝出土遺物観察表…… 251
第 81 表　遺構外出土遺物観察表…… 262
第 82 表　陥し穴形態分類表…… 268

巻頭カラー図版目次

巻頭１　遺跡遠景（南から）
巻頭２　遺跡遠景（北から）
巻頭３　住居状遺構（北から）
巻頭４　住居状遺構 P7 平面
巻頭５　住居状遺構 P7 断面
巻頭６　８号炭窯
巻頭７　158 号陥し穴

図版目次

PL. １　1-A 区全景・1-B 区全景
PL. ２　2-A 区南西部　第１面・2-A 区北東部　第１面
PL. ３　2-A 区　第２面・2-A 区東部　陥し穴群
PL. ４　2-B 区全景・2-D 区全景
PL. ５　2-C 区全景・2-C 区旧石器ブロック
PL. ６　3-A 区全景・3-B 区全景
PL. ７　3-C 区全景・3-D 区全景
PL. ８　4 区北半・4 区南半
PL. ９　6-D 区全景・6-E 区全景
PL.10　7-A 区全景・7-B 区全景
PL.11　ブロック１　遺物出土状況１～３・住居状遺構下 As-Sr 沈下範囲・ブロック１と住居状遺構
PL.12　住居状遺構　土層断面１～４・P1 ～ P3 平面・P3 土層断面
PL.13　住居状遺構　P4 平面・P4 土層断面・P5 平面・P6 平面・P7 平面・P7 土層断面
ブロック２　遺物出土状況１～２
PL.14　ブロック３　遺物出土状況１～８
PL.15　ブロック４　遺物出土状況１～２・
ブロック５　遺物出土状況１～３・
ブロック６・7　遺物出土状況・
ブロック６　遺物出土状況１～２
PL.16　ブロック７　遺物出土状況１～３・
ブロック 10　遺物出土状況１～４・
ブロック 11　遺物出土状況１
PL.17　ブロック 11　遺物出土状況２・

ブロック 12　遺物出土状況１～２・
ブロック 14　遺物出土状況・
ブロック 15　遺物出土状況１～２・
ブロック 16　遺物出土状況１～２・
PL.18　ブロック 17　遺物出土状況１～２・
ブロック 18　遺物出土状況１～２・
ブロック 19　遺物出土状況１～２・
ブロック 20　遺物出土状況１～２
PL.19　１～８号陥し穴
PL.20　９～ 16 号陥し穴
PL.21　17 ～ 23 号陥し穴
PL.22　24 ～ 32 号陥し穴
PL.23　33 ～ 39 号陥し穴
PL.24　40 ～ 46 号陥し穴
PL.25　47 ～ 49・51 ～ 55 号陥し穴
PL.26　56 ～ 63 号陥し穴
PL.27　64 ～ 71 号陥し穴
PL.28　72 ～ 79 号陥し穴
PL.29　80 ～ 87 号陥し穴
PL.30　88 ～ 96 号陥し穴
PL.31　96 ～ 103 号陥し穴
PL.32　104 ～ 111 号陥し穴
PL.33　113 ～ 120 号陥し穴
PL.34　121 ～ 128 号陥し穴
PL.35　129 ～ 136 号陥し穴
PL.36　137 ～ 142・144 号陥し穴・6-B 区陥し穴
PL.37　145 ～ 152 号陥し穴
PL.38　153 ～ 160 号陥し穴
PL.39　161 ～ 168 号陥し穴
PL.40　169 ～ 175 号陥し穴
PL.41　176 ～ 180・183・184 号陥し穴
PL.42　185 ～ 193 号陥し穴
PL.43　192 ～ 199 号陥し穴
PL.44　200・201・203 ～ 208 号陥し穴
PL.45　209 ～ 214 号陥し穴、10・11 号土坑
PL.46　14・15・17・19・20・24 ～ 26 号土坑
PL.47　27 ～ 29・35・37・38 号土坑、7-B 区縄文土器出土状況
PL.48　２号住居跡・１～６号炭窯
PL.49　７～ 14 号炭窯
PL.50　15 ～ 22 号炭窯
PL.51　１～７号溝
PL.52　８・10 ～ 12 号溝
PL.53　第１文化層　ブロック 11・13・20 出土石器
PL.54　第２文化層　ブロック１出土石器（１）
PL.55　第３文化層　ブロック１出土石器（２）
PL.56　第２文化層　ブロック１出土石器（３）
PL.57　第２文化層　ブロック１出土石器（４）
PL.58　第２文化層　ブロック１出土石器（５）
PL.59　第２文化層　ブロック１出土石器（６）
PL.60　第２文化層　ブロック３出土石器（１）
PL.61　第２文化層　ブロック３出土石器（２）
PL.62　第２文化層　ブロック３出土石器（３）
PL.63　第２文化層　ブロック３出土石器（４）・
ブロック４出土石器（１）
PL.64　第２文化層　ブロック４出土石器（２）
PL.65　第２文化層　ブロック４出土石器（３）・
ブロック５出土石器（１）
PL.66　第２文化層　ブロック５出土石器（２）・
ブロック６出土石器（１）
PL.67　第２文化層　ブロック６出土石器（２）・
ブロック７出土石器（１）
PL.68　第２文化層　ブロック７出土石器（２）
PL.69　第２文化層　ブロック７出土石器（３）
PL.70　第２文化層　ブロック７出土石器（４）
PL.71　第２文化層　ブロック７出土石器（５）
PL.72　第２文化層　ブロック 10 出土石器（１）
PL.73　第２文化層　ブロック 10 出土石器（２）・
ブロック 14・15 出土石器
PL.74　第２文化層　ブロック 16 出土石器
PL.75　第２文化層　ブロック 17 出土石器・
ブロック 18 出土石器（１）
PL.76　第２文化層　ブロック 18 出土石器（２）・
ブロック 19 出土石器（１）
PL.77　第２文化層　ブロック 19 出土石器（２）・
第３文化層　ブロック 12 出土石器（１）
PL.78　第３文化層　ブロック 12 出土石器（２）・
ブロック外出土石器
PL.79　陥し穴出土遺物
PL.80　縄文包含層出土遺物・遺構外出土遺物（１）
PL.81　遺構外出土遺物（２）
PL.82　遺構外出土遺物（３）
PL.83　２号住居跡出土遺物
PL.84　16 号炭窯出土遺物・１号溝出土遺物・遺構外出土遺物

第Ⅰ章　調査に至る経緯

群馬県畜産試験場は、前橋市富士見町小暮に所在する。明治38年に群馬県農事試験場畜産部として発足し、大正９年に群馬県種畜場として独立、大正11年に現在地に移転した。昭和37年に畜産試験場に組織改編され、本県の畜産研究の中核施設として現在に至っている。

平成４年に、畜産試験場の大規模な再編整備計画が決定された。平成７年６月には基本構想がまとまり、県農政部畜産課が、関係各課との連絡調整会議を開催した。県教育委員会事務局文化財保護課も同調整会議において、埋蔵文化財の取扱いについて意見を求められた。文化財保護課としては、事業地の一部で、平成６年に建物建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査が実施されており、周辺にも埋蔵文化財の存在が想定されることから、恒久的な建物を建設する場合は発掘調査が必要である旨回答し、基本設計が固まった段階での再協議を要望した。

平成９年９月に整備計画がほぼ確定したことから、埋蔵文化財調査について具体的な協議を開始した。同年10月には、畜産課から正式な発掘調査の依頼を受けた。発掘予定面積は約39,000㎡で、調査期間は平成９～14年度までの６か年の予定であった。文化財保護課では、発掘調査の実施機関について調整を図ったが、調査面積が広く、他に大規模な公共事業関連の発掘調査を実施していた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団や、地元の富士見村（現前橋市）教育委員会社会教育課が対応することは困難であった。そのため、事業の緊急性を勘案し、「県立畜産試験場遺跡調査会」を設立して発掘調査及び整理事業を委託することとした。調査会の会長には県教育委員会事務局文化スポーツ部長（当時）が就き、事務局を文化スポーツ部文化財保護課（現県教育委員会事務局文化財保護課）においた。理事及び監事は、県農政部畜産課・畜産試験場、富士見村教育委員会社会教育課、県文化財保護課の職員からなる。

平成９年11月に、調査会が民間調査機関である株式会社シン技術コンサルと委託契約を締結し、発掘調査に着手、平成14年10月に終了した。

整理事業は、平成15年度から開始した。調査資料の整理及び報告書の刊行は、発掘調査と一連の事業であるため、発掘調査を担当した機関が実施することが望ましい。そのため、発掘調査を担当した株式会社シン技術コンサルと、引き続き委託契約を結ぶこととした。整理事業は２カ年の計画であったが、経済情勢の変化により所要経費の確保ができず、一部作業未了のまま平成15年度末をもって調査会を解散することとなった。

平成20年度に、県教育委員会文化財保護課と県農政課技術調整室技術調整係で協議を行い、平成21年度から３か年の計画で残りの整理事業を実施することとした。実施にあたっては、事業の継続性を重視して、発掘調査を担当し、かつ平成15年の整理業務を受託した株式会社シン技術コンサルと、引き続き委託契約を締結することとした。

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

小暮東新山遺跡が所在する前橋市富士見町（旧富士見村）は前橋市街の北北東、上毛三山のひとつとして知られ広大な裾野を引く赤城山の南西斜面の一角を占める。旧村域は赤城山頂外輪山であり最高峰の黒檜山を頂点とし、カルデラ湖の大沼一帯、中央火口丘の地蔵岳、外輪山の荒山、さらに寄生火山丘の鍋割山を含めた山頂部から南北約 19km、東西約 6km の細長い扇形を描き、面積は 69.63km²程を測る。南西端は旧利根川（現桃の木川）の流域及び大正用水の流路付近で、最低標高地点は約 140m である。なお、最高標高地点は黒檜山山頂の 1,828m であり、標高差は実に 1700m 近くにも及ぶ。赤城山麓からは関東平野が一望出来、西方に赤城山と同じく上毛三山のひとつである榛名山が間近に迫る。そこから南方に眼を転じると八ヶ岳連峰や秩父の山塊、さらにはその山々を越えて晴れた日には、旧村名の由来にもなっているように富士山をも望むことが出来、大変眺望に優れている。

赤城山南西麓の裾野に位置する旧富士見村の地形は、山岳部とその麓に発達した山体崩落がもたらした広大な裾野部とに大別できる。山岳地形から裾野地形に変わる傾斜変換点の標高は 400 ～ 450m であり、裾野部には赤城白川・細ヶ沢川・法華沢川等が浸食谷を刻みながら流下し、火山麓扇状地を形成している。このうち赤城白川は本遺跡の西方約 500m を南西に流れる。

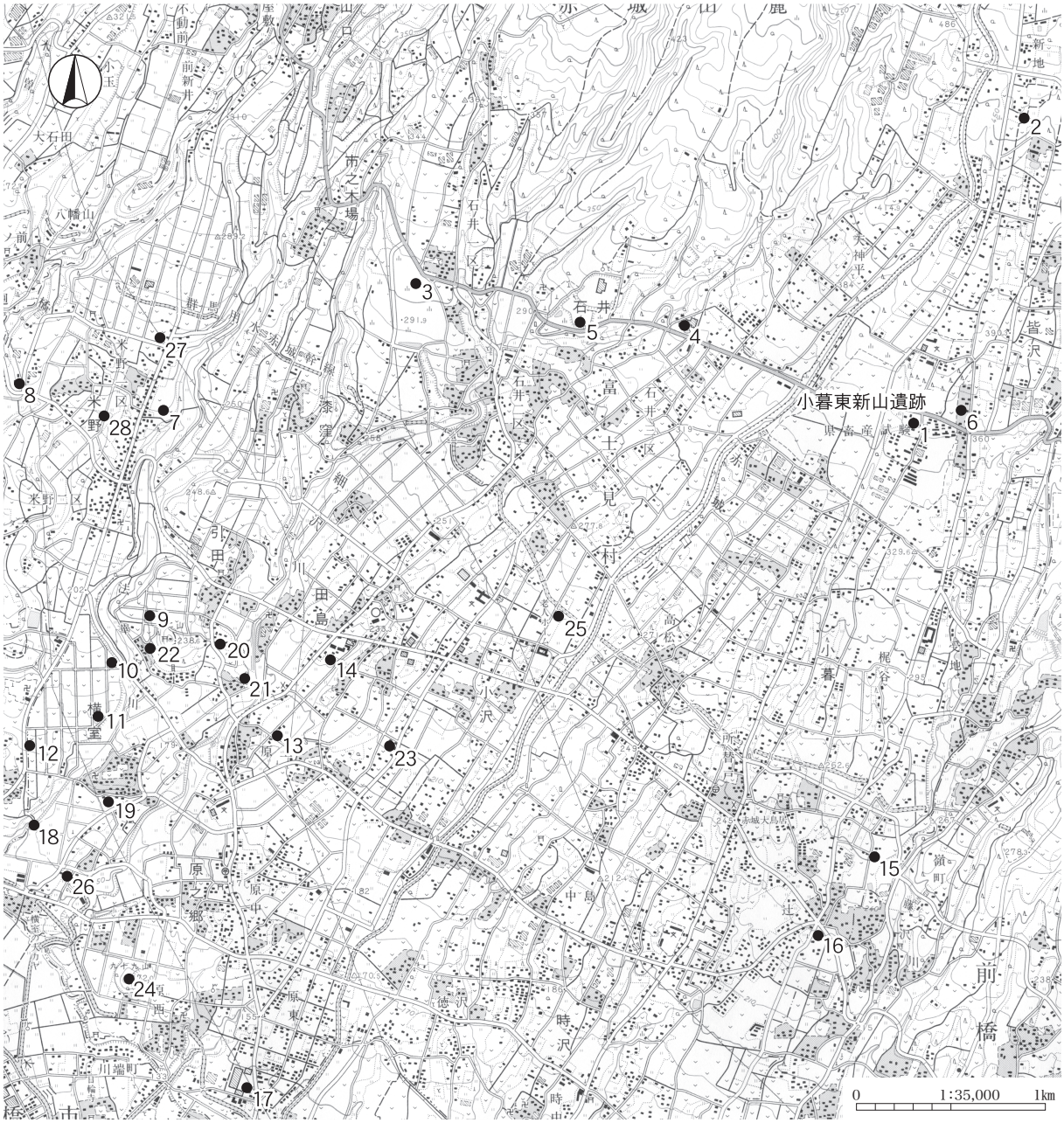
小暮東新山遺跡は、前橋市内からほぼまっすぐに赤城山を登る県道４号線（通称赤城県道）と赤城山麓を標高 350m の等高線に沿うように半周する国道 353 号との交差点の南東に位置する。群馬県畜産試験場の敷地の約３分の２を占め、面積は約 40,000㎡、標高は 330 ～ 380m 程を測る。前述の地形区分では裾野部に属し、西方より続く丘陵性台地地形を赤城白川が埋没させる形で形成された、白川扇状地の東端部にあたる。竜の口川が遺跡内を北東から南西に貫いており、そこへ流入する小流が刻んだ小規模な谷地形も認められる。基盤層は水成堆積を成すローム層であるが、竜の口川から土石流として流出した巨石や砂礫が混入している。基盤層中には、As-BP グループ最下層である As-MP の堆積が認められるが、より古い AT は検出されなかった。このことから本遺跡の基盤層の形成時期は AT 降下以降 As-MP 降下以前、すなわち更新世末期の 29,000 年前から 24,000B.P. までの間であり、旧石器時代後期後半期に位置づけられる比較的新しい地層である。

第２節　周辺遺跡

『富士見村誌』（以下村誌）及び『群馬県遺跡台帳Ⅰ（東毛編）』（以下台帳Ⅰ）によると、赤城南西麓の遺跡、及び包蔵地は、標高 400m 以上の山岳地域にはほとんど見られない。対して、それより下の裾野部には、弥生時代を除く縄文時代から歴史時代の遺跡が多く分布している。

旧石器時代については、本遺跡（１）の他に、舟底形石器が出土した龍ノ口遺跡（２）、AT 下層より黒色安山岩製の剥片等が出土した小原目遺跡（３）等があるものの、調査事例は少ない。しかし周辺の旧北橘村・旧宮城村・旧大胡町及び旧前橋市域での調査事例からみて、本遺跡周辺においても当時期の遺跡が多く存在するであろうことは想像に難くない。

縄文時代については、前述のように山岳地域の調査事例はほとんどないが、標高 350m 以下に限っていうと遺跡は赤城南麓の裾野全域に広がっているといってよい。この時代の遺跡は、標高 300m 以上の比較的標高の高い地点と、標高 140 ～ 250m 前後の標高が低い地点の何れに立地しているかによって、その性格が

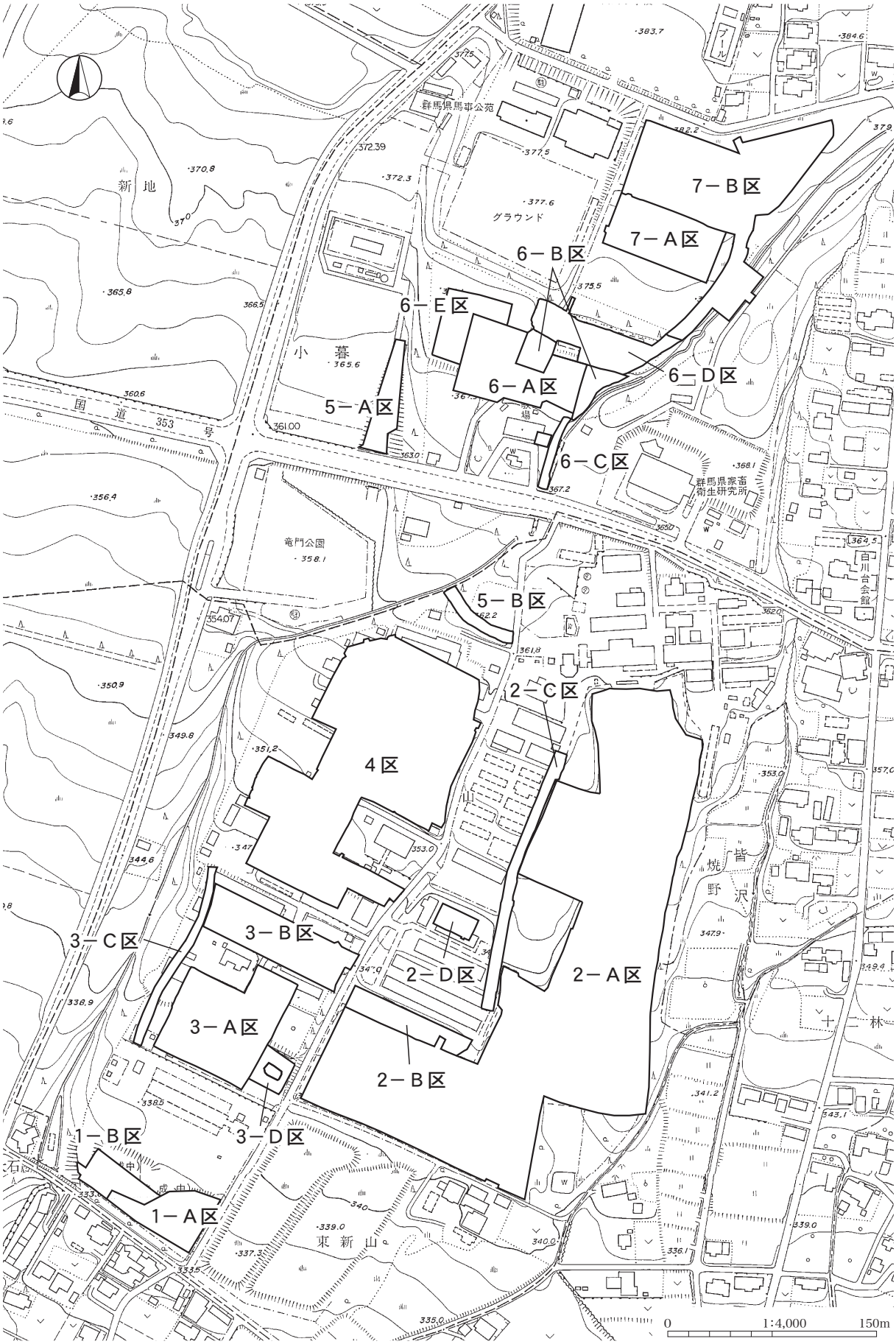


第１図　周辺遺跡

第１表　周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	時　代	内　容
1	小暮東新山遺跡	旧石器･縄文･平安	狩猟域･生産址
2	龍ノ口遺跡	旧石器	石器製作址か
3	小原目遺跡	旧石器・縄文･古墳～平安	集落･墳丘
4	石井柴山遺跡	縄文	狩猟域
5	坂上遺跡	縄文･古墳他	狩猟域他
6	小暮東新地遺跡	縄文･平安	狩猟域他
7	米野田遺跡	縄文･奈良･平安	集落
8	向吹張遺跡	縄文･奈良･平安	集落
9	愛宕山遺跡	縄文･平安	集落
10	上庄司原東遺跡	縄文･古墳･平安	集落･墳丘他
11	下庄司原東遺跡	縄文･古墳･平安	集落･墓域
12	陣場遺跡	縄文･古墳･平安	集落･墳丘他
13	久保田遺跡	縄文･古墳～平安	集落
14	白川遺跡	縄文･古墳～平安	集落

No.	遺跡名	時　代	内　容
15	広面遺跡	縄文･平安	集落
16	寺間遺跡	縄文･平安	集落
17	旭久保遺跡	縄文～中世	集落
18	田中田遺跡	縄文･弥生・古墳	集落
19	横室古墳	古墳	墳丘
20	森山古墳	古墳	墳丘
21	道上古墳	古墳	墳丘
22	初室古墳	古墳	墳丘
23	鎌塚古墳	古墳	墳丘
24	九十九山古墳	古墳	墳丘
25	八幡古墳	古墳	墳丘
26	岩ノ下遺跡	古墳	墳丘
27	見眼遺跡	縄文･奈良平安	集落
28	窪谷戸遺跡	縄文･奈良平安	集落


群馬県馬事公苑
グラウンド
新地
小暮
国道353号
竜門公園
群馬県家畜衛生研究所
白川台会館
皆沢
十林
東新山
7－B区
7－A区
6－B区
6－E区
6－A区
6－D区
6－C区
5－A区
5－B区
2－C区
4区
2－A区
2－B区
2－D区
3－C区
3－B区
3－A区
3－D区
1－B区
1－A区
0
1:4,000
150m

第２図　遺跡位置図

大きく異なる。本遺跡、石井柴山遺跡（４）、坂上遺跡（５）、小暮東新地遺跡（６）は前者のグループに属し、何れも陥し穴とみられる土坑が多く検出されたが、住居等集落に伴う遺構は確認されていない。このことから、縄文時代において標高 300 ～ 400m にかけての地域は「狩猟域」であった可能性が高い。ただし、ほぼ同標高に形成された小原目遺跡は例外的に集落遺跡である。

それに対して標高 140 ～ 250m にかけては､集落遺跡が多い。西方の丘陵性台地上にある米野田遺跡（７）、向吹張遺跡（８）、愛宕山遺跡（９）、上庄司原東遺跡（10）、下庄司原東遺跡（11）、陣場遺跡（12）、また白川扇状地上にある久保田遺跡（13）、白川遺跡（14）、広面遺跡（15）、寺間遺跡（16）、旭久保遺跡（17）等がそれに当たるが、時期的には縄文時代前期から中期にかけての遺構・遺物が圧倒的に多く、後・晩期のものはほとんどない。全体としてみると、この標高地付近は、高標高域の「狩猟域」に対して、「生活領域」であったと考えられる。

高標高域の遺跡から検出された陥し穴はほとんど構築された時期を特定することができないため、低標高域の集落遺跡との相関関係を考察することは難しい。わずかに行われた自然科学分析による年代測定の結果と、他の地域での調査事例から推定すると、これらの陥し穴は概して縄文時代早期から前期末頃にかけてのもので、集落遺跡とは若干時期が異なると考えられる。

弥生時代は田中田遺跡（18）で中～後期の遺物が出土しているが、これが管見に触れる限り唯一の例である。ただ赤城西麓の利根川沿いの段丘上に弥生時代遺跡が見つかっていることから考えると、南麓でもより低標高域には遺跡が存在している可能性がある。

村誌によると、昭和 30 年頃旧富士見村内には古墳が 90 基程存在したとされているが、耕作等の影響で多くが消失してしまった。しかし横室地区の横室古墳（19）､森山古墳（20）､道上古墳（21）､初室古墳（22）、原之郷・小沢地区の鎌塚古墳（23）、九十九山古墳（24）、八幡古墳（25）等、墳丘を残すものも少なからずある。また横室地区の下庄司原東遺跡からは古墳時代前期の方形周溝墓、及び後期～終末期の古墳が検出され、高標高域にある小原目遺跡でも、残存状態は悪いものの７世紀前葉の築造と推定される古墳５基が検出されている。

古墳時代から奈良・平安時代の集落については岩之下遺跡（26）、見眼遺跡（27）、窪谷戸遺跡（28）、向吹張遺跡、小原目遺跡、久保田遺跡、白川遺跡、陣場遺跡、上庄司原東遺跡、下庄司原東遺跡等で調査が実施されており、村誌で遺物包蔵地とされている地域も含めて、標高 140 ～ 250m 付近に集落遺跡が多く分布している。

中世から近世にかけては、台帳Ⅰによると旧村域には城館跡が５か所記載されている。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

第 1 節　調査の方法

本調査は群馬県畜産試験場の再編整備事業に伴うものであり、それに先立って平成 9 年度に行われた試掘調査の結果に基づいて行った。

調査区は調査時に便宜的に 1 地区～ 15 地区を設定したが、その後、整理作業の過程で再編後のエリアに基づいて改めて区名を付した（1 区 = 調整池部分、2 区 = 中小家畜エリア、3 区 = クリーンセンターエリア、4 区 = 大家畜エリア、5 区 = 地下道部分、6 区 = 本館エリア、7 区 = ふれあいエリア）。

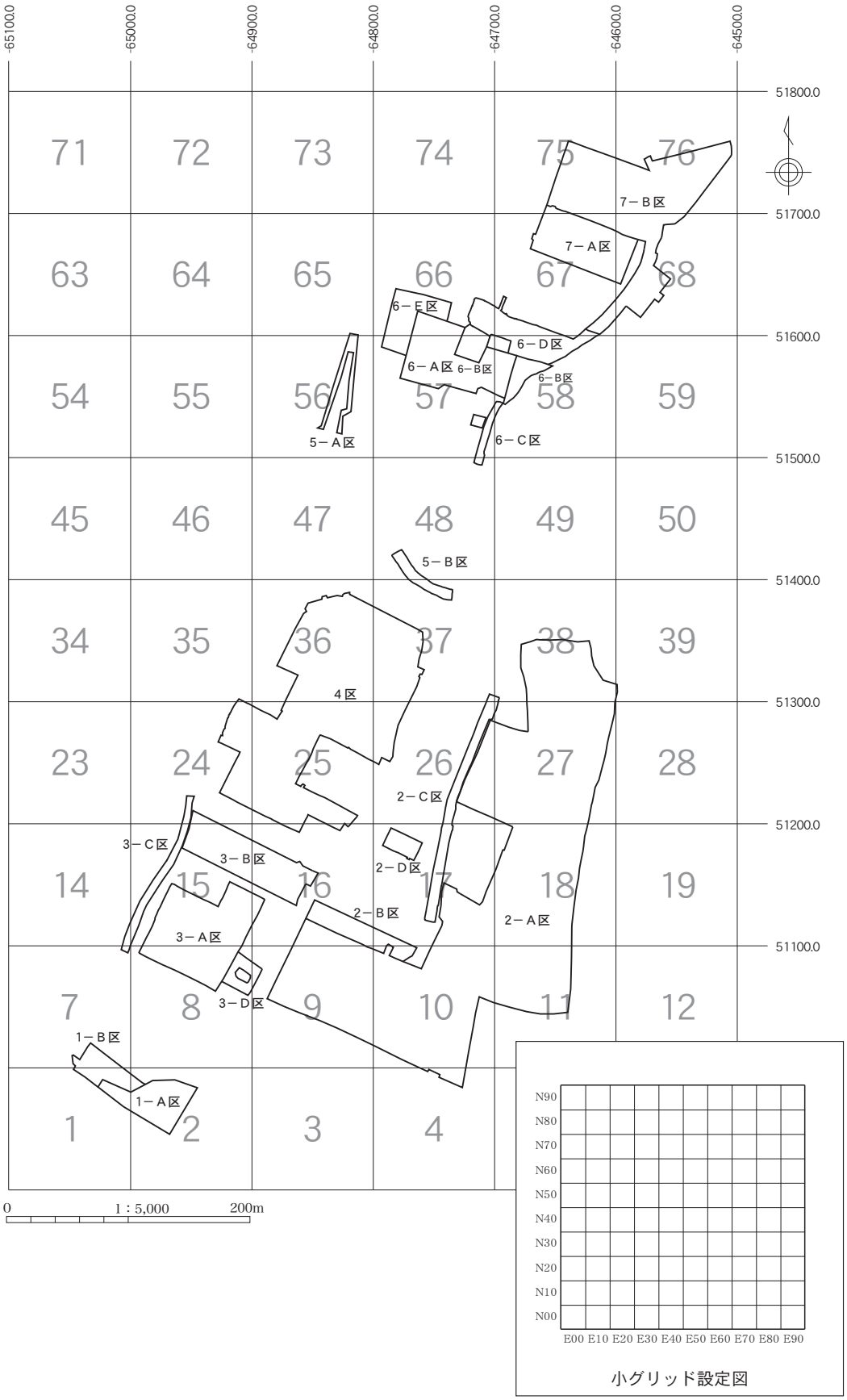
調査時	本　書	調査時	本　書
1 地区（平成 10 年度）	1-A 区	7 地区（平成 12 年度）	3-A 区
1 地区（平成 11 年度）	1-B 区	8 地区（平成 13 年度）	6-C・6-D 区
2 地区（平成 10 年度）	2-A 区	9 地区（平成 13 年度）	3-B 区
3 地区（平成 10 年度）	5-A 区	10 地区（平成 13 年度）	4 区
3 地区（平成 11 年度）	5-B 区	11 地区（平成 13 年度）	2-C 区
4 地区（平成 10 年度）	6-A 区	12 地区（平成 14 年度）	3-C 区
5 地区（平成 11 年度）	7-A 区	13 地区（平成 14 年度）	6-E 区
6 地区（平成 12 年度）	6-B・7-B 区	14 地区（平成 14 年度）	3-D 区
		15 地区（平成 14 年度）	2-D 区

調査を実施するにあたり、調査区全域に国家座標Ⅸ系に基づくグリッドを設定した。基準となる点（X=50,900 Y=-65,100）から 100m 四方の大グリッドを設定し、それに南西から 1.2.3‥と番号をつけた。さらにその大グリッドを 10m 四方の小グリッドで 100 分割した。小グリッドは南西隅を基準として南から北へ N00.N10.N20‥、西から東に E00.E10.E20‥とした（第 3 図）。

本遺跡の調査では、遺構確認面は基本的に 2 面とし、縄文時代前期～中期に形成されたとされる、いわゆる淡色黒ボク土（基本土層Ⅱ層）上面を第 1 面、As-YP を含有するローム（同Ⅴ層）上面を第 2 面とした。前者では古墳時代～中世の遺構、後者では縄文時代の遺構の検出に努めた。遺構確認面までの掘削はバックホウを使用し、遺構の確認、及び掘削はジョレン・移植コテ・スコップ等を使用して人力で行った。平成 10 年度の調査では調査区全体を各確認面まで掘削した後、全面を精査したが、遺構の密度が低く調査効率が悪いと判断したため、11 年度以降は 20 ～ 25㎡程度の範囲を 1 単位として第 1 面まで掘削し、遺構が確認されなかった場合はそのまま第 2 面まで掘り下げる方法に変更した。第 1 面で遺構が確認された場合はその周辺を島状に残し、遺構調査後に第 2 面まで掘り下げた。

旧石器時代の調査は、2.5m×2.5 mの方形テストピットを 1 単位として行った。10 m四方のグリッドにテストピットを 1 ～ 2 か所、対象面積のおよそ 10％を目安に設定し、人力で砂礫層（基本土層 XⅧ 層）または遺物が希薄になる As-BP グループ下位（基本土層 XV ～ XⅦ 層）まで掘り下げ、遺物の有無を確認した。土層断面は、南北方向、東西方向ともに遺跡全体を通して基本的に 30 mおきに計測した。

実測図に関しては、セクション図は手測りとトータルステーションの併用、平面図はトータルステーションでの作図を基本とした。また、ケーブル撮影及びラジコンヘリコプターによる空中写真を利用した写真測量も一部活用した。遺構記録写真には 35㎜白黒・同カラーネガフィルムを、ケーブル撮影・ラジヘリ空撮は 6×6 白黒と 6×6 カラーリバーサルフィルムを使用した。


-65100.0
-65000.0
-64900.0
-64800.0
-64700.0
-64600.0
-64500.0
51800.0
51700.0
51600.0
51500.0
51400.0
51300.0
51200.0
51100.0
71 72 73 74 75 76
63 64 65 66 67 68
54 55 56 57 58 59
45 46 47 48 49 50
34 35 36 37 38 39
23 24 25 26 27 28
14 15 16 17 18 19
7 8 9 10 11 12
1 2 3 4
7－B区
7－A区
6－E区
6－D区
6－A区
6－B区
6－B区
6－C区
5－A区
5－B区
4区
2－C区
2－D区
2－B区
2－A区
3－C区
3－B区
3－A区
3－D区
1－B区
1－A区
0
1：5,000
200m
N90
N80
N70
N60
N50
N40
N30
N20
N10
N00
E00 E10 E20 E30 E40 E50 E60 E70 E80 E90
小グリッド設定図

第３図　グリッド網図

第２節　調査の経過

各年度における調査組織、及び作業の経過は以下のとおりである。

調査組織（役職は当時）

平成９年度　県立畜産試験場遺跡調査会（調査準備）

会長　荒畑大治（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　土田　明（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長）
理事　長坂輝義（群馬県農政部畜産課主幹兼畜試整備係長）
板橋正六（群馬県農政部畜産試験場大家畜部長）
轟　公之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
監事　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主任）
品川良治（富士見村教育委員会事務局社会教育課長）
羽鳥政彦（富士見村教育委員会事務局社会教育課主査）
事務局長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課
課長補佐兼埋蔵文化財第一係長）
事務局員　斉藤和之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主幹兼専門員）
高島英之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主任）

平成 10 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（発掘調査）

会長　佐藤恭一（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　西形恵司（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長）
理事　轟　公之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
小林道幸（群馬県農政部畜産課次長）
板橋正六（群馬県畜産試験場副場長）
品川良治（富士見村教育委員会事務局社会教育課長）
監事　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課埋蔵文化財第一係主任）
羽鳥政彦（富士見村教育委員会事務局社会教育課主査）
事務局長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課
課長補佐兼埋蔵文化財第一係長）
事務局員　田口正美（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課
埋蔵文化財第一係主幹兼専門員）
高島英之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課埋蔵文化財第一係主任）

平成 11 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（発掘調査）

会長　佐藤恭一（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　西形恵司（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長）
理事　上原訓幸（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
諏訪直治（群馬県農政部畜産課次長）
高橋昌美（群馬県畜産試験場副場長）
青木鶴男（富士見村教育委員会事務局長）

監事　　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課専門員）
　　福田貫之（富士見村教育委員会事務局主事）
事務局長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課課長補佐）
事務局員　田口正美（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主幹兼専門員）
　　高島英之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主任）

平成 12 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（発掘調査）
会長　　佐藤恭一（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　　石井英雄（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長）
理事　　野田明男（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
　　苫米地達生（群馬県農政部畜産課次長）
　　宮沢　壽（群馬県畜産試験場副場長）
　　木暮英夫（富士見村教育委員会教育次長兼事務局長）
監事　　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課専門員）
　　福田貫之（富士見村教育委員会事務局主事）
事務局長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課課長補佐
事務局員　田口正美（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主幹兼専門員
　　矢口裕之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主任）

平成 13 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（発掘調査）
会長　　川嶋達夫（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　　石井英雄（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長）
理事　　野田明男（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
　　苫米地達生（群馬県農政部畜産課次長）
　　藤原之壽（群馬県畜産試験場副場長）
　　木暮英夫（富士見村教育委員会教育次長）
監事　　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課専門員）
　　福田貫之（富士見村教育委員会事務局主事）
事務局長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課課長補佐）
事務局員　田口正美（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主幹兼専門員）
　　矢口裕之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課主任）

平成 14 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（発掘調査）
会長　　下山　博（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長）
副会長　　河部　滋（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課長）
理事　　高橋　哲（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課次長）
　　矢端武善（群馬県農政部畜産課次長）
　　武井篤雄（群馬県畜産試験場副場長）
　　阿佐美健一（富士見村教育委員会事務局局長）
監事　　飯塚　聡（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課主幹兼専門員）
　　福田貫之（富士見村教育委員会事務局主事）

事務局長　田口正美（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課埋蔵文化財第一係長）
事務局員　内木真琴（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課主幹兼専門員）
矢口裕之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課専門員）

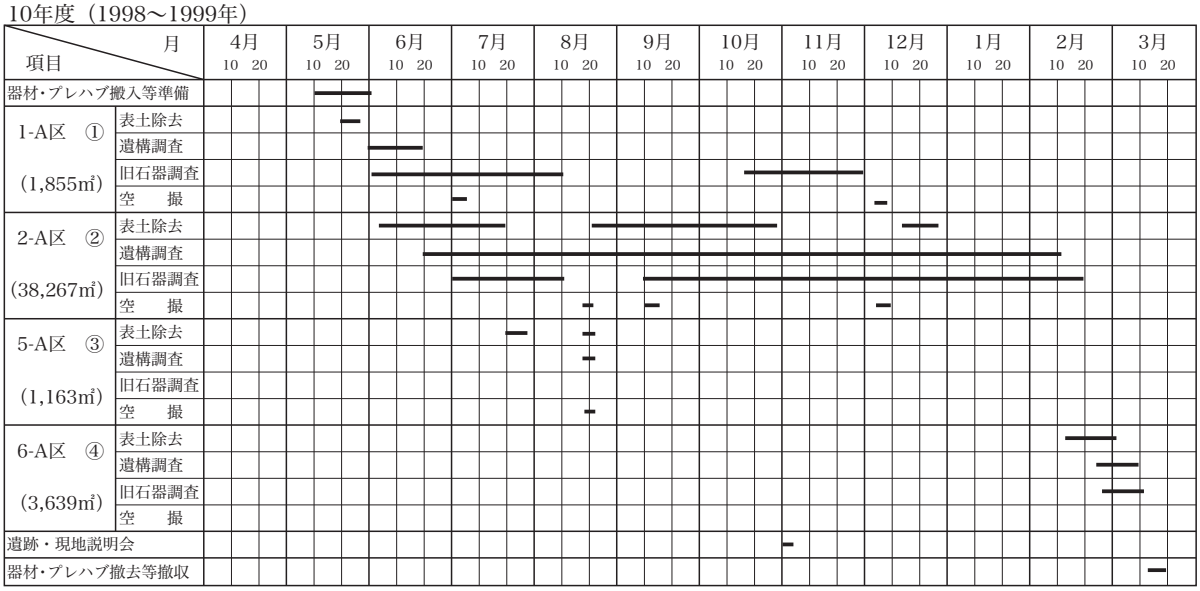
平成 15 年度　県立畜産試験場遺跡調査会（整理作業）
会長　倉澤　勉（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課長）
副会長　巾　隆之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課文化財主監）
理事　高橋　哲（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課次長）
山田憲作（群馬県農政部農政課次長）
武井篤雄（群馬県畜産試験場副場長）
阿佐美健一（富士見村教育委員会事務局局長）
監事　斎藤英敏（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課専門員）
福田貫之（富士見村教育委員会事務局主事）
事務局長　西田健彦（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課埋蔵文化財グループリーダー課長補佐）
事務局員　内木真琴（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課埋蔵文化財グループ専門員）
矢口裕之（群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部文化課埋蔵文化財グループ専門員）

平成 21 年度　県教育委員会事務局文化財保護課（整理作業）
事務局　洞口正史（群馬県教育委員会事務局文化財保護課補佐埋蔵文化財係長）
桜井美枝（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主幹）
深澤敦仁（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）
石田　真（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）
小林　正（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主任）

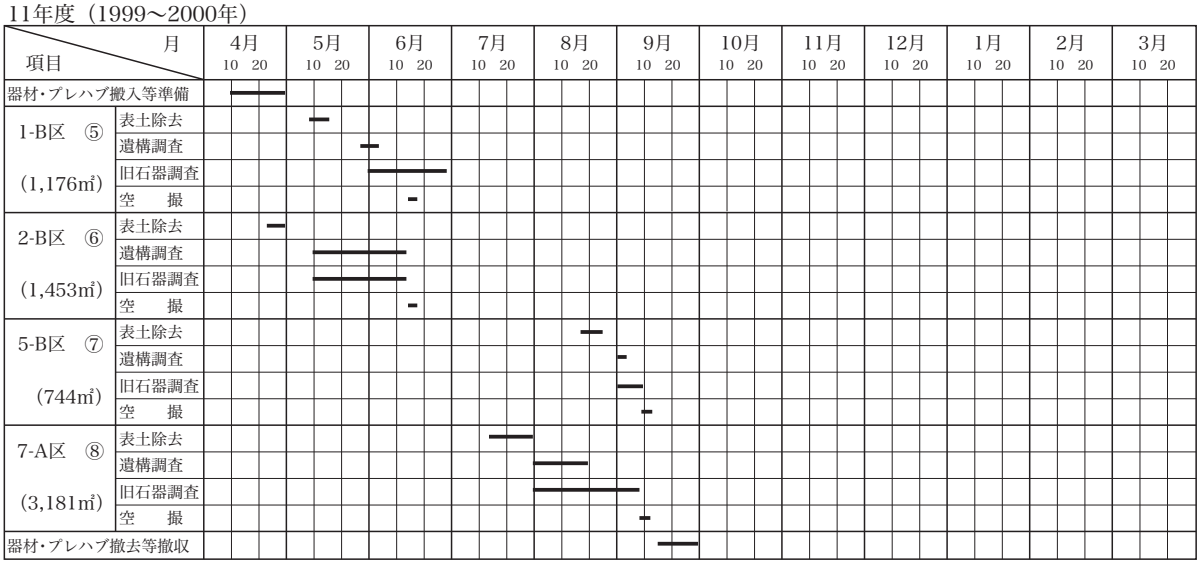
平成 22 年度　県教育委員会事務局文化財保護課（整理作業）
事務局　洞口正史（群馬県教育委員会事務局文化財保護課補佐埋蔵文化財係長）
桜井美枝（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主幹）
津島秀章（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主幹）
深澤敦仁（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）
石田　真（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）

平成 23 年度　県教育委員会事務局文化財保護課（整理作業）
事務局　洞口正史（群馬県教育委員会事務局文化財保護課補佐埋蔵文化財係長）
桜井美枝（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主幹）
津島秀章（群馬県教育委員会事務局文化財保護課主幹）
深澤敦仁（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）
石田　真（群馬県教育委員会事務局文化財保護課指導主事）

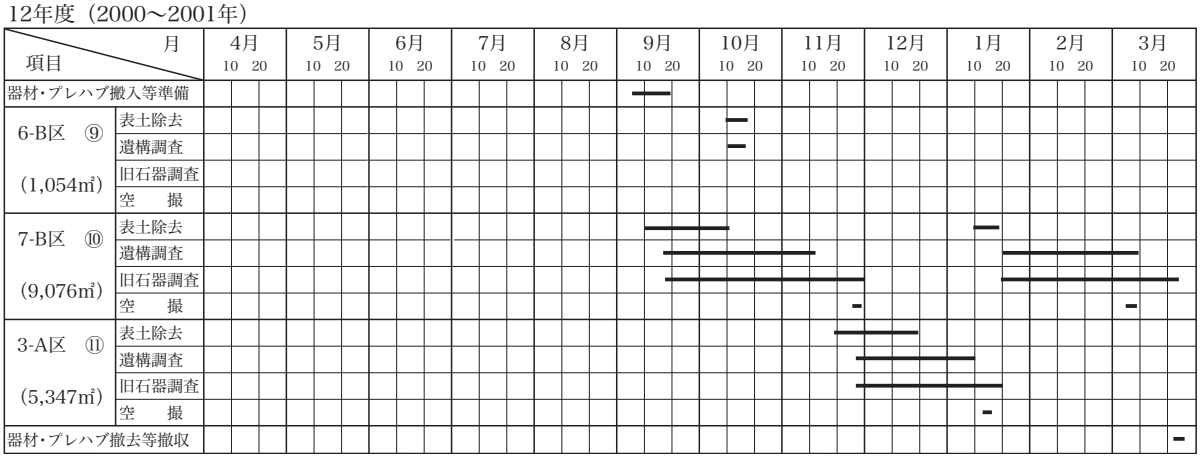
10年度（1998～1999年）



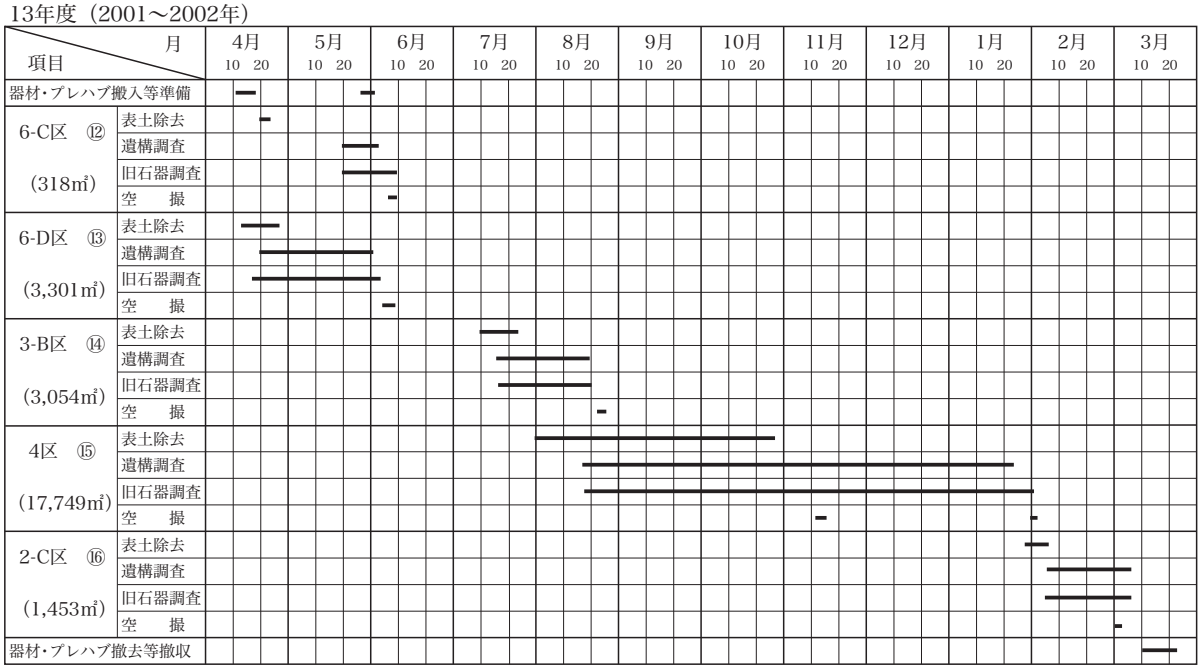
11年度（1999～2000年）



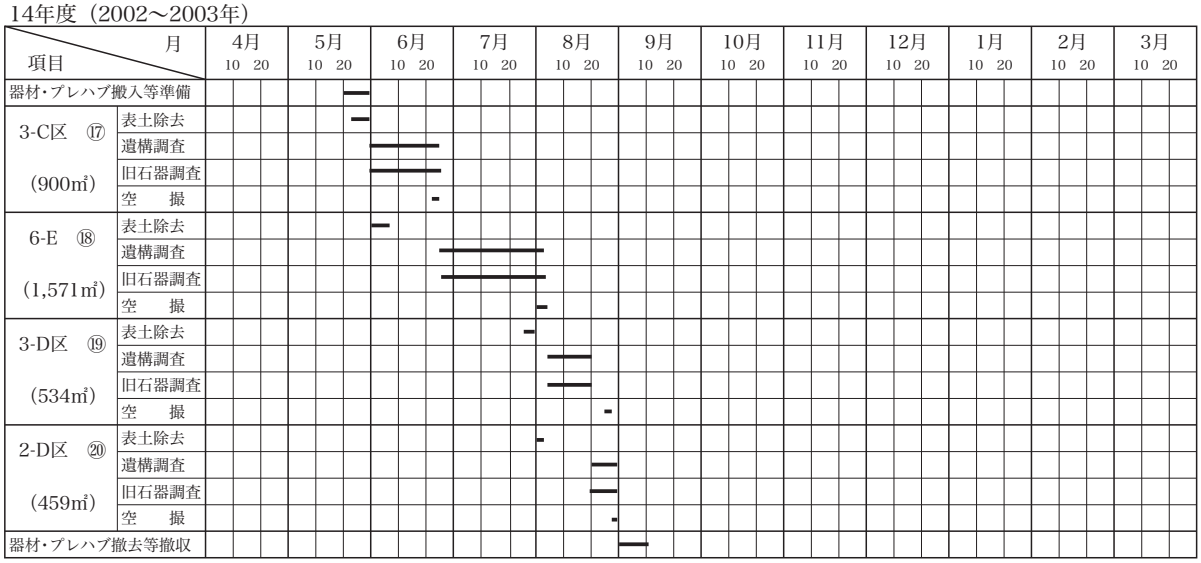
12年度（2000～2001年）



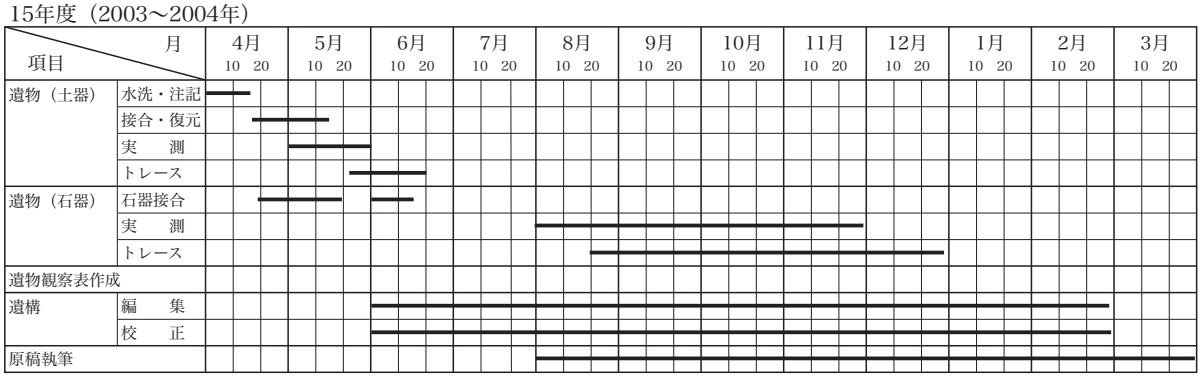
13年度（2001～2002年）



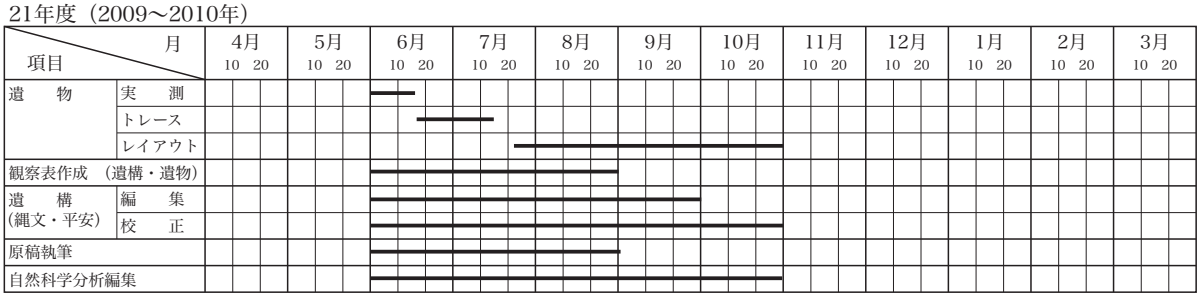
14年度（2002～2003年）



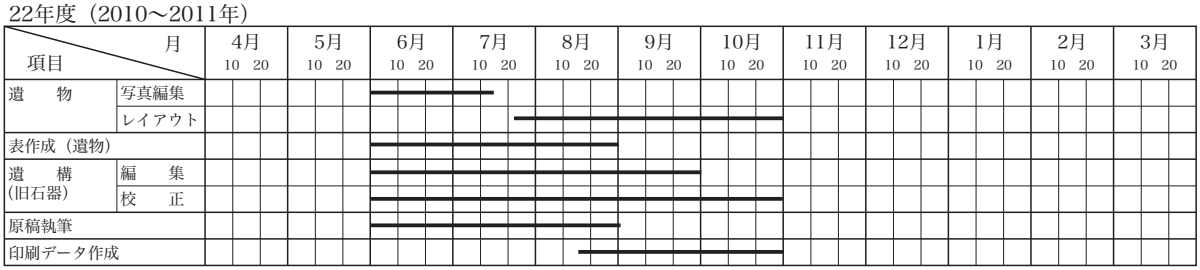
15年度（2003～2004年）



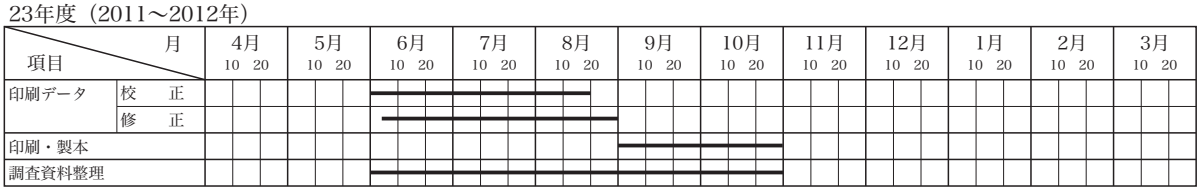
21年度（2009～2010年）



22年度（2010～2011年）



23年度（2011～2012年）



第３節　住居状遺構保存についての経過

旧石器時代の住居状遺構は、平成 10 年 8 月に調整池の建設予定地（1- A区）から発見された。

住居状遺構は、石器分布に伴って柱穴と思われるピット状の遺構が確認されたもので、これまでに例を見ないものであった。発見当初から重要な遺構との認識を持ち、県内外の考古学研究者から現地指導を受け、住居状遺構であるとの見解に至った。このことから、遺構の保存も視野に入れ、一端調査を中断した。

同年 9 月 18 日に開催された平成 10 年度第 1 回県立畜産試験場遺跡調査会役員会会議において、住居状遺構の保存について協議が行われた。県教育委員会文化財保護課は、この遺構の重要性を考慮し、現地での現状保存を県畜産課に要望した。畜産課も遺構の重要性について理解を示し、保存に向けて設計変更の可能性を検討することとなった。

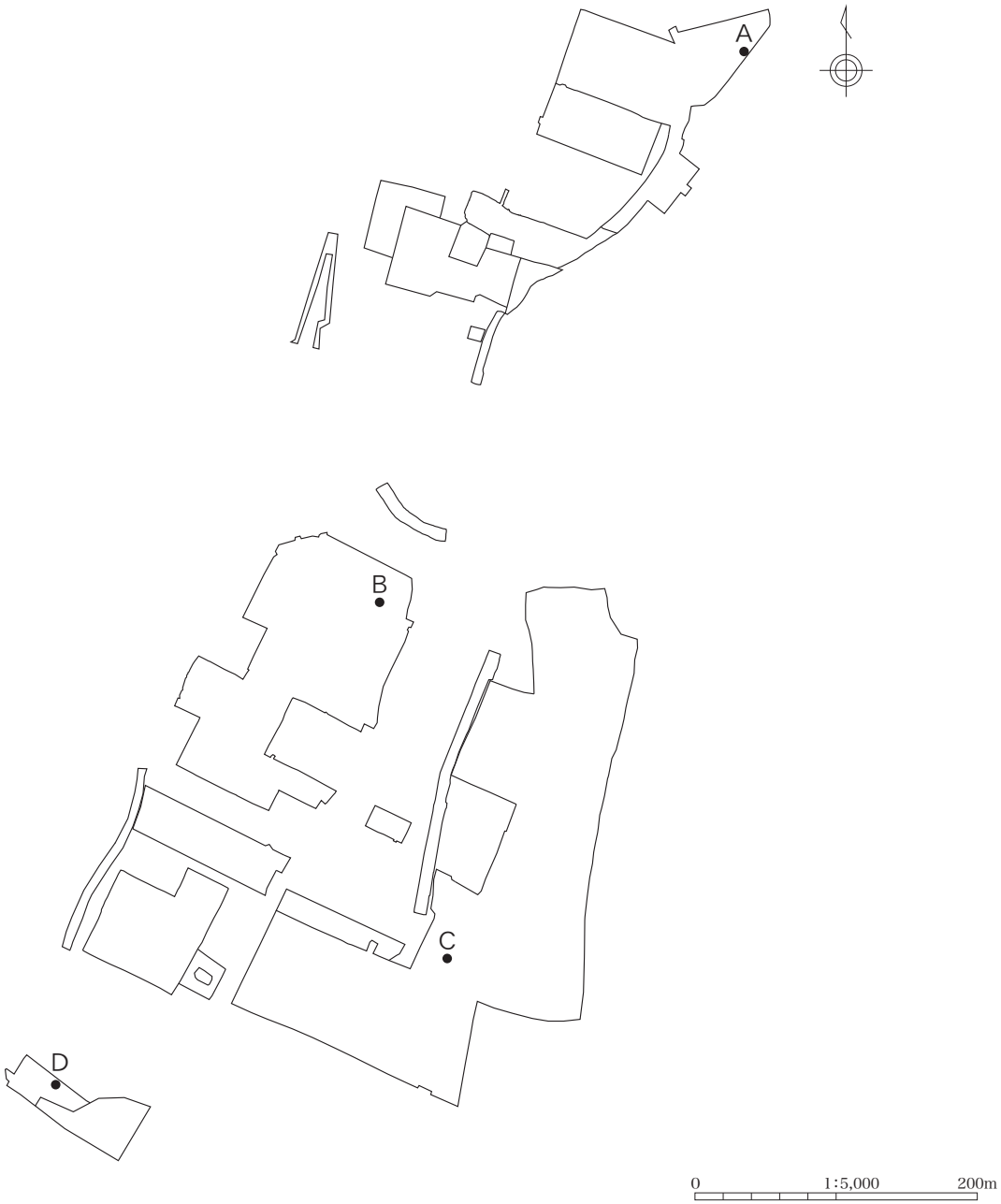
10 月には遺構の保存を前提に、最低限の記録作成を目的として調査を再開した。11 月中旬には調査が終了し、12 月 11 日に埋め戻した。

平成 11 年 2 月 18 日には、群馬県文化財保護審議会考古部会委員が現地を視察し、3 月 17 日の県文化財保護審議会において住居状遺構の保存を要望する教育長あての意見書が採択された。

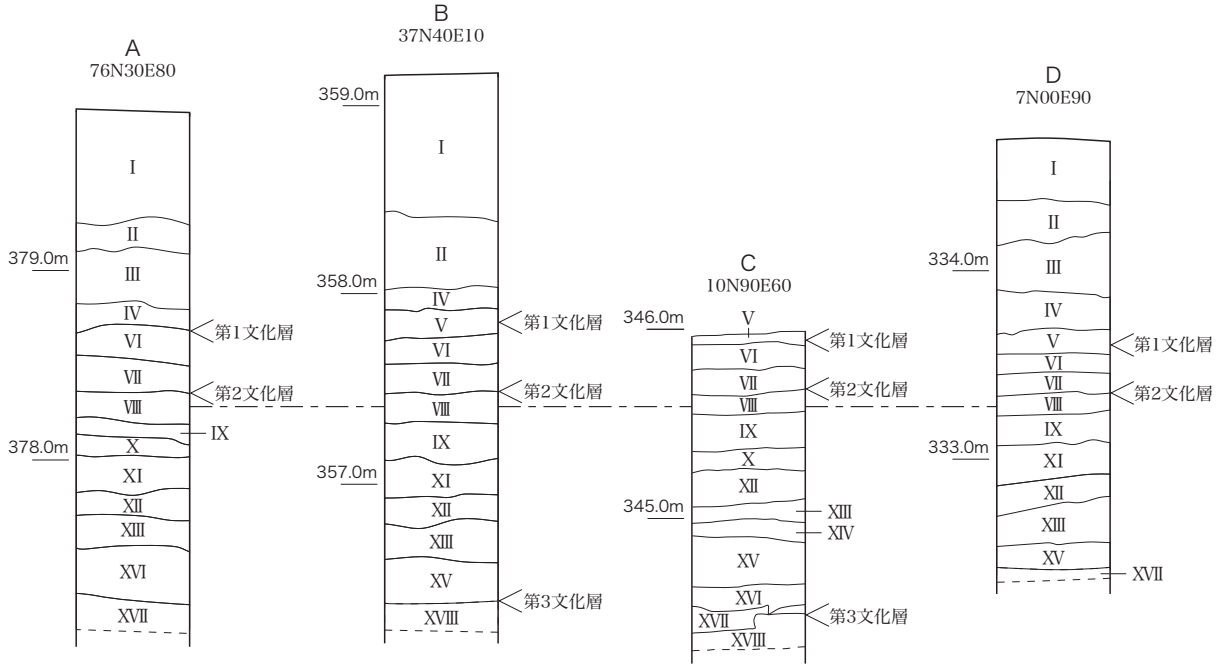
同年 3 月 25 日の平成 10 年度第 2 回県立畜産試験場遺跡調査会役員会会議では、文化財保護課が遺構の保存を改めて要望した。畜産課も保存にむけての具体的な検討を開始することとなり、その前提として保存の必要性についての文書の提出を文化財保護課に求めた。文化財保護課は、平成 11 年 4 月 22 日に県農政部長あてに意見書の写しを提出し、これを受けて畜産課で調整池の設計変更を行い、住居状遺構の現状保存が決定した。

第Ⅳ章　基本層序

本遺跡は、遺跡内における標高差が50m近くあるが、基本土層の堆積状況には、特に大きな変化はみられない。本遺跡においては、Hr-FPやAs-Cが散在する場所が認められたが、後世の耕作等の影響を受けた二次堆積と思われた。そのため、地表からいわゆる淡色黒ボク土の上面までを、すべて第Ⅰ層として扱った。また場所によっては、畜産試験場の旧施設の基礎等による撹乱に壊されている部分もみられた。第Ⅱ層以下の堆積状況は概ね良好であったが、第XV層以下の層については、堆積が認められない場所もあった。基本層序の位置と各層の土層説明は以下のとおりである。



第４図　基本層序位置



第５図　基本土層柱状図

第Ⅰ層　黒褐色土　Hr-FP・Hr-FA・As-C を含む。耕作土。

第Ⅱ層　暗茶褐色土　いわゆる淡色黒ボク土。層厚 15 ～ 25㎝。（上面が古墳時代以降の遺構確認面）

第Ⅲ層　暗褐色土　白色粒を僅かに含み、硬質。層厚５～ 10㎝。

第Ⅳ層　暗褐色土　As-YP を含有するローム小ブロック・ローム粒含む。ローム漸移層。層厚５～ 10㎝。

第Ⅴ層　褐色土　As-YP ブロック含む。層厚 10 ～ 15㎝。（上面が縄文時代の遺構確認面）

第Ⅵ層　褐色土　As-YP・As-Ok1 含む。層厚 10 ～ 20㎝。

第Ⅶ層　褐色土　As-Ok1･As-Sr 含む。層厚 15 ～ 20㎝。

第Ⅷ層　淡褐色土　As-Sr 降灰層準。層厚 10 ～ 20㎝。

第Ⅸ層　褐色土　As-Sr・As-BP 若干含む。層厚５～ 10㎝。

第Ⅹ層　褐色土　As-BP 若干含む。層厚 10 ～ 15㎝。

第Ⅺ層　褐色土　As-BP 降灰層準。層厚 15 ～ 20㎝。

第Ⅻ層　橙褐色土　As-BP 降灰層準。層厚 10 ～ 15㎝。

第ⅩⅢ層　褐色土　As-BP やや多く含む。層厚５～ 10㎝。

第ⅩⅣ層　褐色土　As-BP 多く含む。層厚 10 ～ 15㎝。

第ⅩⅤ層　褐色土　As-BP･ 小礫若干含み、ややざらつく。層厚 10 ～ 15㎝。

第ⅩⅥ層　明褐色土　As-BP･ 小礫若干、人頭大の礫多く混じり、ざらつく。層厚５～ 15㎝。

第ⅩⅦ層　暗褐色土　As-BP･ 小礫若干、拳～人頭大の礫多く混入する。層厚 10 ～ 15㎝。

第ⅩⅧ層　暗灰褐色土　水成堆積で亜円礫を含む。シルト質の砂礫土。上部には As-BP グループ最下層の As-MP が散在する。本層より下位は土石流による巨大な転石が散乱する。本遺跡の基盤層。

※第ⅩⅢ・ⅩⅣ層中に炭化物の包含が認められるが、これは赤城山の南麓及び南西麓において普遍的に見られる現象である。山火事の痕跡と考えられており、浅間山噴火時の熱せられたテフラ降下が原因と推定する研究者もいる。

第Ⅴ章　検出された遺構と遺物

第１節　旧石器時代

（１）概　観

本遺跡における旧石器時代遺物は、北端で最高位にある 7-B 区から南端で最下位の 1-A 区まで、粗密はあるものの遺跡全体で出土している。遺物集中区（ブロック）は遺跡最北端のブロック 12 から最南端のブロック２まで南北約 900m、標高差約 47m にわたって計 18 か所で検出され、ブロック遺物の総計は礫も含めて 1075 点である。ブロックのうち 10 か所（ブロック３・４・６・７・10・14 ～ 18）は 2-A 区西端から 2-C 区にあって南北に並ぶ。As-Sr 堆積レベルから復元した地形（第６図）をみると、As-Sr 堆積時点では 2-A 区中央部～西部に沢状の小支谷があったと思われ、これら 10 か所のブロックはいずれも谷地形の西縁に沿っている。北端のブロック 14 から南端のブロック３まで水平距離約 220m、標高差約 13m を測る。また、現地形では前述のブロック集中区と谷を挟んで対岸にあるようにみえるブロック５が、形成時は調査区東端にかかる別の谷の西縁にあったことも分かる。他のブロックはこれらの谷から離れた斜面に孤立して形成され、接合関係はなく、また、使用される石材も共通しなかった。なお、1-A 区のブロック１・２・11 や 6-E 区のブロック 19・20 は比較的接近して形成されているようにみえるが、文化層が異なり、実質的には単独のブロックである。

本遺跡の文化層は第１～第３に分けられ、上位から第１文化層、第２文化層、第３文化層とした。

第１文化層はブロック 11・13・20 の３か所で、出土点数は 89 点である。それぞれ独立して形成されたものと思われ、ブロック間接合は認められなかった。主体となる石材が黒曜石である点ではブロック 13 と 20 が共通するが、器種構成は異なり、場所も約 110m 離れている。

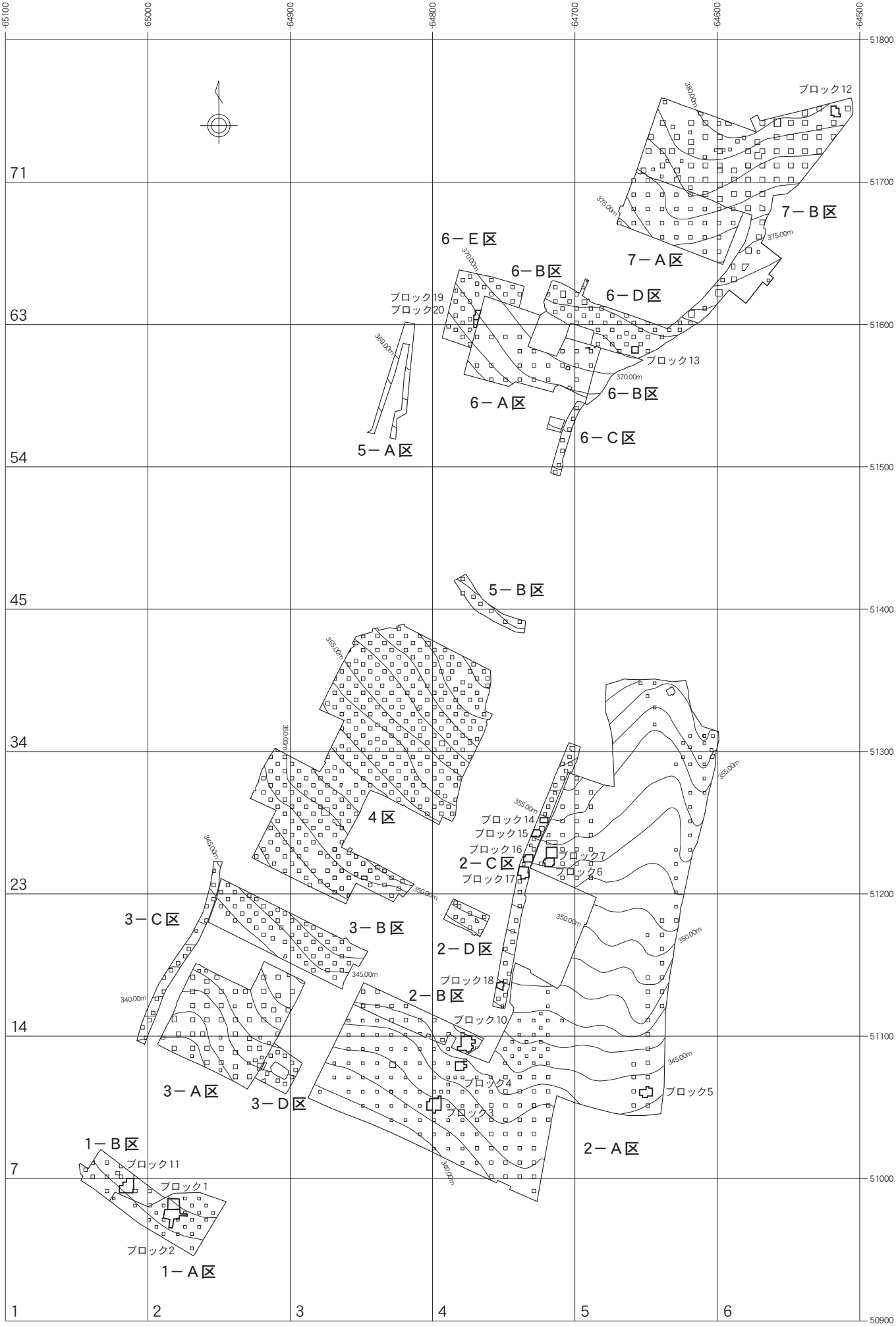
第２文化層はブロック１・３～７・10・14 ～ 19 の 13 か所、出土点数は 973 点で、本遺跡出土遺物の大半が含まれる。この中でも、上述の 2-A、及び 2-C 区に集中して形成されたブロックはいずれも第２文化層に属し、ブロック４と 10 でブロック間接合が認められたほか、石材や器種構成が類似し、同時期性を窺わせる。使用される石材は黒色頁岩、黒曜石、玉髄が多いが、ブロックごとにその比率は異なる。

第３文化層はブロック２・12 の２か所で、出土点数はわずかに 13 点である。ただし、このうちブロック２は現状保存された住居状遺構の下位に形成されたものであり、その大半は未調査である。遺跡最北端のブロック 12 と最南端のブロック２が共に本文化層に属することは興味深い。

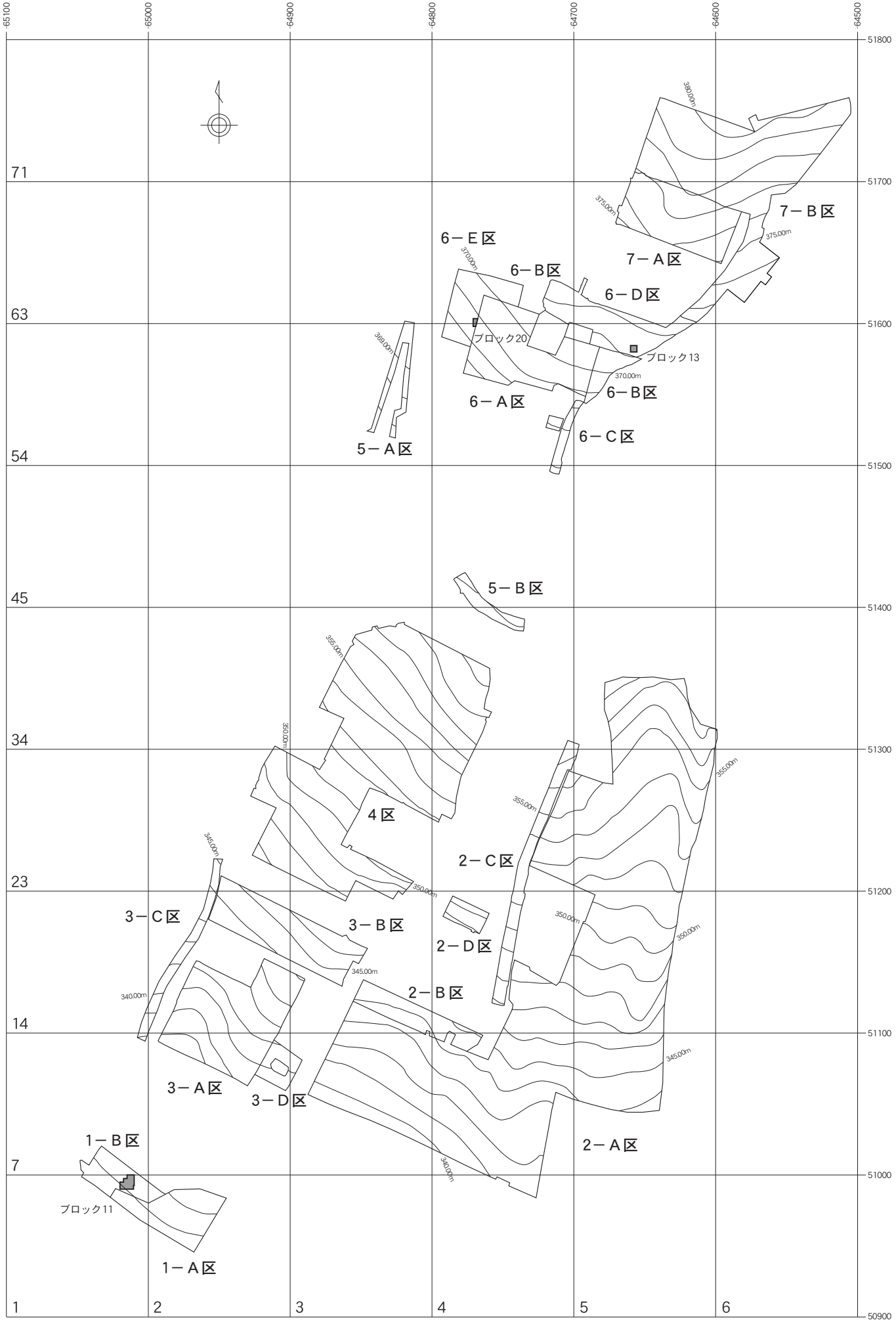
本遺跡と同じ赤城山南麓で発見されている旧石器時代の遺跡では、第２文化層に相当する層位からの出土はそれほど多くなく、第１文化層相当層や第３文化層以下の層位からの出土が目立つ。この様相の違いが何に起因するものなのか、今後の研究が待たれるところである。

（２）第１文化層

標準土層Ⅴ層下部を生活面とし（第５図）、遺物はⅣ層からⅥ層までの間に分布する。Ⅴ層下部は As-YP 極大層の下位であり、As-Ok1 含有層直上である。このことから本文化層の時期は As-YP 降下以前、As-Ok1 降下直後の前後と考えられる。本文化層に属するのは 1-B 区で検出されたブロック 11、６-D 区で検出されたブロック 13、6-E 区で検出されたブロック 20 である（第７図参照）。最高位のブロック 13 が約 371m、最低位のブロック 11 が約 333m で標高差は 38m を測る。各ブロック間はいずれも 100m 以上離れ、主要石材も異なる（第２表）。遺物の出土総点数は 89 点、そのうち 59 点は黒曜石である。その他は、礫を除くと黒色頁岩、黒色安山岩、チャートが数点ずつの出土したのみである。



第６図　テストピット及び旧石器集中ブロック位置図（S=1/3,500）



第７図　第１文化層　遺物集中ブロック（S=1/3,500）

第２表　第１文化層　器種・石材組成表

ブロック	器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器		尖頭器		ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		彫器		二次加工のある剥片		使用痕ある剥片		石核		打面再生剥片		ﾌﾟﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ		剥片・砕片		ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ		礫		合計	
		点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
11	黒曜石											1	1.1							2	2.2					3	3.4
	黒色頁岩									2	2.2			1	1.1					3	3.4	2	2.2			8	9.0
	黒色安山岩																			1	1.1					1	1.1
	チャート																			1	1.1					1	1.1
	粗粒輝石安山岩																							17	19.1	17	19.1
13	黒曜石																			45	50.6					45	50.6
	黒色頁岩	1	1.1																							1	1.1
	黒色安山岩																			2	2.2					2	2.2
20	黒曜石			1	1.1															10	11.2					11	12.4
合計	黒曜石			1	1.1							1	1.1							57	64.0					59	66.3
	黒色頁岩	1	1.1							2	2.2			1	1.1					3	3.4	2	2.2			9	10.1
	黒色安山岩																			3	3.4					3	3.4
	チャート																			1	1.1					1	1.1
	粗粒輝石安山岩																							17	19.1	17	19.1
合　計		1	1.1	1	1.1	0		0		2	2.2	1	1.1	1	1.1	0		0		64	71.9	2	2.2	17	19.1	89	100

ブロック 11（第８・９図・第３～５表・PL.16・17・53）

遺跡南端の 1-B 地区に位置し、同文化層に属する他の２ブロックとは 650m 以上離れている。東西 7.6m × 南北 5.6m の範囲に黒色頁岩を主体とする遺物集中が認められ、出土総点数は剥片、礫合わせて 30 点である。石材の内訳は黒色頁岩が８点、黒曜石が３点、黒色安山岩とチャートが各１点、安山岩質の礫が 17 点である。黒色頁岩は打点を 180° 変えながら薄い剥片を取り出そうとしている様子が看取でき、また**接２**のように剥片縁辺に二次加工を施すものもある。この加工は、その位置と方法から尖頭器の製作を目的としていたと思われる。その他には二次加工を施した遺物はなく、わずかに黒曜石の剥片**１**に微細な連続剥離が認められるのみである。なお、黒色頁岩の石核残欠とも思われる**２**もある。

【二次加工ある剥片】

接２は黒色頁岩製で、やや大型の縦長剥片の両側縁に調整を加える。下端に表面側から打撃を加えた際に折損しており、以後の加工を断念したものと思われる。

【使用痕ある剥片】

１は黒曜石製の剥片で、風化面を残す。剥片下端の一部に微細な連続剥離が認められる。

【剥片類】

接３は黒色頁岩の剥片である。接合資料であるが、人為的に折断したものか否か不明。ポイントフレイクと考えられる。**接１**は黒色頁岩製の剥片である。

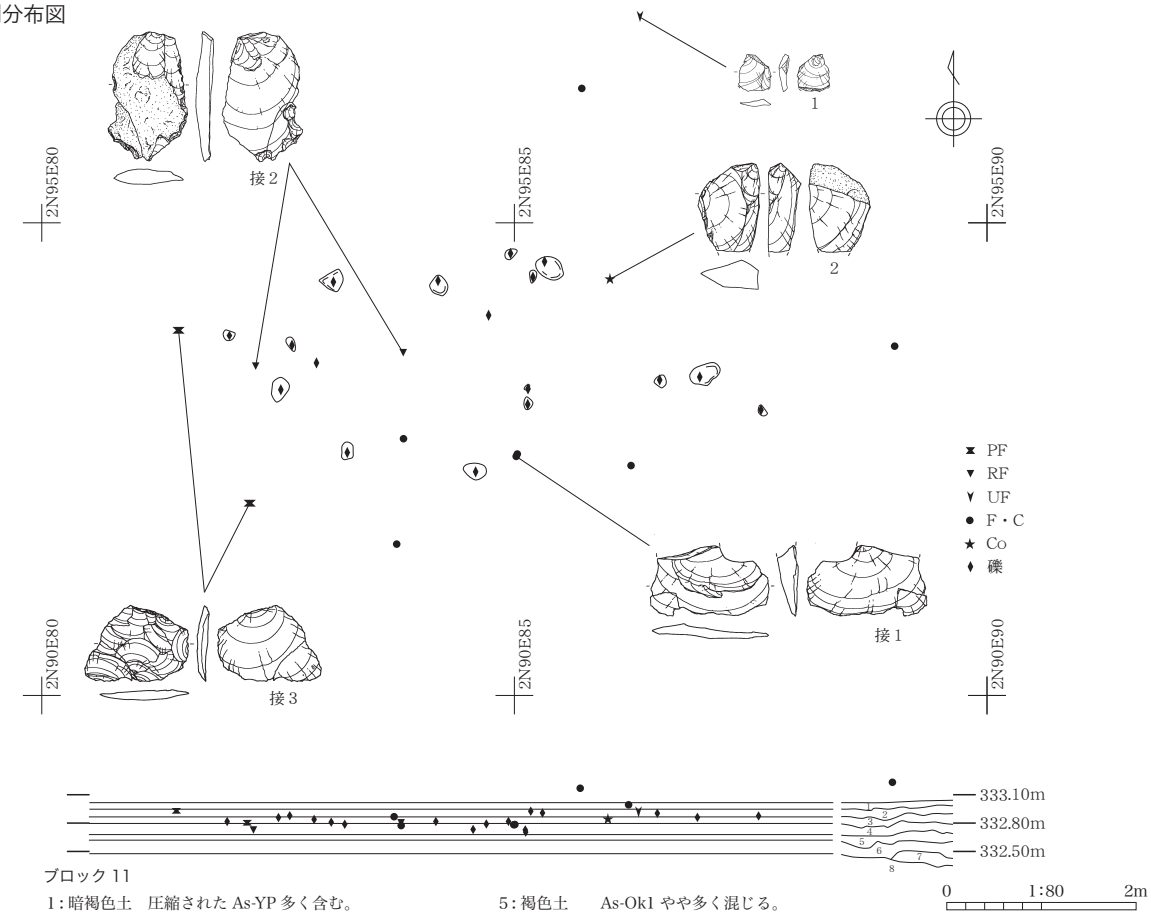
【石核】

２は黒色頁岩を石材とした石核残欠と思われる。原石面を残し、粗く割った横長の剥片を素材としており、縁辺を利用して打点を変えながら小形・横長の剥片を剥離させている。

第３表　第１文化層　ブロック 11 出土石器組成表

器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器	尖頭器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	彫器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	石刃	ﾌﾟﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	剥片・砕片	ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ	礫	合計	組成比（%）
黒曜石						1				2			3	10.0
黒色頁岩					2		1			3	2		8	26.7
黒色安山岩										1			1	3.3
チャート										1			1	3.3
粗粒輝石安山岩												17	17	56.7
合　計					2	1	1			7	2	17	30	100
組成比（%）					6.7	3.3	3.3			23.3	6.7	56.7	100	

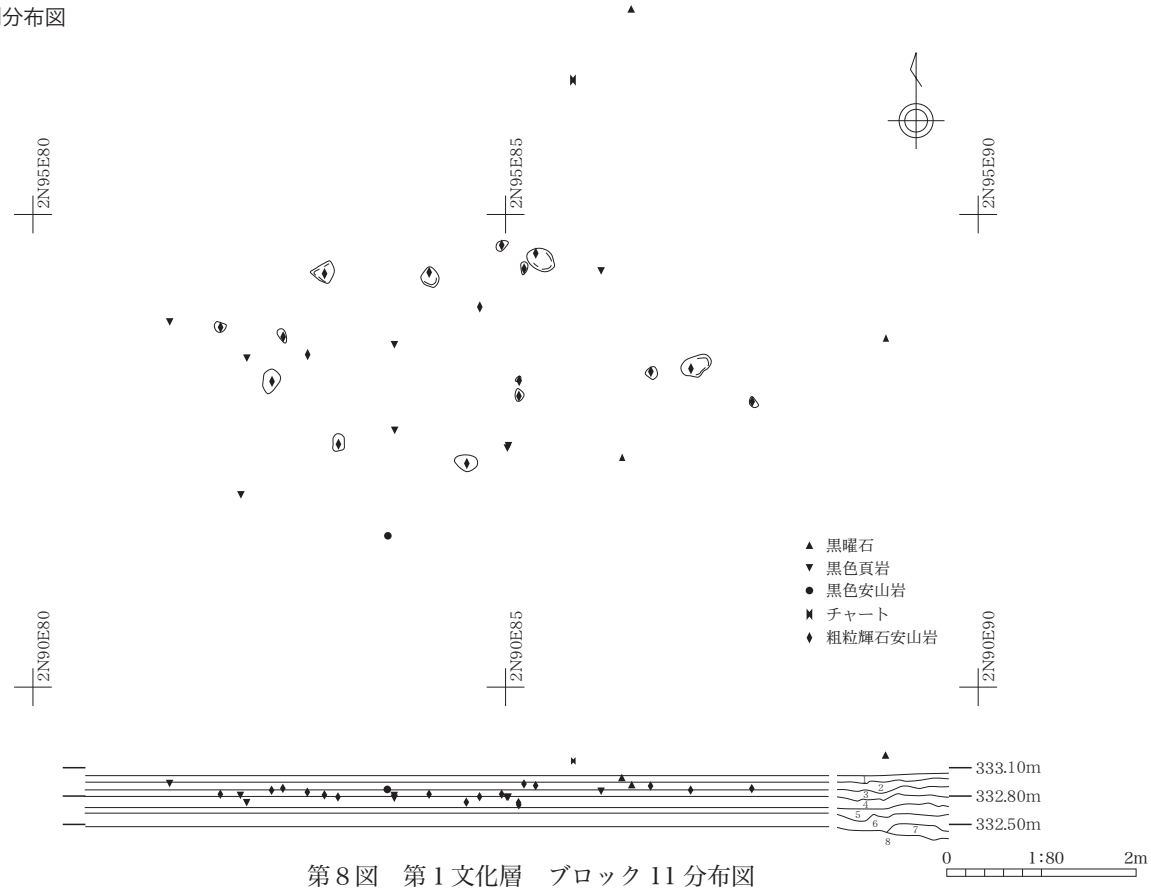
器種別分布図



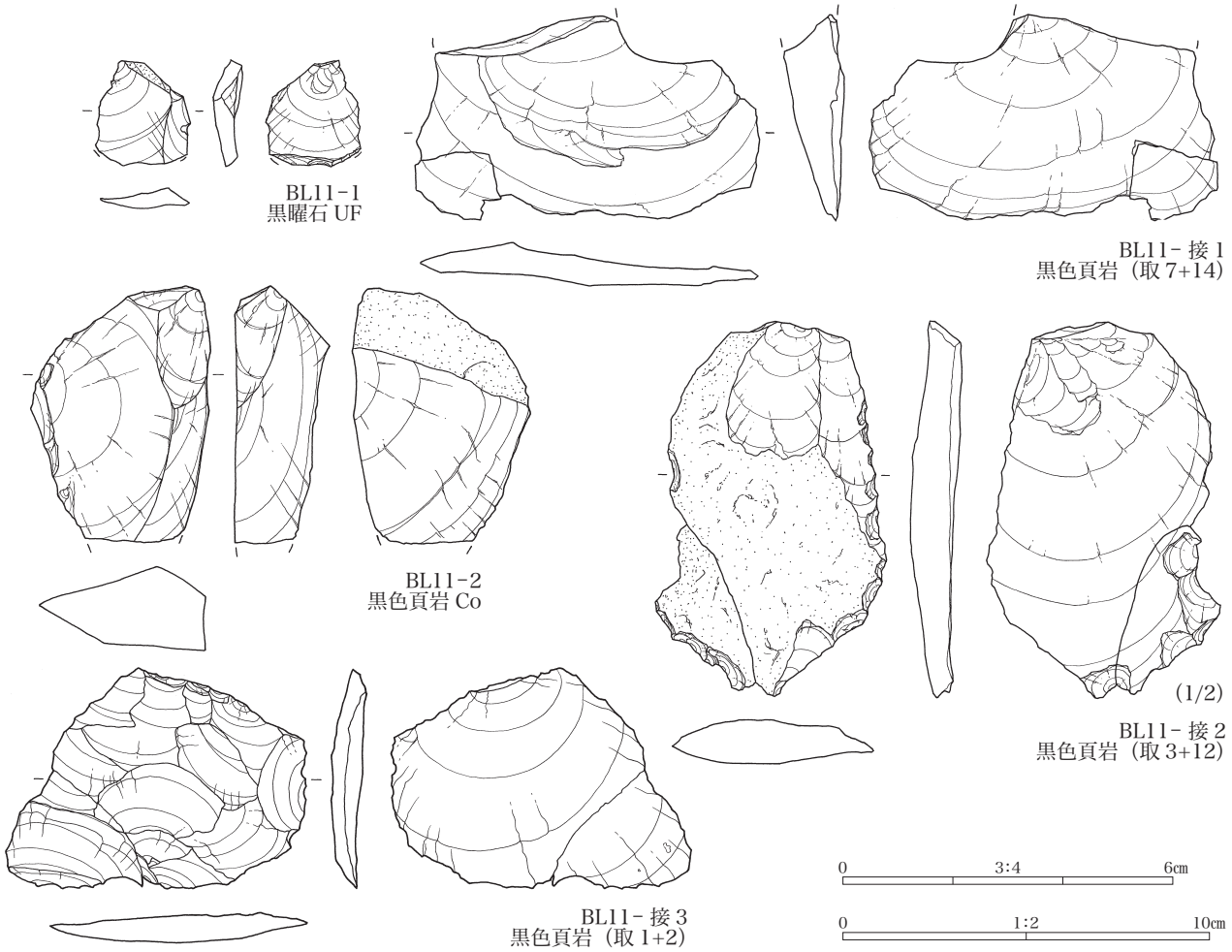
ブロック 11

1：暗褐色土　圧縮された As-YP 多く含む。
2：暗褐色土　As-YP ﾌﾞﾛｯｸを多く含む。
3：暗褐色土　As-YP やや多く含む。
4：暗褐色土　As-YP 若干、As-Ok1 若干含む。基本土層Ⅵ層。
5：褐色土　As-Ok1 やや多く混じる。
6：暗褐色土　As-Sr 多く含む。
7：明褐色土　As-Sr 多く含む（降灰層）
8：暗褐色土　As-Sr 若干混じる。ややシルト質を呈す。

石材別分布図



第８図　第１文化層　ブロック 11 分布図



第９図　第１文化層　ブロック 11 出土石器

第４表　第１文化層　ブロック 11 出土石器一覧表（１）

掲載№	取上№	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
BL11-1	9	UF	黒曜石	1.9	1.8	0.5	1.13	332.904	
BL11-2	13	Co	黒色頁岩	4.7	4.3	2.2	23.15	332.834	
BL11-接1		接合資料	黒色頁岩	3.7	6.3	1.1	13.48		7･14の接合　F
BL11-接2		接合資料	黒色頁岩	10.2	6.4	1.4	86.73		3･12の接合　RF
BL11-接3		接合資料	黒色頁岩	4.0	5.5	0.7	10.89		1･2の接合　PF
	1	PF	黒色頁岩	2.5	2.2	0.4	1.31	332.926	2と接合
	2	PF	黒色頁岩	4.0	4.6	0.7	9.58	332.798	1と接合
	3	RF	黒色頁岩	4.6	2.9	1.2	8.59	332.721	12と接合
	4	礫	粗粒輝石安山岩	5.0	3.0	1.0	19.44	332.831	
	5	C	黒色安山岩	1.8	1.2	0.2	0.48	332.859	
	6	F	黒色頁岩	2.0	1.7	0.3	1.13	332.764	
	7	F	黒色頁岩	1.5	1.6	0.5	0.87	332.773	14と接合
	8	C	チャート	0.9	0.8	0.1	0.07	333.155	
	10	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	332.979	
	11	C	黒曜石	0.7	0.7	0.2	0.10	333.211	
	12	RF	黒色頁岩	10.2	6.1	1.4	78.14	332.793	3と接合
	14	F	黒色頁岩	10.2	6.1	1.4	12.61	332.771	7と接合
	15	礫	粗粒輝石安山岩	3.0	2.0	1.0	7.97	332.780	
	16	礫	粗粒輝石安山岩	6.0	4.5	1.0	24.86	332.693	
	17	礫	粗粒輝石安山岩	13.0	10.0	4.5	783.48	332.858	
	18	礫	粗粒輝石安山岩	31.0	21.5	7.0	7,279.6	332.845	
	19	礫	粗粒輝石安山岩	17.0	12.5	12.0	2,567.85	332.889	
	20	礫	粗粒輝石安山岩	13.0	18.5	8.5	1,914.27	332.716	
	21	礫	粗粒輝石安山岩	25.0	24.0	16.5	10,950	332.722	
	22	礫	粗粒輝石安山岩	27.5	24.0	12.5	9,025.5	332.895	
	23	礫	粗粒輝石安山岩	11.5	9.5	6.0	811.52	332.914	
	24	礫	粗粒輝石安山岩	14.5	13.5	9.0	2,526.24	332.806	

第５表　第１文化層　ブロック 11 出土石器一覧表（２）

掲載No.	取上No.	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
	25	礫	粗粒輝石安山岩	19.5	17.0	9.0	5,680.0	332.807	
	26	礫	粗粒輝石安山岩	25.5	20.5	18.5	9,950.0	332.802	
	27	礫	粗粒輝石安山岩	15.0	7.5	3.0	372.69	332.872	
	28	礫	粗粒輝石安山岩	12.0	11.5	9.5	1,496.25	332.811	
	29	礫	粗粒輝石安山岩	26.0	17.0	8.0	3,747.35	332.852	
	30	礫	粗粒輝石安山岩	17.0	12.0	7.5	1,786.77	332.780	

ブロック 13（第 10・11 図・第６～８表・PL.53）

遺跡北部の 6-D 区東端近くに位置する。東西 6.8m× 南北 6.0m の範囲に 48 点の遺物が集中し、そのうち 45 点は質の悪い黒曜石製の剥片類であった。これらは大多数が重さ 0.1 g 以下の砕片で、何を生産したのか推定するにも至らないが、図示し得た **3** をみると小形で縦長の剥片を連続して剥離させているようにもみえる。ただ、本ブロックの黒曜石は安山岩質の粒状夾雑物を多く含むことから、大形の剥片が取り出しにくく、結果的に小形の剥片を剥離させざるを得なかったのではないかとも想像できる。本ブロックの黒曜石は夾雑物の多さに加えてガラス質部の色調や質感が他のブロック出土のものと異なり、詳細な分析を行っていないため断定はできないが、栃木高原山産である可能性も考えられる。黒曜石以外では、黒色頁岩製のナイフ形石器が１点、黒色安山岩製の剥片が２点出土している。

【ナイフ形石器】

1 は黒色頁岩製ナイフ形石器である。素材の剥片を折断した後に基部及び先端の片側縁に粗い調整を加える。黒曜石のグループの西端から出土している。

【剥片類】

2 は黒色安山岩製の剥片である。折断しているようであるが、他に加工が施されておらず断定できない。黒曜石のグループからは西にやや離れた場所から出土しているが、同一石材のもう一点は黒曜石に混じって出土した。

3 は黒曜石製の縦長小剥片である。同一方向から繰り返された打撃で剥離された縦長の小剥片であり、細石刃である可能性もある。しかし、他に加工された剥片や石核等が出土しなかったため、断定できない。

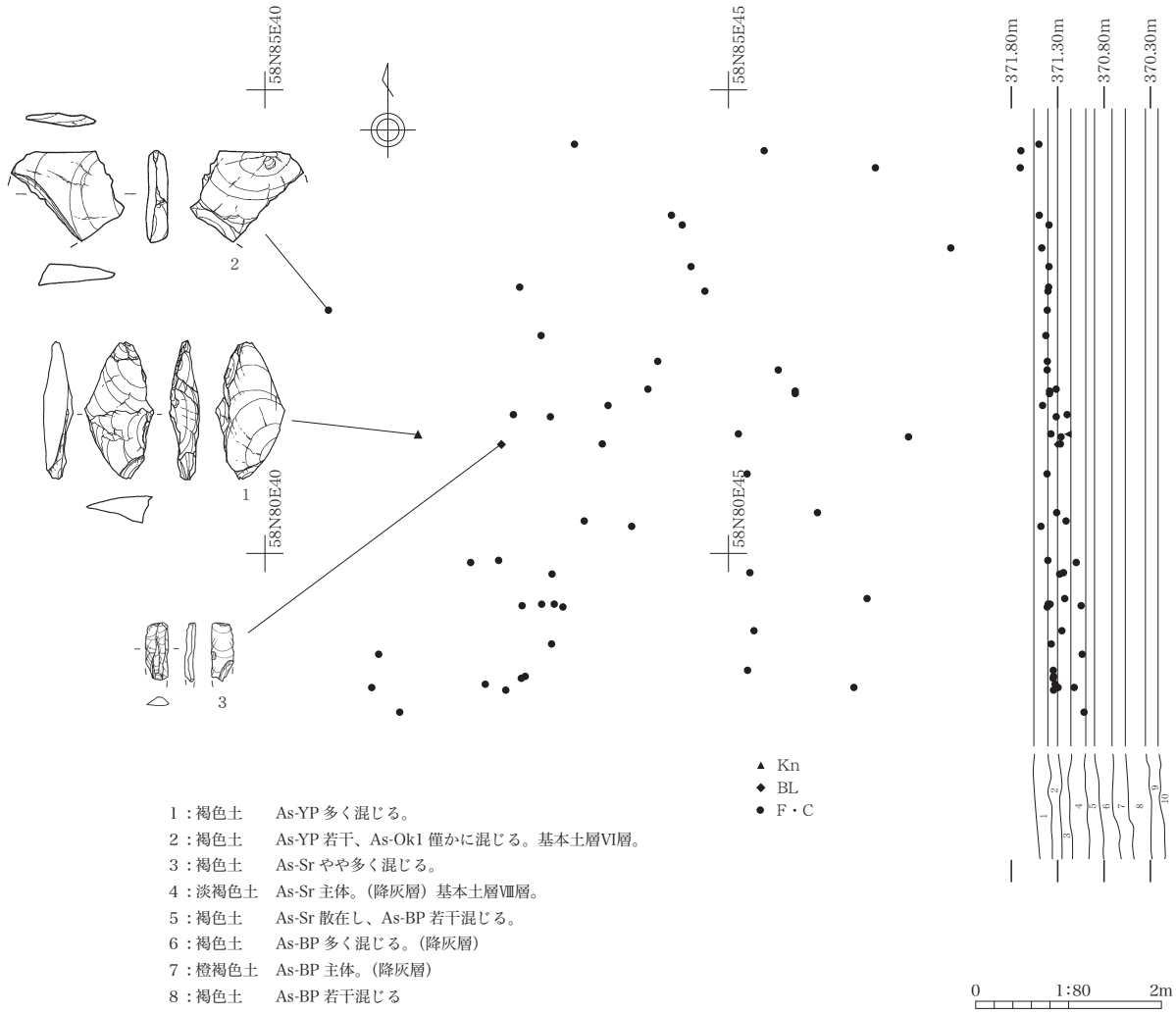
第６表　第１文化層　ブロック 13 出土石器組成表

器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器	尖頭器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	彫器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	石刃	ﾌﾟﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	剥片・砕片	ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ	礫	合計	組成比（%）
黒曜石										45			45	93.8
黒色頁岩	1												1	2.1
黒色安山岩										2			2	4.2
合　計	1									47			48	100
組成比（%）	2.1									97.9			100	

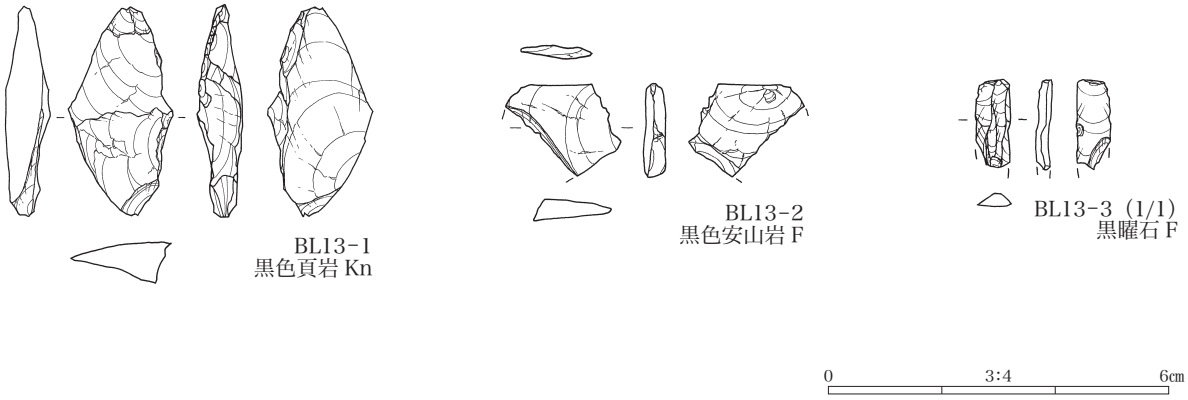
第７表　第１文化層　ブロック 13 出土石器一覧表（１）

掲載No.	取上No.	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
BL13-1	1	Kn	黒色頁岩	3.8	1.9	0.8	4.14	371.191	
BL13-2	2	F	黒色安山岩	1.6	2.0	0.5	1.23	371.413	
BL13-3	5	F	黒曜石	1.2	0.5	0.3	0.11	371.303	細石刃の可能性？
	3	C	黒曜石	0.5	0.3	0.3	0.04	371.210	
	4	C	黒曜石	0.3	0.0	0.2	0.04	371.481	
	6	C	黒曜石	0.7	0.5	0.3	0.13	371.271	
	7	C	黒曜石	0.4	0.3	0.2	0.03	371.198	
	8	C	黒曜石	0.8	0.5	0.2	0.06	371.316	
	9	C	黒曜石	0.4	0.4	0.2	0.04	371.463	
	10	F	黒色安山岩	1.0	0.7	0.3	0.40	371.317	
	11	C	黒曜石	0.5	0.5	0.5	0.05	371.412	
	12	C	黒曜石	0.5	0.4	0.2	0.03	371.428	
	13	C	黒曜石	0.4	0.4	0.2	0.02	371.398	
	14	C	黒曜石	0.5	0.3	0.1	0.03	371.499	
	15	C	黒曜石	0.3	0.4	0.2	0.02	371.503	
	16	C	黒曜石	0.4	0.5	0.1	0.04	371.697	
	17	C	黒曜石	0.3	0.2	0.1	0.20	371.704	

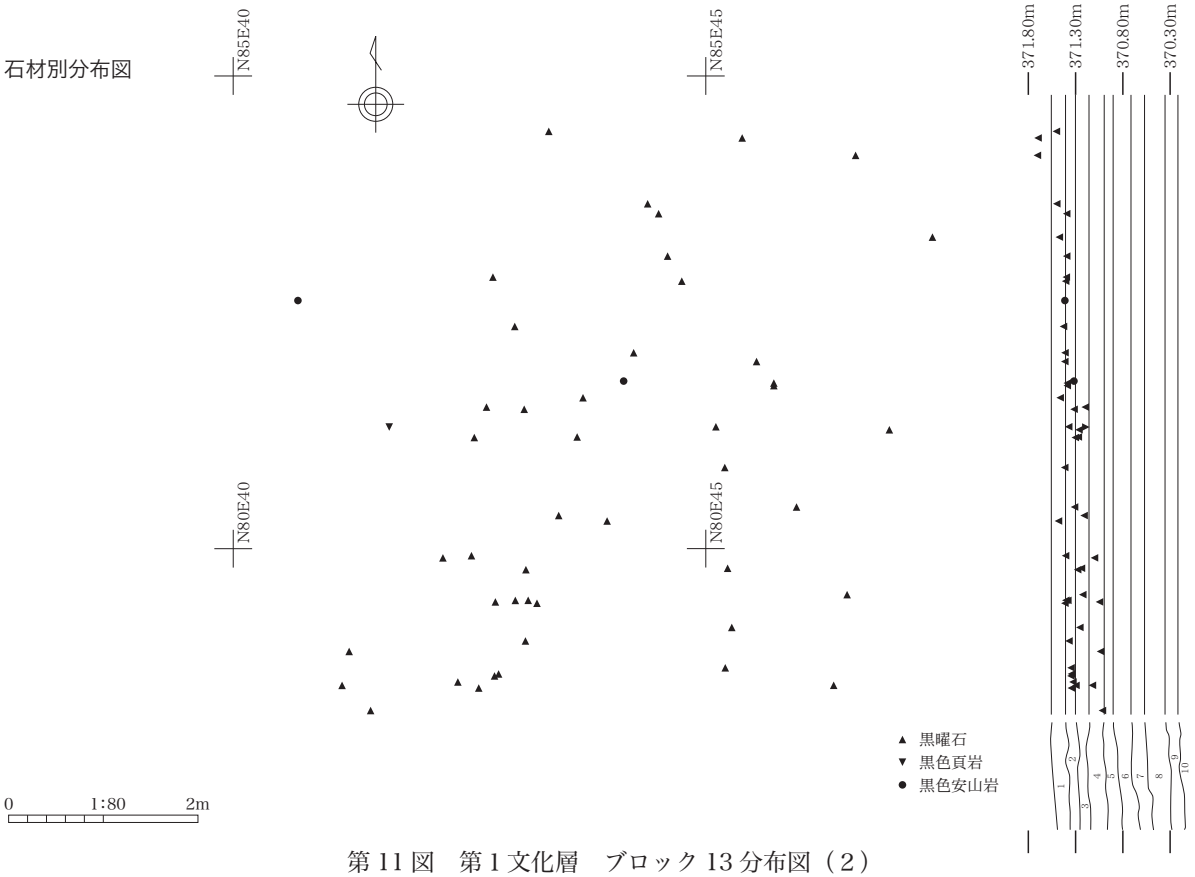
器種別分布図



1：褐色土　As-YP 多く混じる。
2：褐色土　As-YP 若干、As-Ok1 僅かに混じる。基本土層Ⅵ層。
3：褐色土　As-Sr やや多く混じる。
4：淡褐色土　As-Sr 主体。（降灰層）基本土層Ⅷ層。
5：褐色土　As-Sr 散在し、As-BP 若干混じる。
6：褐色土　As-BP 多く混じる。（降灰層）
7：橙褐色土　As-BP 主体。（降灰層）
8：褐色土　As-BP 若干混じる
9：褐色土　As-BP やや多く混じる。
10：褐色土　As-BP 若干、拳大～巨礫混じる。基本土層XⅦ層。



第 10 図　第 1 文化層　ブロック 13 分布図（1）・出土石器

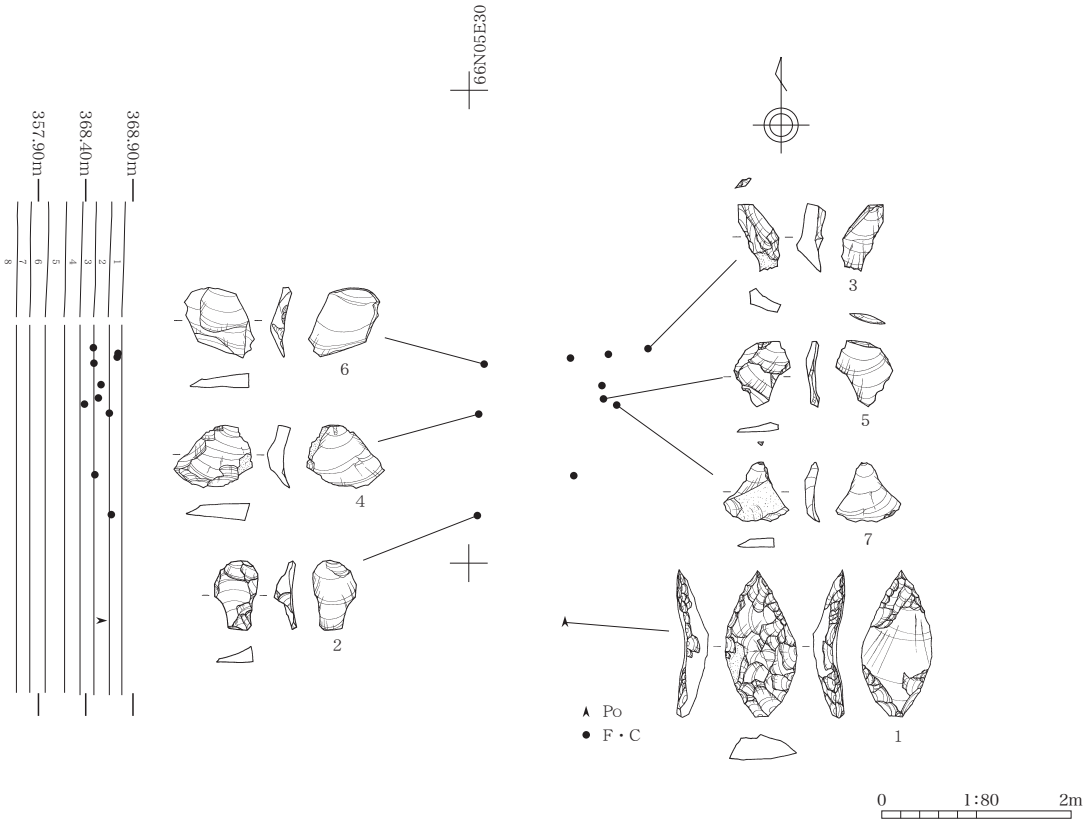


第 11 図　第 1 文化層　ブロック 13 分布図（2）

第 8 表　第 1 文化層　ブロック 13 出土石器一覧表（2）

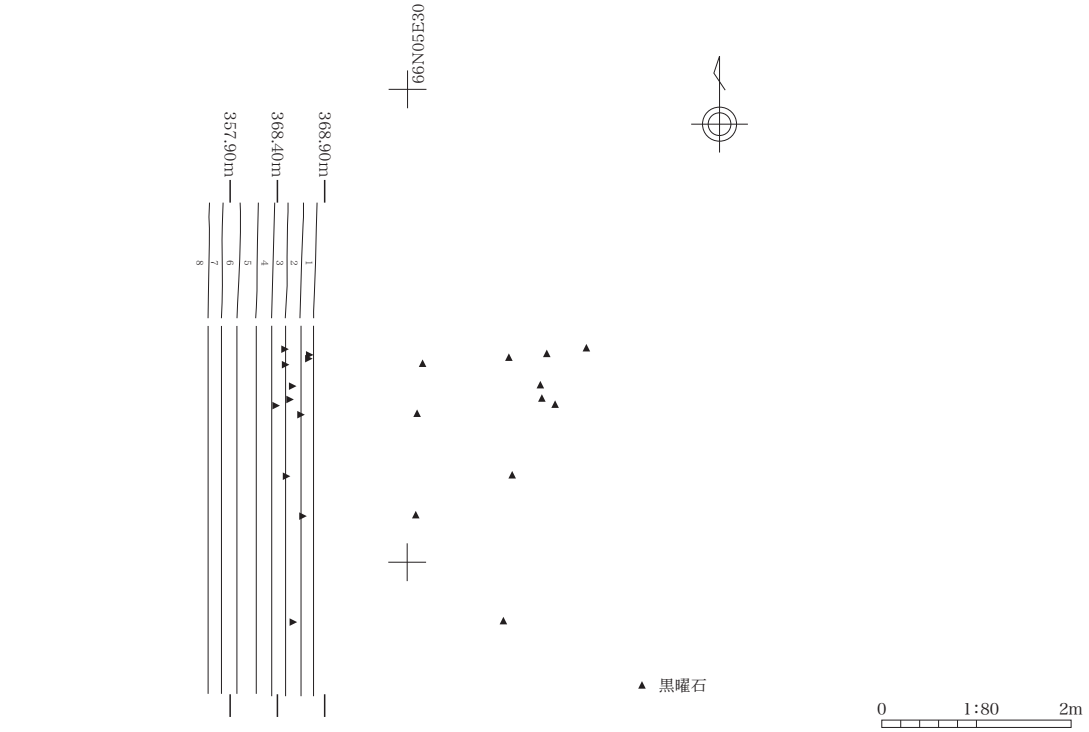
掲載No.	取上No.	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
	18	C	黒曜石	0.5	0.3	0.1	0.03	371.472	
	19	C	黒曜石	0.5	0.4	0.2	0.03	371.394	
	20	C	黒曜石	0.7	0.4	0.1	0.06	371.394	
	21	C	黒曜石	0.5	0.4	0.2	0.03	371.405	
	22	C	黒曜石	0.5	0.4	0.3	0.03	371.414	
	23	C	黒曜石	0.3	0.3	0.2	0.02	371.388	
	24	C	黒曜石	0.5	0.5	0.1	0.08	371.388	
	25	C	黒曜石	0.4	0.3	0.3	0.02	371.264	
	26	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.373	
	27	C	黒曜石	0.5	0.4	0.1	0.03	371.415	
	28	C	黒曜石	0.5	0.4	0.2	0.03	371.311	
	29	C	黒曜石	0.5	0.5	0.2	0.05	371.238	
	30	C	黒曜石	0.3	0.2	0.1	0.01	371.224	
	31	C	黒曜石	0.4	0.4	0.1	0.03	371.255	
	32	C	黒曜石	0.3	0.3	0.1	0.01	371.348	
	33	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.122	
	34	C	黒曜石	0.2	0.1	0.1	0.01	371.406	
	35	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.100	
	36	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.278	
	37	C	黒曜石	0.4	0.3	0.2	0.02	371.413	
	38	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.403	
	39	C	黒曜石	0.3	0.3	0.1	0.01	371.382	
	40	C	黒曜石	0.4	0.7	0.2	0.05	371.370	
	41	C	黒曜石	0.5	0.4	0.2	0.04	371.344	
	42	C	黒曜石	0.5	0.3	0.1	0.02	371.349	
	43	C	黒曜石	0.3	0.5	0.2	0.03	371.345	
	44	C	黒曜石	0.3	0.3	0.1	0.01	371.328	
	45	C	黒曜石	0.5	0.3	0.1	0.03	371.016	
	46	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.296	
	47	C	黒曜石	0.4	0.3	0.1	0.02	371.036	
	48	C	黒曜石	0.4	0.7	0.2	0.03	371.047	

器種別分布図



1：褐色土　As-YP やや多く混じり。
2：褐色土　As-YP 若干、As-Ok1 僅かに混じる。基本土層Ⅵ層。
3：褐色土　As-Sr 若干、As-Ok1 僅かに混じる。
4：淡褐色土　As-Sr 主体。（降灰層）基本土層Ⅷ層。
5：褐色土　As-Sr やや散在し、As-BP 若干混じる。
6：褐色土　As-BP 多く混じる。（降灰層）
7：橙褐色土　As-BP 主体。（降灰層）
8：黄白色土　褐色の As-BP 若干、小礫混じり、粘質。基本土層Ⅴ層。

石材別分布図



第 12 図　第 1 文化層　ブロック 20 分布図

ブロック 20（第 12・13 図・第 9・10 表・PL.18・53）

遺跡北西部の 6-E 区東端に位置する。東西 2.0m× 南北 3.0m の範囲に 11 点の遺物が集中する。全てが黒曜石であり、尖頭器 1 点のほかは二次加工されていない剥片類であった。

【尖頭器】

1 は縦長剥片素材で、素材剥離時の打点を先端として先端両脇を細かく打ち欠き、更に剥片下端両側縁を折断して調整を加えて木葉形に整形している。調整剥離は、背面側においては石器中央部にまで達しているが、腹面ではそれほど大きくなく、素材剥離面を広く残している。

【剥片類】

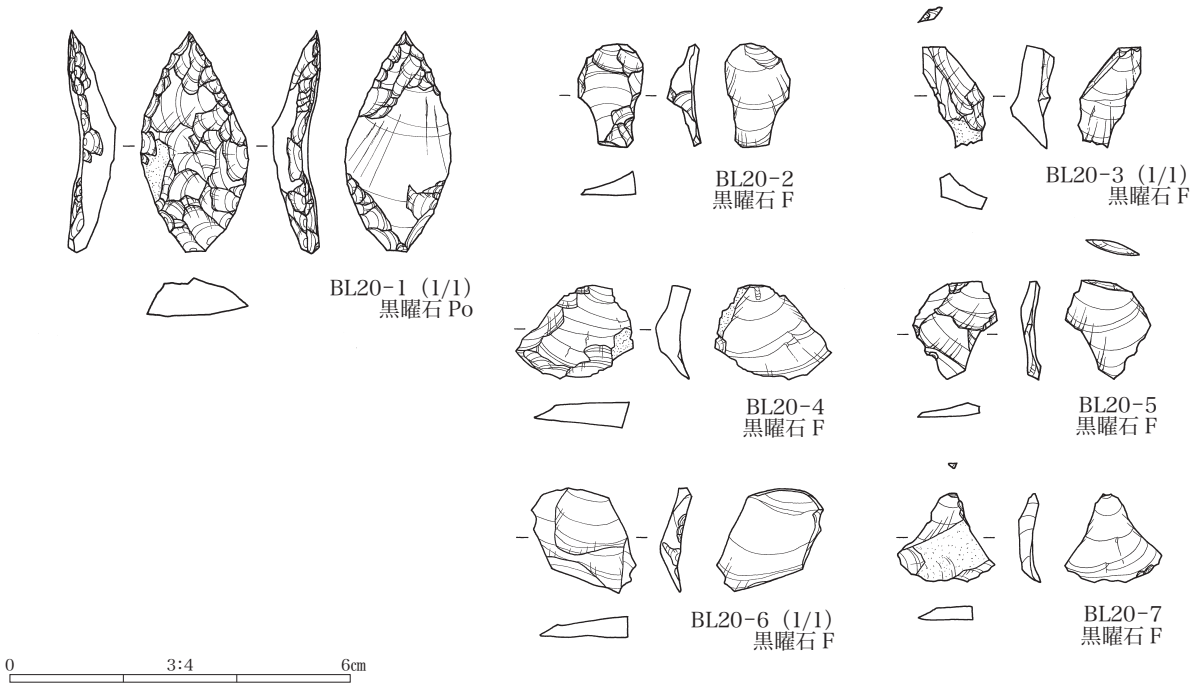
2 から **7** は不定形の剥片である。小形の石核から打点を変えつつ剥離されたもので、特に定型的な剥片を生産しようとしていたようにはみえない。

第 9 表　第 1 文化層　ブロック 20 出土石器組成表

器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器	尖頭器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	彫器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	石刃	ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	剥片・砕片	ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ	礫	合計	組成比（%）
黒曜石		1								10			11	100
合　計		1								10			11	100
組成比（%）		9.1								90.9			100	

第 10 表　第 1 文化層　ブロック 20 出土石器一覧表

掲載No.	取上No.	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
BL20-1	1	Po	黒曜石	2.9	1.4	0.7	1.79	368.569	
BL20-2	2	F	黒曜石	1.8	1.2	0.4	0.57	368.671	
BL20-3	11	F	黒曜石	1.3	0.8	0.5	0.30	368.481	
BL20-4	3	F	黒曜石	1.7	2.1	0.6	1.20	368.650	
BL20-5	7	F	黒曜石	1.7	1.5	0.2	0.44	368.534	
BL20-6	4	F	黒曜石	1.4	1.4	0.3	0.42	368.487	
BL20-7	8	F	黒曜石	1.6	1.7	0.3	0.60	368.387	
	5	C	黒曜石	1.0	0.5	0.1	0.05	368.497	
	6	C	黒曜石	0.9	0.6	0.1	0.05	368.733	
	9	C	黒曜石	0.8	0.6	0.2	0.09	368.562	
	10	F	黒曜石	1.1	0.9	0.3	0.22	368.742	



第 13 図　第 1 文化層　ブロック 20 出土石器

（3）第２文化層

標準土層Ⅷ層上面を生活面とし（第５図参照）、遺物はⅤ層からⅨ層の間に包含される。Ⅷ層は As-Sr 極大層であり、本文化層の時期は同テフラ降下直後とみられる。本遺跡の主体をなす時期であり、検出されたブロック 18 か所のうち 13 か所が本文化層に属する（第 14 図）。6-E 区にあるブロック 19 を除く 12 か所は遺跡南半の比較的低位に位置する。As-Sr 上面で復元した地形図を元にすると、ブロック 19 が飛び離れて標高が高く、379m を測る。次位のブロック 14 が標高約 355m で、このブロックと最低位のブロック 1 との標高差 21m のうちに 12 か所のブロックが存在する。そしてこの 12 か所のうち、2-A 区西部、及び 2-C 区にあるブロック 3・4・6・7・10・14 ～ 18 の 10 か所が谷地形の西岸に南北に並ぶ。更にその中でも、2-A 区のブロック 6・7 と 2-C 区のブロック 14 ～ 17 の計 6 か所が東西 23m× 南北 43m の範囲内に集中し、一つのグループを形成している。また、2-A 区のブロック 4 と 2-B 区のブロック 10 は東西 14m× 南北 23m の範囲に集中し、かつ、ブロック間接合資料があることからこれも一グループと認められ得る。この構造からはずれるのは前述のブロック 19 の他にブロック 1・5 であり、両ブロックともに遺跡最南端に位置する。それぞれ最寄りのブロックから 100m 以上隔たった単独のブロックであるが、ブロック 1 のある 1 区は狭く、他の調査区と 100m 近く離れていることから、また、ブロック 5 は調査区の南東端に位置することから、ともに近傍の調査範囲外に未発見のブロックが存在する可能性は否定できず、特にブロック 5 の周辺は上記ブロック群の例からもその蓋然性は高い。

本文化層の器種構成、及び石材組成は第 11・12 表のとおりである。石材では黒曜石が 360 点、黒色頁岩が 325 点で、この二者が卓越している。本遺跡で出土した黒曜石製の資料は比較的小形で、最も大きな資料でも長さ 5.5cm× 幅 3.3cm× 厚さ 1.9cm で重さは 30 g に届かない。黒曜石は、夾雑物が多くやや脆く黒みの濃い印象のものと、夾雑物が少なく黒みの淡いものがあり、それぞれ母岩が異なるものと推定される。二者は、比率は異なるもののほとんどのブロックで混在して出土している。これら黒曜石については、理化学的産地同定は行っていないものの、肉眼での観察からほとんどの資料が信州系と判断された。この他には高原山産である可能性を否定できない資料がわずかにあるが、箱根産や神津島産とみられる資料は認められなかった。次に多く出土している黒色頁岩も複数の母岩があることが推定され、ブロック 1 で出土した 293 点は少なくとも 2 個体の母岩から剥離されているようにみえる。また、ブロック 19 で出土した黒色頁岩製剥片も母岩が 2 個体以上と推定され、そのうち 1 個体の特徴はブロック 1 の一方と共通する。この黒色頁岩は群馬県内の旧石器時代～縄文時代に石器石材として普遍的に利用されているものと同質であり、本県内で採取されたものである。この 2 種に続くのは玉髄で、80 点出土している。乳白色を呈する資料とやや黒っぽい資料があり、明らかに複数の母岩が存在する。いずれも在地では採取できず、東北・北陸地方より搬入されたものと推定される。

これらの数量的にまとまった資料を眺めると、石材と器種にはある程度の相関関係があるようにみえる。最も明確に石材の選択が行われていると思われるのが玉髄であり、尖頭器の素材となりうる縦長剥片を生産していた痕跡が認められるにもかかわらず、製品としての尖頭器とポイントフレイクの双方が存在しないことから、尖頭器のための石材としては玉髄を排していることが判る。逆に黒色頁岩は明確な製品が出土していないものの、ブロック 1 でポイントフレイクが多量に出土していることから尖頭器製作に使用していたことが明らかであり、玉髄と同様に、縦長剥片を剥離させながらもナイフ形石器その他の製品を製作していないようにみえる。そして、これら 2 種に比べて黒曜石はかなり汎用的に使用されているようで、各器種製品とブランティングチップやポイントフレイクといった派生剥片が確認されている。

その他の石材は数量的に傾向を窺うことが難しいので、目的とする製品による選択が行われたか否かは判断を保留せざるを得ないが、チャートや褐色碧玉等の非在地系で珪質の石材については、製品としてはナイフ形石器しか出土していないという事実を消極的傍証として挙げておきたい。

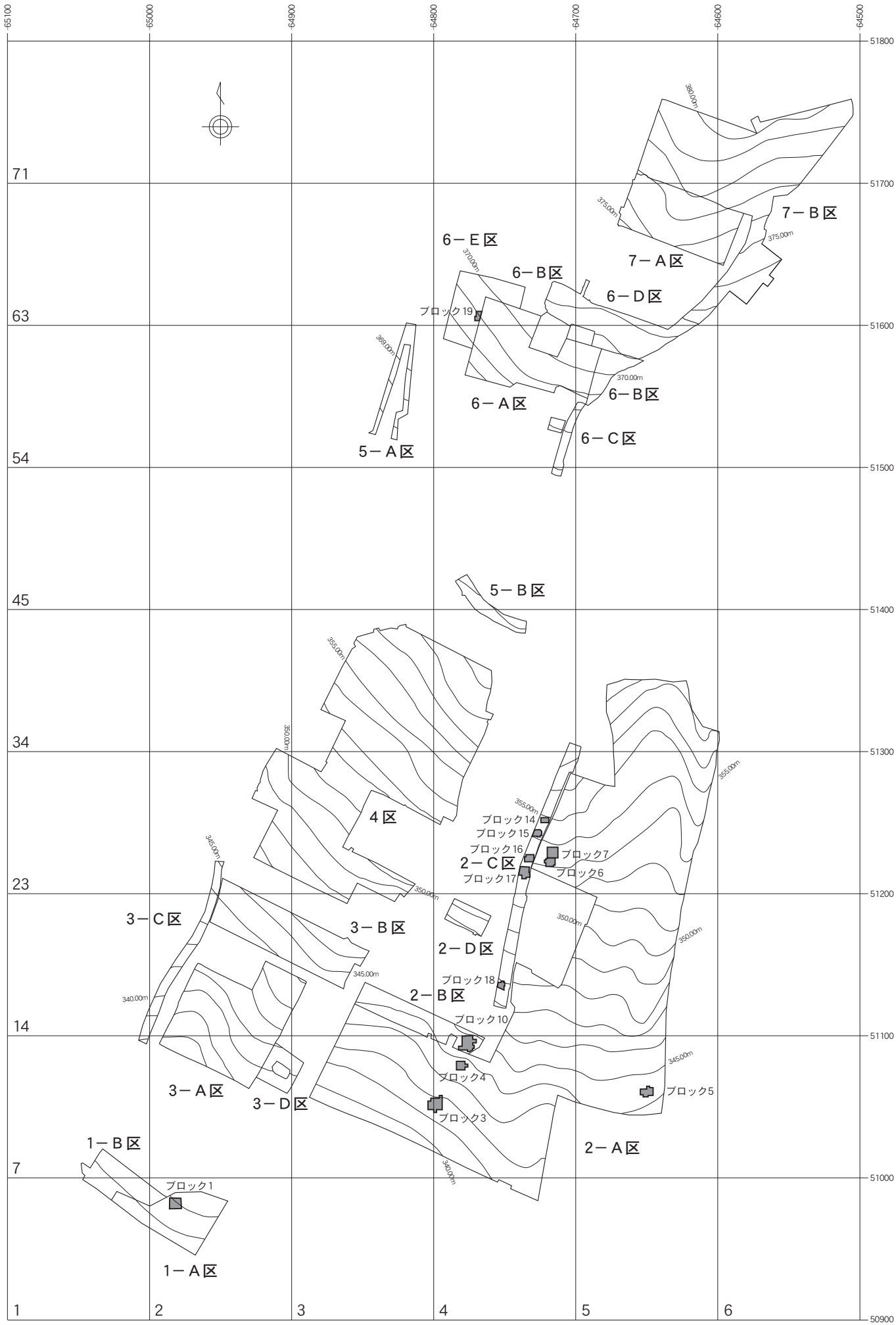
なお、本文化層ではブロック毎の石材組成比はばらつきが大きく、本文化層全体に共通する傾向は認められない。器種構成でも定型的な製品が多く石核類が出土しないブロックと、製品が出土しなかったかわりに石核が複数出土しているブロックがあり、このことから、本文化層ではナイフ形石器製作と尖頭器製作が混在し、更にブロックによって製作工程の段階が異なることが想定される。

第 11 表　第２文化層　出土石器組成表（1）

ブロック	器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器		尖頭器		ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		彫器		二次加工のある剥片		使用痕ある剥片		石核		石刃		ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ		剥片・砕片		ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ		礫		合計	
		点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
1	黒色頁岩									1	0.1									258	26.5	34	3.5			293	30.1
	粗粒輝石安山岩																							1	0.1	1	0.1
3	黒曜石	3	0.3							1	0.1	3	0.3			14	1.4			234	24.0					255	26.2
	黒色安山岩									1	0.1									1	0.1					2	0.2
	玉髄	1	0.1							1	0.1			1	0.1					8	0.8					11	1.1
	チャート																			1	0.1					1	0.1
	石英																			1	0.1					1	0.1
	粗粒輝石安山岩																							27	2.8	27	2.8
	珪質変質岩																			1	0.1					1	0.1
4	黒曜石											1	0.1							5	0.5					6	0.6
	黒色頁岩																			1	0.1					1	0.1
	玉髄	1	0.1			1	0.1			1	0.1			3	0.3	7	0.7			13	1.3					26	2.7
	粗粒輝石安山岩																			1	0.1			13	1.3	14	1.4
5	黒曜石									1	0.1	1	0.1							3	0.3					5	0.5
	黒色頁岩															7	0.7			11	1.1					18	1.8
	黒色安山岩															1	0.1			9	0.9					10	1.0
	チャート																			3	0.3					3	0.3
	褐色碧玉																			2	0.2					2	0.2
	粗粒輝石安山岩																							4	0.4	4	0.4
6	黒曜石					1	0.1											1	0.1	5	0.5					7	0.7
	チャート									1	0.1									3	0.3					4	0.4
	ホルンフェルス																			2	0.2					2	0.2
	粗粒輝石安山岩																			2	0.2			23	2.4	25	2.6
7	黒色頁岩																			1	0.1					1	0.1
	チャート									1	0.1			2	0.2					3	0.3					6	0.6
	ホルンフェルス													2	0.2					3	0.3					5	0.5
	珪質頁岩																			1	0.1					1	0.1
	粗粒輝石安山岩																			1	0.1			12	1.2	13	1.3
10	黒曜石	4	0.4			1	0.1			1	0.1					4	0.4			14	1.4					24	2.5
	黒色頁岩																			1	0.1					1	0.1
	玉髄	5	0.5			1	0.1			3	0.3					3	0.3			15	1.5					27	2.8
	粗粒輝石安山岩																			5	0.5			26	2.7	31	3.2
14	黒曜石																			1	0.1					1	0.1
	黒色頁岩																			3	0.3					3	0.3
	黒色安山岩																			2	0.2					2	0.2
15	黒曜石	2	0.2									1	0.1					1	0.1	6	0.6					10	1.0
	チャート	1	0.1																							1	0.1
	褐色碧玉	1	0.1																							1	0.1
	粗粒輝石安山岩																							9	0.9	9	0.9
16	黒曜石																			8	0.8					8	0.8
	チャート	1	0.1							1	0.1			1	0.1					1	0.1					4	0.4
	ホルンフェルス																			2	0.2					2	0.2
	粗粒輝石安山岩																							16	1.6	16	1.6
17	黒曜石	1	0.1	1	0.1					1	0.1	3	0.3							36	3.7	2	0.2			44	4.5
	ホルンフェルス																			2	0.2					2	0.2
	粗粒輝石安山岩																			1	0.1	2	0.2			3	0.3

第 12 表　第２文化層　出土石器組成表（２）

ブロック	器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器		尖頭器		ｽｸﾚｲﾊﾟｰ		彫器		二次加工のある剥片		使用痕ある剥片		石核		石刃		ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ		剥片・砕片		ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ		礫		合計	
		点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%	点数	%
18	黒色頁岩																			1	0.1					1	0.1
	黒色安山岩																			4	0.4					4	0.4
	玉髄	4	0.4							1	0.1									11	1.1					16	1.6
	石英																			1	0.1					1	0.1
	粗粒輝石安山岩																							3	0.3	3	0.3
19	黒曜石																			1	0.1					1	0.1
	黒色頁岩													1	0.1					6	0.6					7	0.7
	黒色安山岩																			1	0.1						
	粗粒輝石安山岩																							5	0.5	5	0.5
合計	黒曜石	9	0.9	1	0.1	2	0.2			4	0.4	9	0.9			18	1.8	2	0.2	313	32.2	2	0.2			360	37.0
	黒色頁岩									1	0.1			1	0.1	7	0.7			282	29.0	34	3.5			325	33.4
	黒色安山岩	1	0.1							1	0.1					1	0.1			17	1.7					20	2.1
	玉髄	11	1.1			2	0.2			6	0.6			4	0.4	10	1.0			47	4.8					80	8.2
	チャート	2	0.2							3	0.3			3	0.3					11	1.1					19	2.0
	石英																			2	0.2					2	0.2
	ホルンフェルス													2	0.2					9	0.9					11	1.1
	褐色碧玉	1	0.1																	2	0.2					3	0.3
	珪質頁岩																			1	0.1					1	0.1
	粗粒輝石安山岩																			10	1.0	2	0.2	139	14.3	151	15.5
	珪質変質岩																			1	0.1					1	0.1
合計		24	2.5	1	0.1	4	0.4	0	0.0	15	1.5	9	0.9	10	1.0	36	3.7	2	0.2	695	71.4	38	3.9	139	14.3	973	100



第14図　第２文化層　遺物集中ブロック（S=1/3,500）

住居状遺構（第 15 ～ 17 図・PL.11 ～ 13）

平成 10 年度 1- A区２N 65 グリッドの調査において、ローム層中に旧石器時代の遺物が認められたため、As-BP グループ上面まで順次掘り下げ石器群の把握に努めた。その結果、地表下 10cm 当たりに遺物が集中し（ブロック 1)、10cm 前後の厚さで堆積した As-Sr 下では遺物の出土は散漫であることが確認された。

この石器群を完掘するために隣接グリッドの拡張をしながら調査を続けたところ、As-Sr 下で黄灰白色軽石（As-Sr）と暗褐色土が同心状に円弧をなす土壌の変質部が確認された。当初は木の根等によるものと考え調査を進めたが、ブロックの縁辺部にのみ平面円形もしくは楕円形を呈する径 20cm 前後の土壌の変質が７か所で確認された。

この段階でこれらの変質部はブロック１に伴う遺構の一部と考察したが、国内においてこのような明瞭な形で旧石器時代の遺構が検出された事例が皆無に等しく、また北海道千歳市柏台１遺跡のように株痕や根痕に伴う形で遺物分布がみられた事例もある事から、ブロック１周辺を 20m 四方に拡げ同様の変質部や更なる遺物分布が検出されないか確認作業を継続して実施した。

周辺の確認調査では土の変質部は認められず遺物も出土しなかったため、これらの変質部をＰ１～７と命名し、Ｐ３―Ｐ７を結んだラインにサブトレンチを設定して変質部の土層堆積状況を観察した。その結果、平面で確認された軽石と暗褐色土が互層をなして柱痕状に落ち込むことが確認され、ブロック１に伴うピットとしての認識が強まったものの、この事例について多くの旧石器時代の研究者や地質の専門家などから客観的な見識を求めるため作業を一旦中断した。

その後、遺構としての共通の認識と作業手順が得られた３ヶ月後に調査を再開した。再開後はＰ４を半截し、土層確認を実施した。ピットの平断面の形状から、径 15cm 前後の先端を尖らせた杭状の柱が想定される。柱痕の断面観察において、Ｐ３とＰ７では一部掘り方を窺わせる土層堆積が見られたがＰ４は打ち込みを推定させる堆積を呈している。他の柱穴は現状保存した事もあり、全体的な柱の敷設方法は不明である。半截した３本のピットには共通して中央部と柱痕の周囲に軽石が検出された。これは As-Sr 上位より柱を設置したために生じた事象と考えられ、柱により引き込まれた周囲の軽石と柱が腐朽した後に流入した中央部の軽石として理解できよう。Ｐ３柱痕より採取した炭化物より得られた AMS 法による年代値が cal.B.P.17,950±60 年であり、As-Sr の降下が 19,000 ～ 24,000B.P. とされていることからも、これらの柱が As-Sr 上位より敷設されたものであることが検証されていると考えられる。また、仮に As-Sr 直上からの敷設であった場合は堆積土に占める軽石の比率がより多くなると推察できるため、遺構の構築面は As-Sr 降下以後やや間層が形成された段階にあると考察され、これも前述の柱痕の AMS 年代と矛盾を生じない。

このように自然科学分析で得られた As-Ok1 ～ As-Sr 間という遺物の出土層準と柱穴の構築年代は同時性が高く、さらに周辺には縄文時代の土坑以外の遺構や遺物が存在しない事から、これらの柱穴はブロック１と有機的な関係にあると考え、住居状遺構とした。また、Ｐ３―Ｐ７間のほぼ中央部において遺物の分布が欠如し径 20cm の範囲に炭化物がやや集中する部分が確認されたが、明瞭な焼土は検出されておらず赤城山南麓においては軽石降下面に炭化物が散在する例が多いため炉跡とはしなかった。

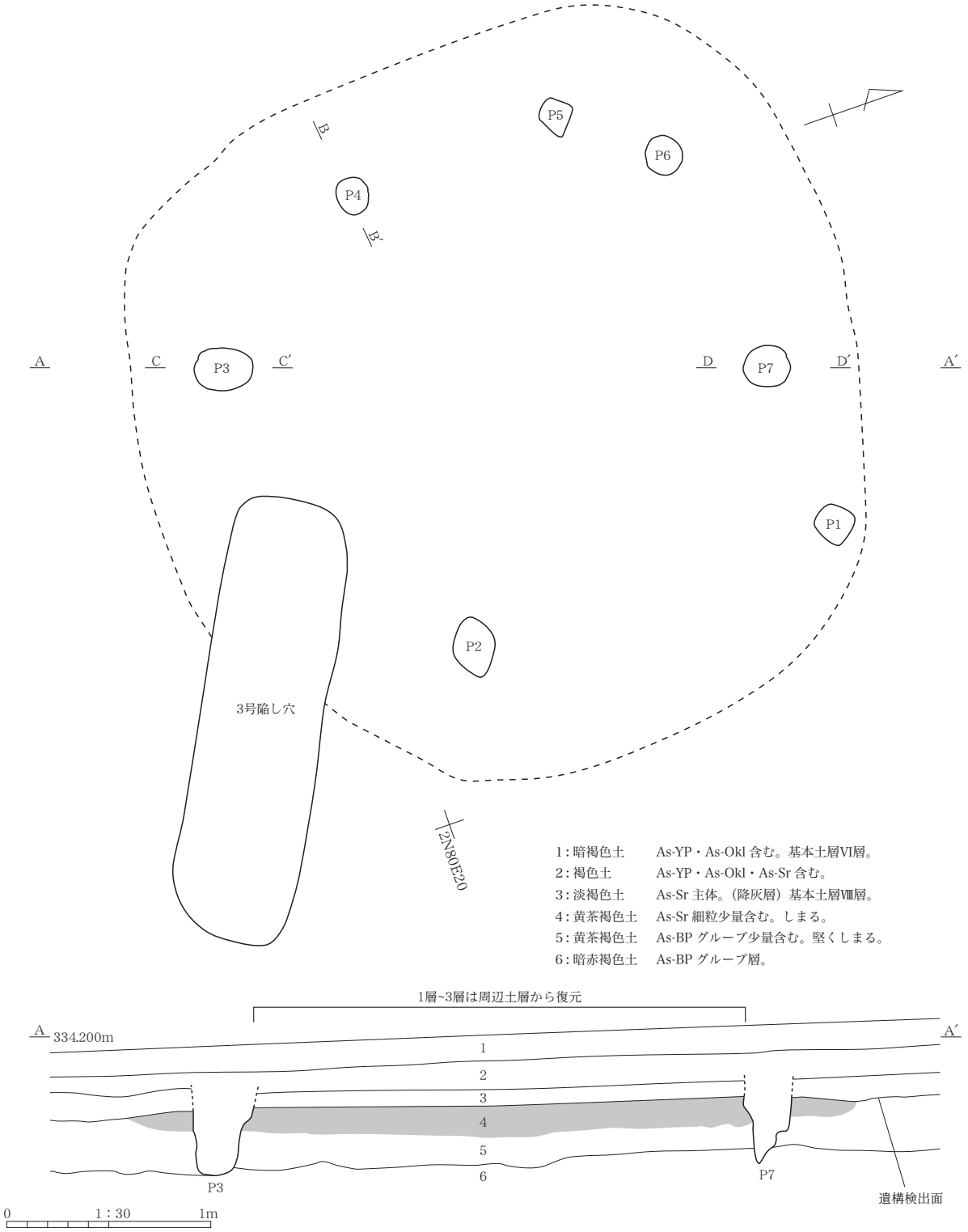
住居状遺構の規模は As-Sr 下の確認面で 3.74m×3.63m を測るが、遺構構築面においては 4m 前後であったと推定される。平面は洋梨形状の不整形でＰ５―Ｐ６間からＰ２にかけて主軸を持ち、南東部に開口していたと考察される。主軸方向は N-57°-W である。

また、住居状遺構下で少量の As-Sr 細粒が混じる土層が確認された。周辺の調査においても As-Sr 下にこのような土層は確認されていないため、この層をして竪穴覆土と認識してきた経緯がある。しかし As-Sr は

ブロック１（≒遺構）範囲でも遺構外と同様に確認され、遺物出土層準に掘り込みがあった形跡はない。そのため本住居状遺構は竪穴式ではなく、このAs-Sr混じりの土層は別要因によって形成されたものと推察される。

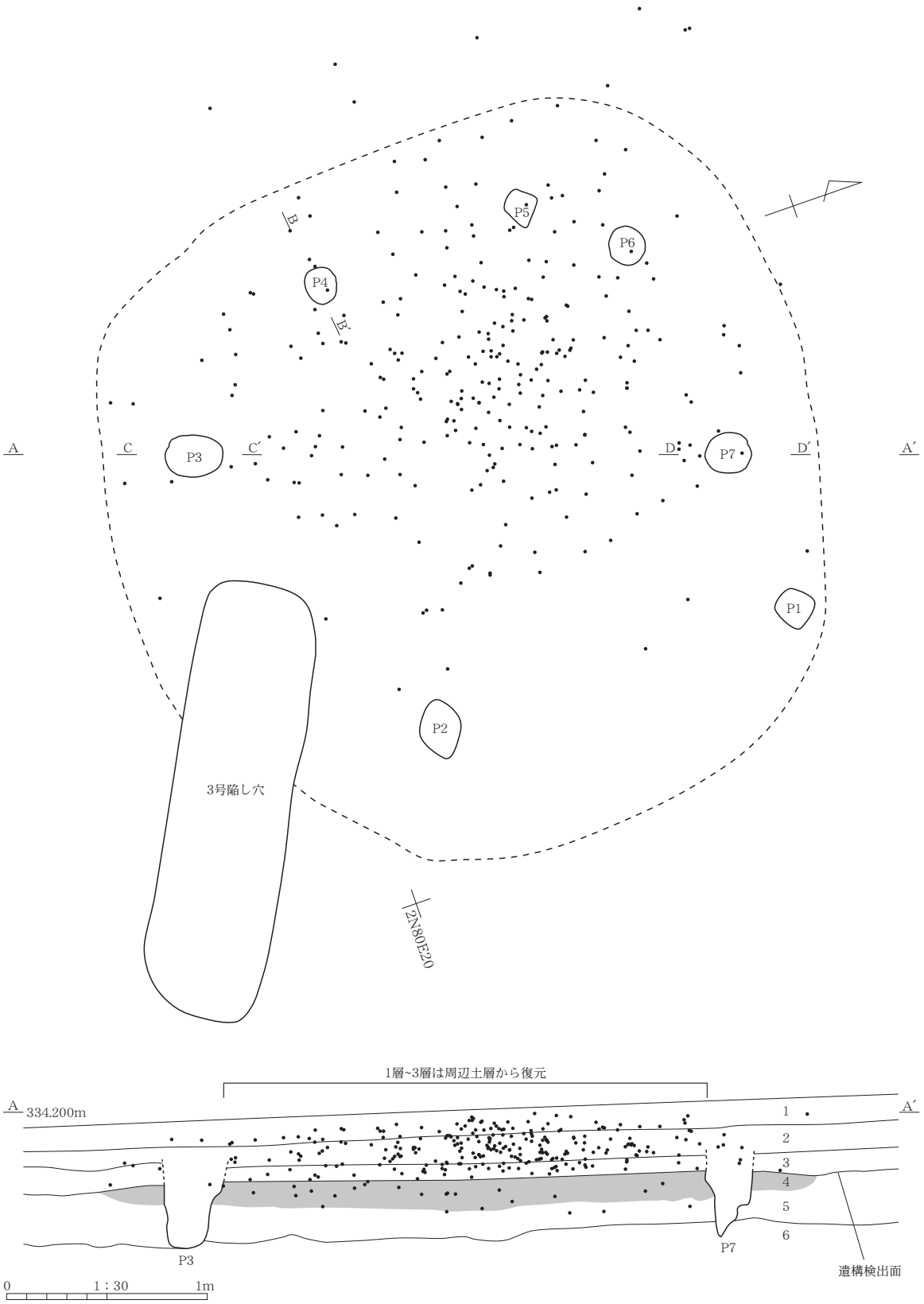
出土遺物に定形石器や石核がなく槍先形尖頭器製作に係わる剥片が大半を占める事から、予め分割した素材を携行し一定期間の滞在により槍先形尖頭器を製作した場であったと考えられる。

住居状遺構　平・断面図



第15図　第２文化層　住居状遺構（１）

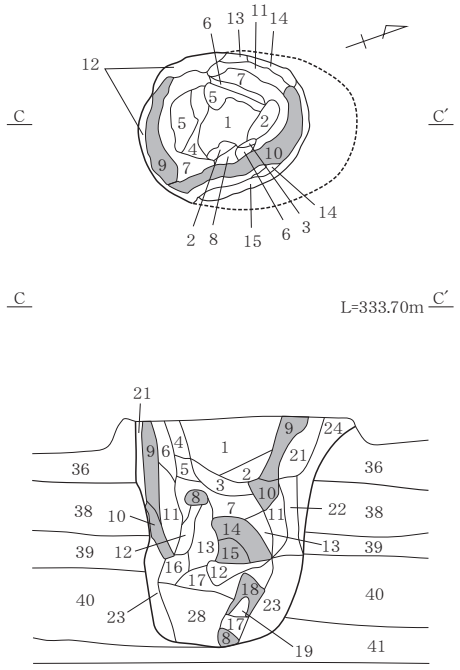
住居状遺構＋ブロック１



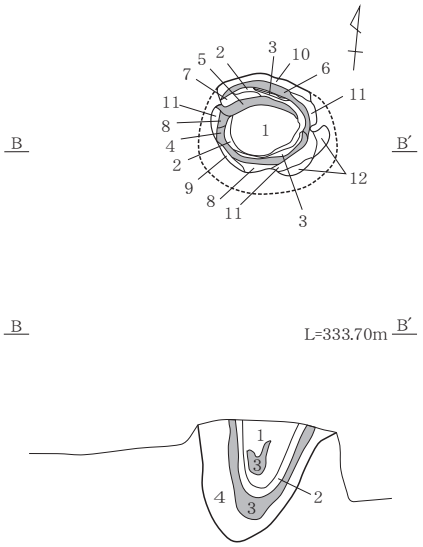
第 16 図　第２文化層　住居状遺構（２）

柱穴　平・断面図

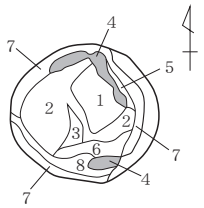
P3



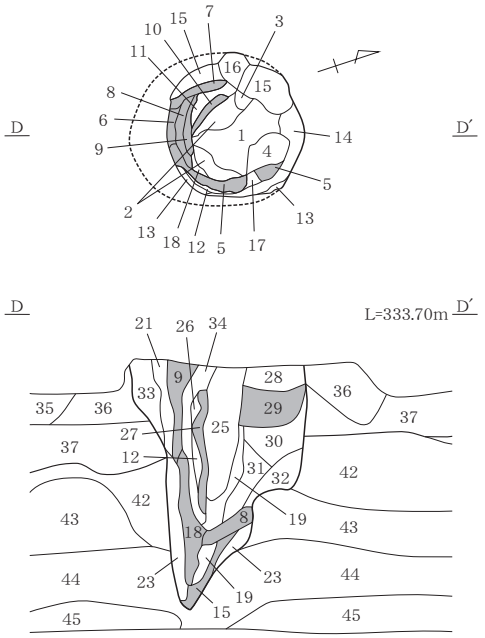
P4



P6



P7



凝縮層・拡充層

0　1：10　50cm

第 17 図　第２文化層　住居状遺構（３）

P3　平面

1：暗（茶）褐色土　As-Sr30% 程度含有。
2：暗（茶）褐色土　As-Sr10% 程度含有。
3：暗（茶）褐色土　As-Sr ほとんど含まず、色調明るい。
4：暗（茶）褐色土　やや As-Sr 混じる。
5：暗（茶）褐色土　2 層に類し、色調若干明るい。
6：明茶褐色土　As-Sr 若干含む。鉄錆層？
7：暗茶褐色土　As-Sr20% 程度含有。
8：暗茶褐色土　7 層に比べ、As-Sr 含有量が少なく，色調暗い。
9：黄灰色土　As-Sr 主体（ほぼ 100%）。炭化物若干混じる。
10：黄灰色土　9 層よりやや As-Sr 含有量少ない（90% 程度）。
11：黄灰色土　As-Sr50% 程度含有。
12：暗茶褐色土　As-Sr 若干散在。地山に類似。
13：暗茶褐色土　12 層より色調やや暗く、ざらつく。
14：暗茶褐色土　12 層に比べ、色調明るく、As-Sr 含有量が若干多い。
15：暗茶褐色土　As-Sr 若干含む。黄灰色土に近い色調を呈し、やや軟質。

P4　平面

1：暗褐色土　As-Sr30% 程度含有。炭化物若干含む。
2：（暗）茶褐色土　As-Sr 若干含む。鉄錆色を呈す。
3：黒色土　As-Sr 若干含む。
4：黄灰色土　As-Sr 主体（100%）。
5：黄灰色土　As-Sr 主体（100%）。4 層に比べ灰色が強い。
6：暗黄灰色土　As-Sr95% 程度含有。
7：暗茶褐色土　As-Sr50% 程度含有。
8：暗褐色土　6 層に類するが、色調より暗い。As-Sr80% 程度含有。
9：茶褐色土　As-Sr10% 程度含有。軟質。
10：黄灰色土　As-Sr90% 程度含有。第 4 層に類し、色調暗い。
11：暗黄灰色土　As-Sr70% 程度含有。
12：暗黄灰色土　As-Sr60% 程度含有。

P6　平面

1：暗茶褐色土　As-Sr（白色多し）70% 程度含有。
2：暗茶褐色土　As-Sr30% 程度含有。炭化物若干含む。
3：茶褐色土　As-Sr50% 程度含有。やや軟質。
4：黄灰色土　As-Sr 主体（90%）。
5：暗茶褐色土　As-Sr30% 程度含有。色調暗い。2 層より締まりあり。
6：暗茶褐色土　As-Sr20% 程度含有。色調暗い。締まりあり。
7：暗茶褐色土　As-Sr20% 程度含有。色調明るい。
8：暗茶褐色土　2 層に類するが、炭化物含まない。

P7　平面

1：暗茶褐色土　As-Sr40% 程度含有。色調明るい。
2：暗茶褐色土　As-Sr30% 程度含有。色調暗い。
3：暗茶褐色土　As-Sr70% 程度含有。明るい。やや締まりなし。
4：暗（茶）褐色土　As-Sr60% 程度含有。硬質。
5：黄灰色土　As-Sr80% 程度含有。色調明るい。
6：黄灰色土　As-Sr100% 近く含有。色調橙色に近い。
7：黄灰色土　As-Sr90% 程度含有。やや軟質。
8：黄灰色土　As-Sr100% 近く含有。色調やや明るい。
9：黄灰色土　8 層に類するが、色調明るい。
10：黄灰色土　9 層に類し、As-Sr90% 程度含有。
11：暗黄灰色土　As-Sr60% 程度含有。
12：黒色土　As-Sr ほとんど含まない。
13：暗茶褐色土　As-Sr20% 程度含有。
14：暗茶褐色土　As-Sr30% 程度含有。色調暗い。
15：暗（茶）褐色土　As-Sr20% 程度含有。やや暗い。やや締まりあり。
16：暗茶褐色土　As-Sr70% 程度含有。4 層より色調明るい。やや軟質。
17：暗茶褐色土　As-Sr10% 程度含有。やや締まりなし。
18：暗茶褐色土　2 層に類するが、色調明るい。

断面

1：黄茶褐色土　As-Sr 軽石粒を多く含む。締まり弱い。
2：黄茶褐色土　1 層よりやや暗い。As-Sr を含む。締まっている。
3：暗黄茶褐色土　As-Sr を含む。締まり弱い。
4：黄茶褐色土　1 層よりやや暗い。As-Sr を少量含む。締まっている。
5：黄茶褐色土　2 層と 4 層との中間層。締まり弱い。
6：黄灰褐色土　As-Sr を含む。微細砂粒（火山灰？）を若干含む。
7：黄茶褐色土　As-Sr を含む。締まり弱い。
8：灰色土　微細砂粒（火山灰？）凝縮層。非常に堅く締まっている。
9：白黄褐色土　As-Sr 拡充。非常に堅く締まっている。
10：灰褐色土　微細砂粒（火山灰？）凝縮層。As-Sr を若干含む。非常に堅く締まっている。
11：黄茶褐色土　As-Sr を若干含む。炭化粒をごくわずか含む。
12：暗赤褐色土　赤味を帯びる（鉄分の酸化？）。炭化粒を少量含む。非常に堅く締まっている。
13：黄茶褐色土　As-Sr をわずか含む。締まり弱い。
14：暗灰色土　10 層に準じるが、As-Sr を若干多く含む。
15：灰色土　微細砂粒（火山灰？）拡充。
16：暗灰褐色土　10 層と 12 層との中間層。
17：暗黄茶褐色土　As-Sr・炭化粒をごくわずか含む。締まっている。
18：黄茶褐色土　As-Sr を含む。堅く締まっている。
19：暗黄茶褐色土　締まり弱い。
20：茶褐色土　締まっている。
21：暗黄茶褐色土　As-Sr を若干含む。堅く締まっている。
22：黄茶褐色土　As-Sr をわずか含む。堅く締まっている。
23：暗黄茶褐色土　As-Sr をごくわずか含む。堅く締まっている。
24：暗黄茶褐色土　21 層よりやや暗い。As-Sr・炭化粒をごくわずか含む。堅く締まっている。
25：黄茶褐色土　1 層に準じるが、堅く締まっている。
26：赤黄褐色土　As-Sr を含む。第 12 層の酸化鉄分を少量含む。
27：暗灰褐色土　10 層に準じるが、暗く、As-Sr が少ない。
28：暗黄茶褐色土　As-Sr を含む。締まっている。
29：黄茶褐色土　As-Sr 拡充。堅く締まっている。
30：暗褐色土　As-Sr をごくわずか含む。堅く締まっている。
31：暗褐色土　As-Sr を若干含む。堅く締まっている。
32：暗褐色土　As-Sr を少量含む。締まっている。
33：黄茶褐色土　As-Sr を多く含む。締まり弱い。
34：暗黄茶褐色土　As-Sr を含む。締まっている。
35：黄茶褐色土　As-Sr 軽石拡充。締まっている。
36：黄茶褐色土　As-Sr を少量含む。締まっている。
37：黄茶褐色土　As-Sr を若干含む。締まっている。
38：黄茶褐色土　As-Sr をわずか含む。堅く締まっている。
39：黄茶褐色土　As-Sr をわずか、As-BP を若干含む。堅く締まっている。基本土層Ⅸ層相当層。
40：黄茶褐色土　As-BP を少量含む。堅く締まっている。
41：暗黄茶褐色土　As-BP を含む。堅く締まっている。
42：黄茶褐色土　As-BP を含む。堅く締まっている。
43：暗茶褐色土　As-BP を少量含む。堅く締まっている。
44：暗赤褐色土　As-BP 純層。基本土層Ⅺ層相当層。
45：暗褐色土　やや粘質。締まっている。

ブロック１（第 18 ～ 26 図・第 13 ～ 20 表・PL.11・54 ～ 59）

遺跡最南端の 1-A 区に位置し、住居状遺構と重なる。同文化層で最寄りのブロックはブロック３であるが、未調査範囲を挟んで北東に約 190m 離れている。As-Sr 直上を分布の中心としており、同テフラ上位から掘り込まれる住居状遺構柱穴と同時期である可能性がある。実質的に黒色頁岩のみを石材としたブロックであり、東西 3.3m× 南北 3.5m のほぼ円形の範囲に遺物が分布している。その密度は本遺跡の中では最も高く、分布の中心はブロック範囲の中央である。出土点数は 294 点で、そのうち 293 点が黒色頁岩の剥片類である。この中に尖頭器を製作する際に派生する特徴的な剥片（ポイントフレイク）が 34 点認められた。また、二次加工を施された剥片も 1 点混じっている。剥片同士の接合は何例か認められたが、石核を復元できるほどの資料はなかった。これらのことから、本ブロックではブランクの状態から製品（尖頭器）を製作する、最終的な加工が行われていたと想定される。

【二次加工ある剥片】

1 は、剥片剥離後、打点部に粗い二次調整を加えた剥片である。本ブロックでは明らかに二次加工と判断できる唯一の資料である。横長剥片で、使用した痕跡はなく、二次加工の目的ははっきりしない。

【ポイントフレイク】

2 から **32** までの 31 点は、尖頭器製作に伴う剥片である。剥片の背面に残る求心的な複数の剥離と、打

第 13 表　第２文化層　ブロック１出土石器組成表

器種 / 石材	ﾅｲﾌ形石器	尖頭器	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	彫器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	石刃	ﾌﾞﾗﾝﾃｨﾝｸﾞﾁｯﾌﾟ	剥片・砕片	ﾎﾟｲﾝﾄﾌﾚｲｸ	礫	合計	組成比（%）
黒色頁岩					1					258	34		293	99.7
粗粒輝石安山岩												1	1	0.3
合　計					1					258	34	1	294	100
組成比（%）					0.3					87.8	11.6	0.3	100	

第 14 表　第２文化層　ブロック１出土石器一覧表（１）

掲載No.	取上No.	器種	石材	長（cm）	幅（cm）	厚（cm）	重（g）	標高値（m）	備　考
BL1-1	309	RF	黒色頁岩	1.9	3.6	0.8	5.14	333.919	
BL1-2	299	PF	黒色頁岩	1.2	1.5	0.4	0.38	333.918	
BL1-3	207	PF	黒色頁岩	1.8	1.3	0.3	0.51	333.864	
BL1-4	329	PF	黒色頁岩	1.8	1.4	0.3	0.59	333.966	
BL1-5	264	PF	黒色頁岩	1.4	1.8	0.3	0.40	333.999	
BL1-6	310	PF	黒色頁岩	1.9	2.1	0.4	0.55	333.792	
BL1-7	230	PF	黒色頁岩	2.2	1.4	0.4	1.11	333.918	
BL1-8	189	PF	黒色頁岩	2.1	1.9	0.6	1.92	334.088	
BL1-9	330	PF	黒色頁岩	2.8	1.2	0.6	1.35	333.892	
BL1-10	39	PF	黒色頁岩	2.9	2.1	0.8	3.12	334.152	
BL1-11	236	PF	黒色頁岩	1.6	1.6	0.4	1.01	333.868	
BL1-12	304	PF	黒色頁岩	1.9	2.3	0.3	0.94	333.992	
BL1-13	45	PF	黒色頁岩	1.6	2.4	0.6	1.74	334.142	
BL1-14	269	PF	黒色頁岩	1.2	1.9	0.4	0.65	333.812	
BL1-15	14	PF	黒色頁岩	2.0	2.7	0.5	2.44	334.065	
BL1-16	226	PF	黒色頁岩	1.8	1.9	0.4	1.06	333.937	
BL1-17	21	PF	黒色頁岩	2.3	3.0	0.5	2.77	334.079	
BL1-18	29	PF	黒色頁岩	2.8	2.7	0.6	3.28	334.124	
BL1-19	307	PF	黒色頁岩	2.7	2.8	0.7	4.08	333.796	
BL1-20	51	PF	黒色頁岩	3.6	2.6	0.7	3.25	334.115	
BL1-21	87	PF	黒色頁岩	4.9	6.0	1.8	8.36	334.018	
BL1-22	186	PF	黒色頁岩	4.1	6.6	0.9	16.36	334.012	
BL1-23	191	PF	黒色頁岩	3.2	2.5	1.0	4.80	334.027	
BL1-24	287	PF	黒色頁岩	3.2	2.7	0.8	6.04	333.910	
BL1-25	262	PF	黒色頁岩	2.8	3.0	0.5	2.85	333.969	
BL1-26	177	PF	黒色頁岩	2.8	3.2	0.6	4.85	333.987	
BL1-27	231	PF	黒色頁岩	2.9	3.8	0.9	2.58	333.876	

器種別分布図

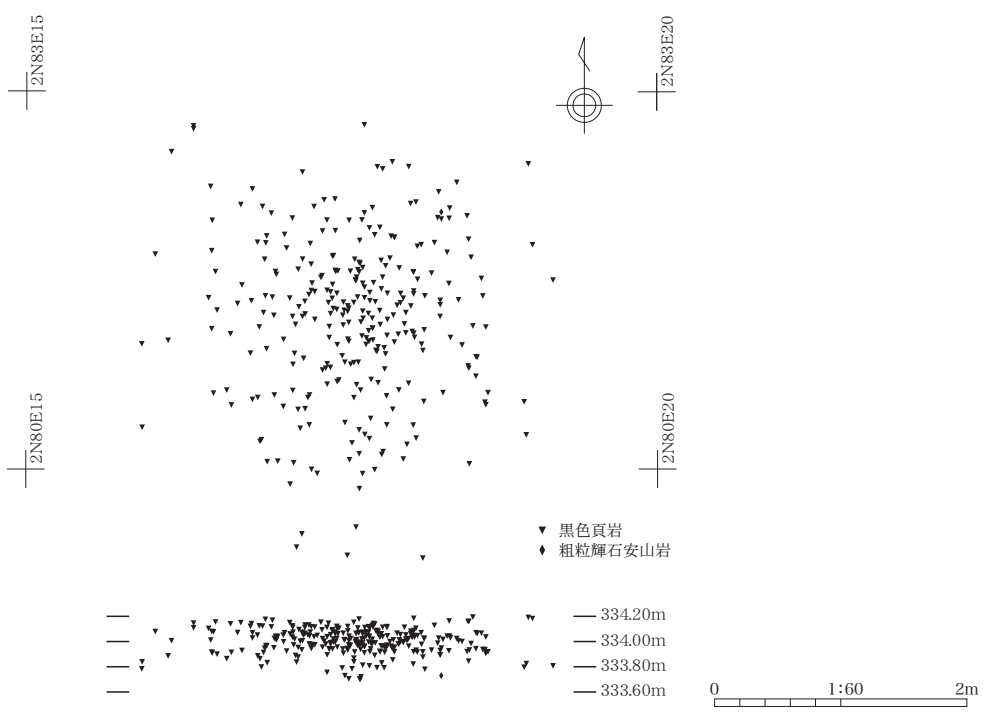
第 18 図　第２文化層　ブロック１分布図（１）

点付近に集中する小剥離が特徴的である。やや大形の資料も混じる。

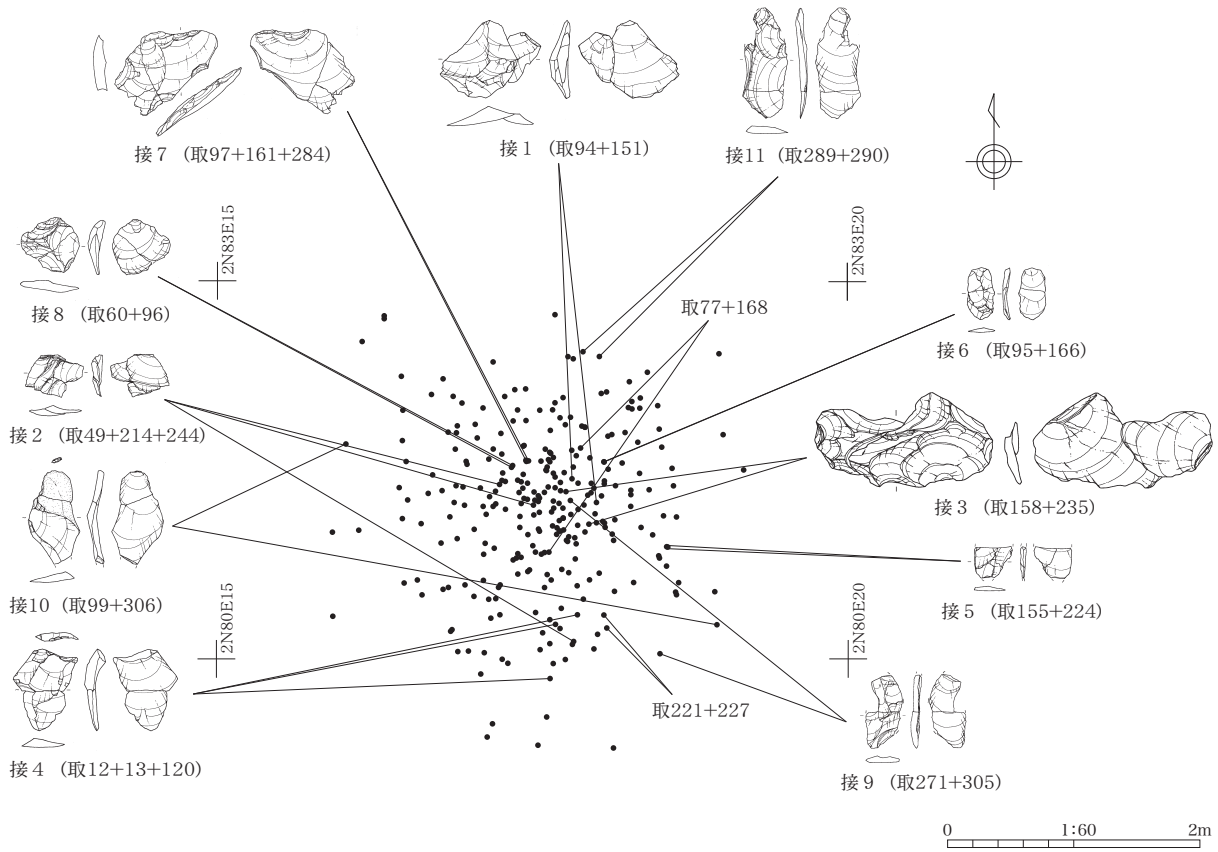
【剥片類】

33 以降は二次加工されていない剥片である。打点を変えつつ比較的小型で不定形の剥片を剥離させていることが看取され、中には打面調整を行ったものもみられる。

石材別分布図

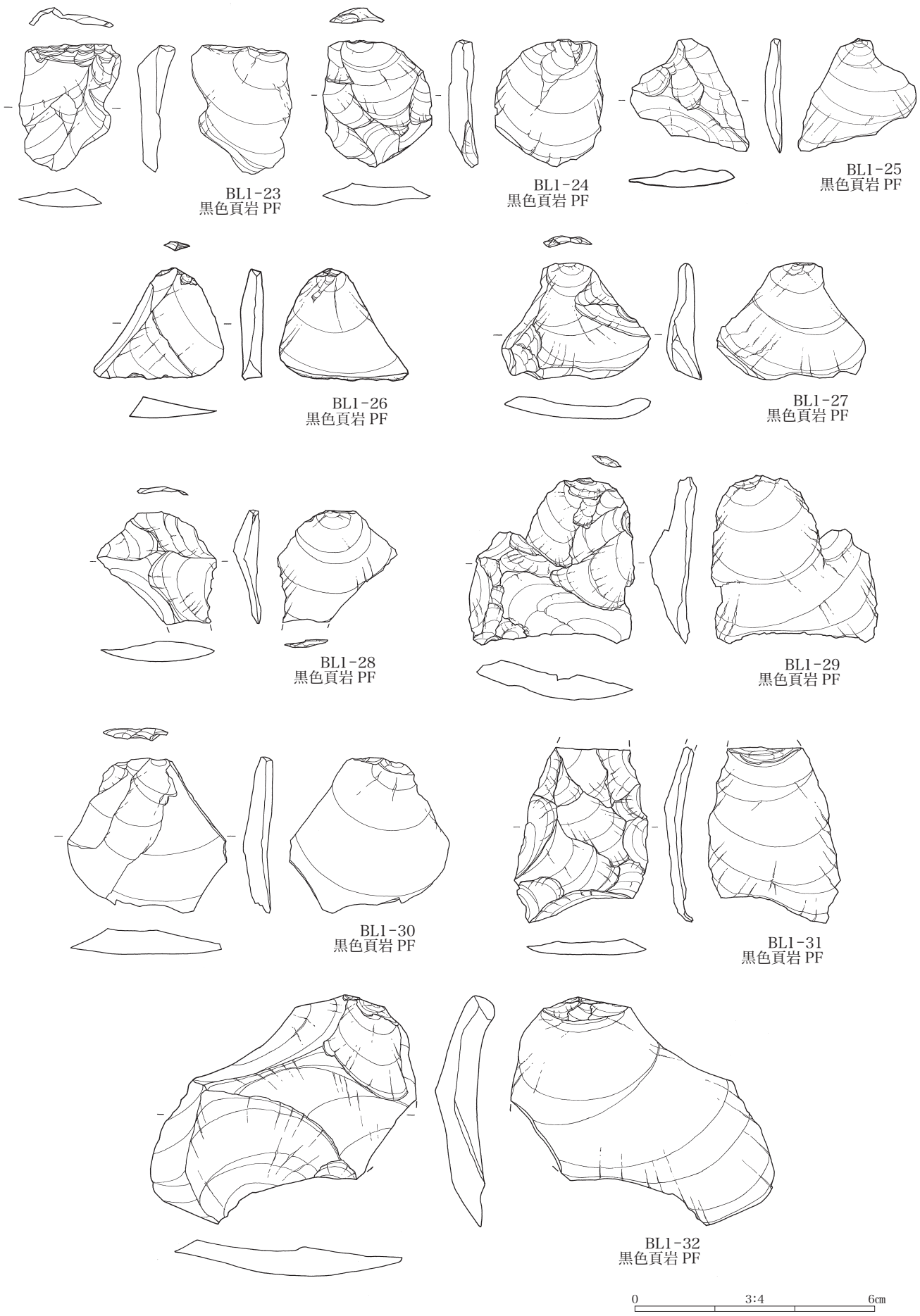


接合資料分布図

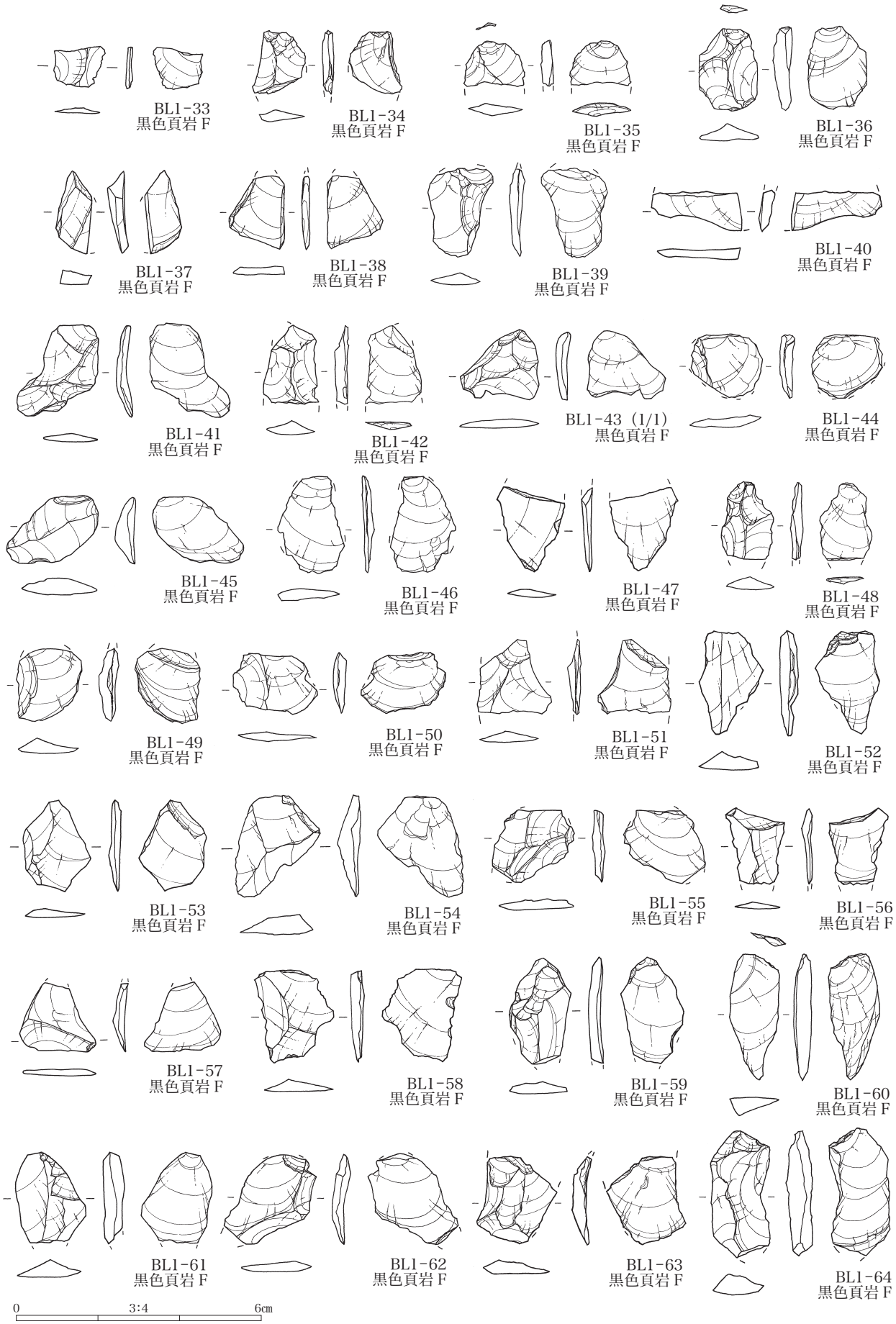


第 19 図　第２文化層　ブロック１分布図（２）

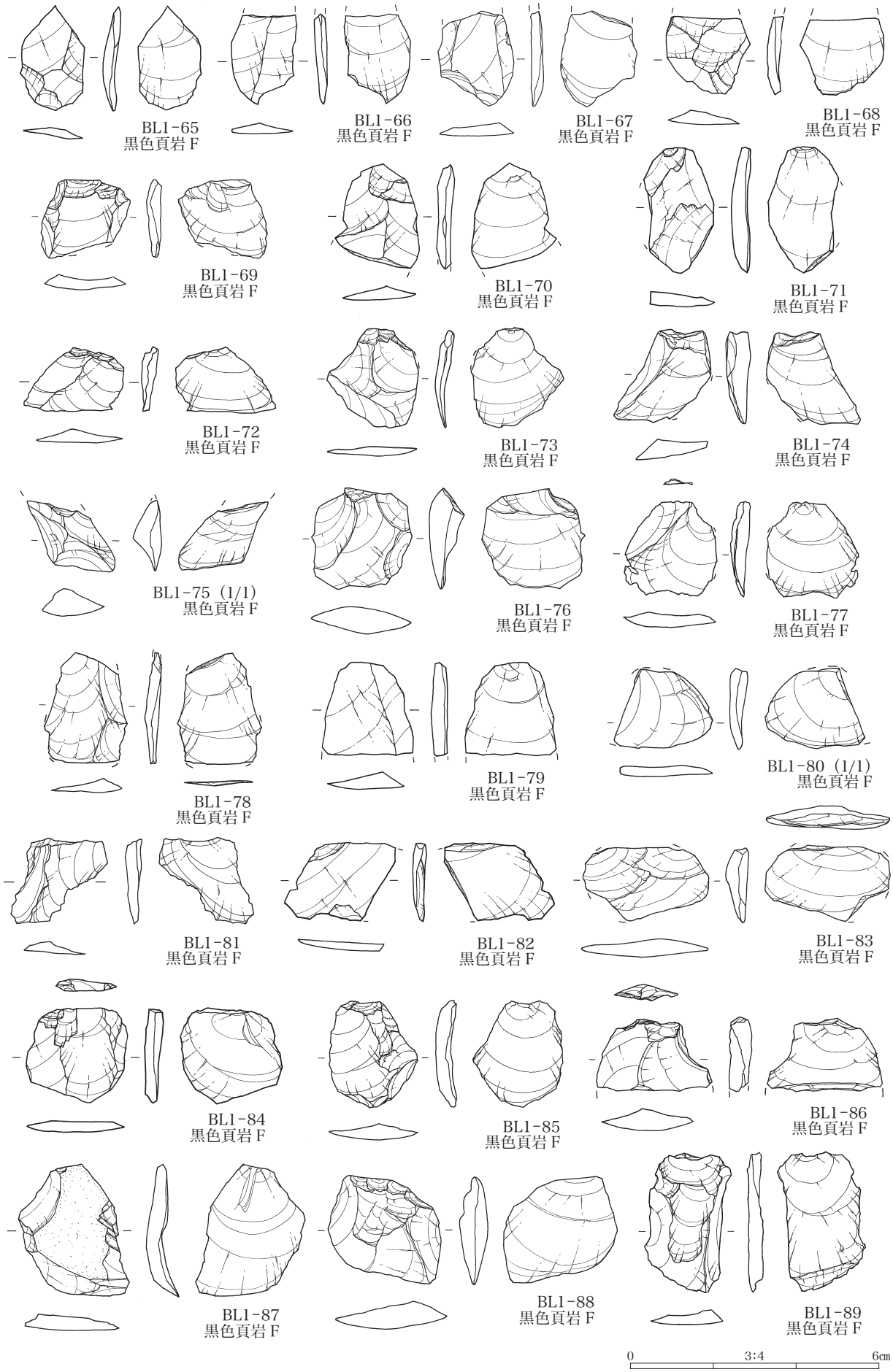
第 20 図　第２文化層　ブロック１出土石器（１）



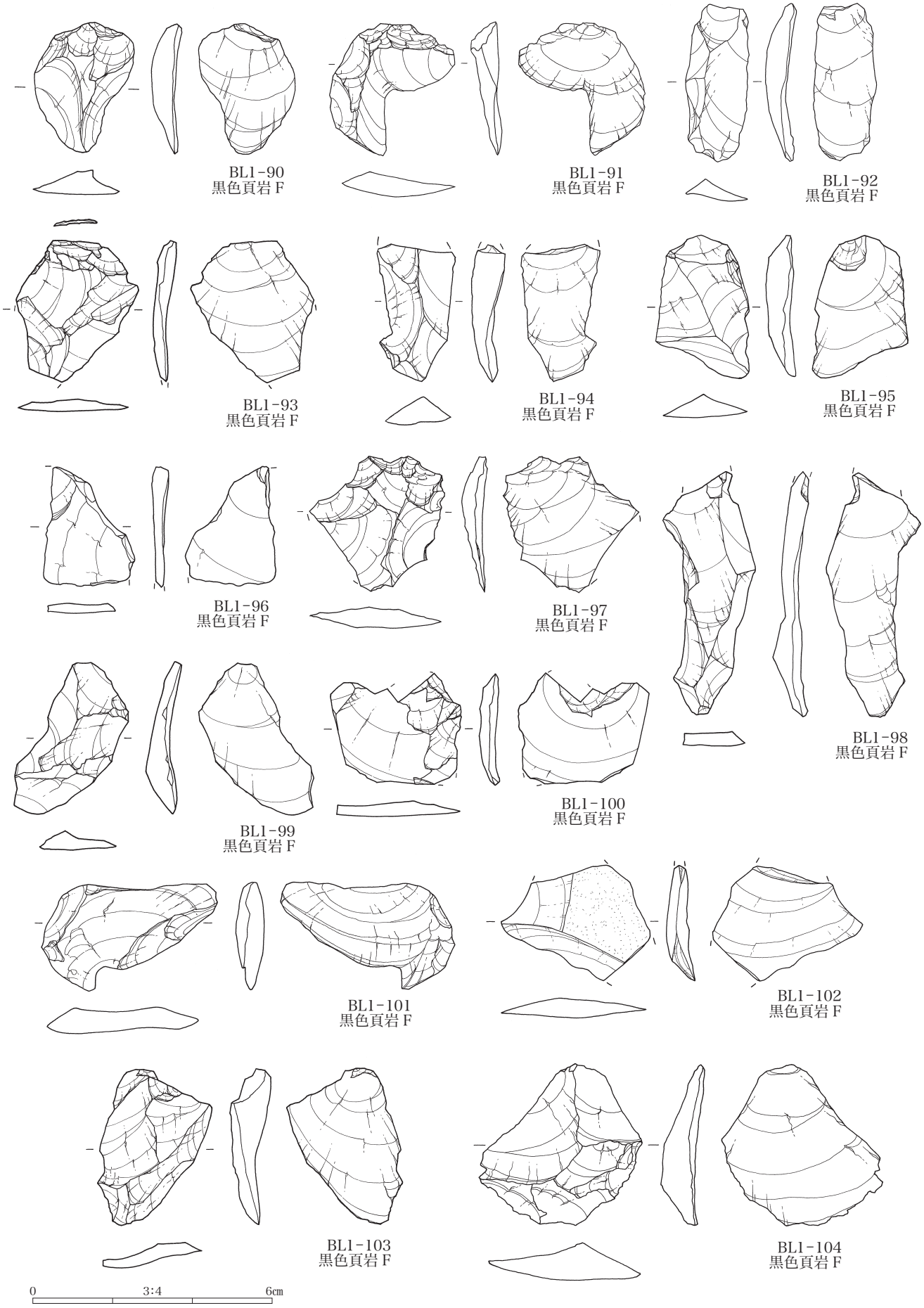
第 21 図　第２文化層　ブロック１出土石器（２）



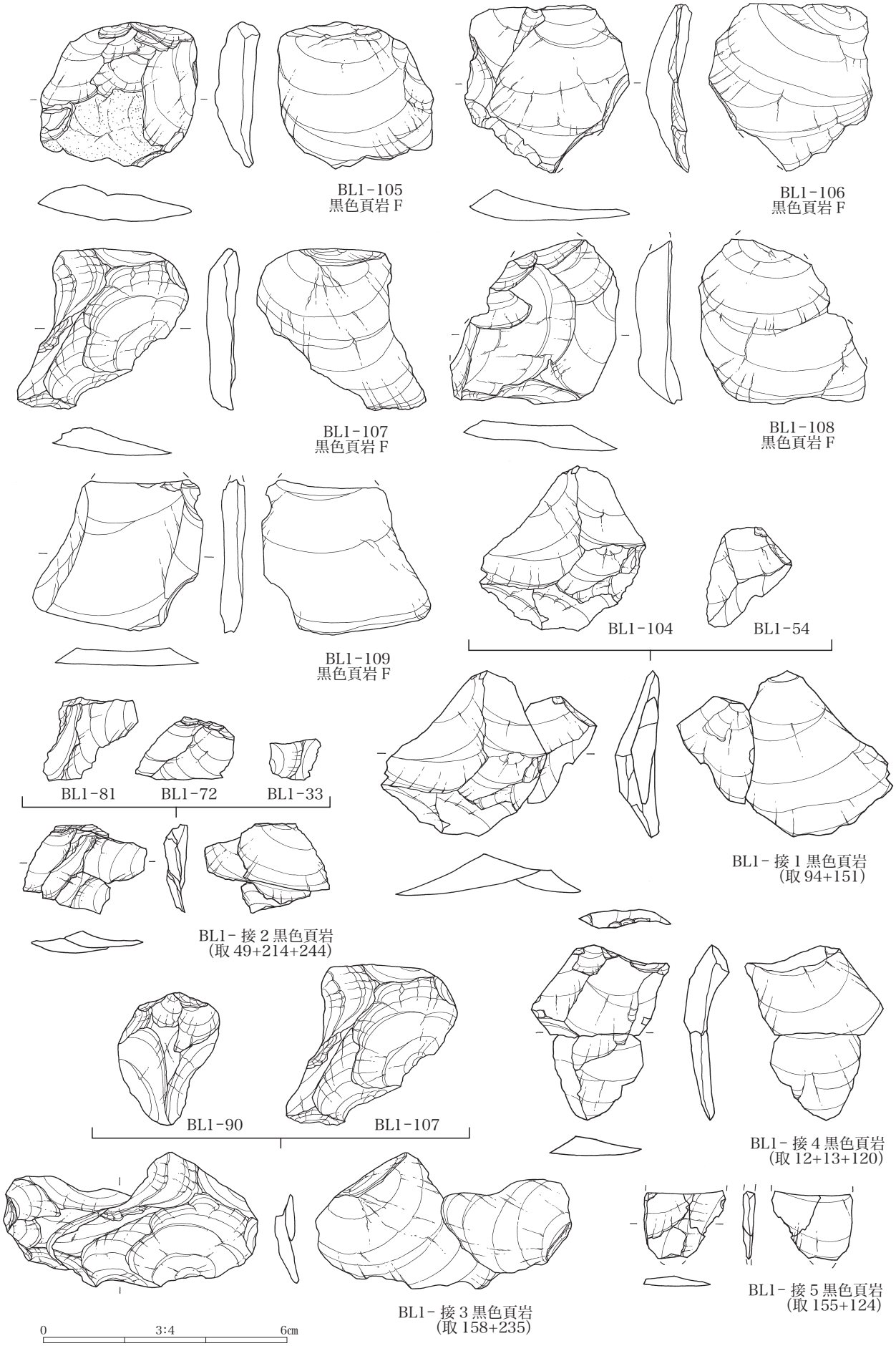
第 22 図　第２文化層　ブロック１出土石器（３）



第 23 図　第２文化層　ブロック１出土石器（４）



第 24 図　第２文化層　ブロック１出土石器（５）



第 25 図　第 2 文化層　ブロック 1 出土石器（6）